
帝国物語 ～白百合のマリア～

緋鯉ナオキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国物語 ～白百合のマリア～

【Nコード】

N6623H

【作者名】

緋鯉ナオキ

【あらすじ】

『旧世界』が滅び、『新世界』となった時代。エコーズ、マルスオフといった怪物達が世界を蹂躪し、人々の生活を脅かしていた。それらに対応するため国々は合併を繰り返し、大帝、魔帝、剣帝、賢帝、武帝という5大帝国連合を結成。エコーズ達と明けることのない戦争を繰り返していた。そんな中、『ハンター』ソネットはある少女を護衛する依頼を受ける。『十の獣』と呼ばれるS級犯罪者とエコーズに少女は狙われていた。息子のダンテ、帝国軍のカンタロウ、キクと共に、『女神』と呼ばれる少女ノゾミを護衛しつつ目

的地へと旅立つこととなる……。——これはある親子の物語。

帝国物語の始まり

高度な機械が動き、センチネルと呼ばれるロボットが働く世界。最先端の科学と文化が人々の生活に浸透し、文明は発展していた。しかし、その世界は突然終わりを迎えた。

空を赤い花びらが覆いつくし、人々は怪物へと変貌していく。後に『紅姫現象』といわれたこのウイルスは、13人の少年と1人の女を除いてすべての人類は絶滅させた。人外の者が蠢く世界に残された13人の少年と1人の女は、新世界を造るべくそれぞれに名をつけ、神と名乗った。

——神々が死に絶え、力のみの存在となった世界。旧世界と比べ、そこでは魔法と剣が発展し、妖精や獣人といった異種族との交流があり、人々は機械よりも自然と共に共生することを選んだ。その世界で人類の悩みの種となっていたのはエコーズ、マルスオフといった怪物達だった。特に知能の高いエコーズには1国の王ですら手を焼き、彼らに滅ぼされる国が後をたたなかった。そこで国々は合併を繰り返し、5大帝国を造りあげ、エコーズ達に対抗していった。また、人間達の中には、13人の神の力を扱え、身体能力が向上する『赤眼化』と呼ばれる高位魔術を発動できる者も出てきた。

エコーズ達と人間達の戦いは未だ続いている。

『赤い零』での用語集

■ ハンター（なんでも屋）

帝軍や国軍といった資格を持たない賞金稼ぎ。規約に制約されず、自由に賞金を稼げるが、定期給与や福利厚生といったサポートを受けられないのが難点。この世界での大半の賞金稼ぎはハンターのことを指す。主に仕事はギルドやレテランスからもらい、まれにだがマルスオフやエコースと戦うこともある。

■ 帝国軍第四類（死帝）

5つある帝国の中で大帝が管轄する軍隊。通称『死帝』と呼ばれている。最も危険度の高いマルスオフレッド認定やエコース、国際指名手配犯であるA級、S級犯罪者と戦う戦闘のエキスパートである。少数精鋭の遊撃部隊で1〜5人で行動している。元は賞金稼ぎだった者が多い。国家資格の証である右手の甲に『大帝国の国章』をもち、『赤眼化』と同時につかびあがるシステムになっている。定員は50名でそれぞれがランクづけされている。採用試験の条件が『赤眼化』であるため全員が高位魔術を扱える。ランク20位から上は大帝国永住権を持っている。

■ 神の血脈（絶滅種）

1 3神の1人、『2番目の息子』ファーストが及ぼす影響により生まれた者。出生した時から『赤い眼』と『烙印』を持ち、使用不可とされる魔術、『ファースト』の力が使える。そのためか人々から畏怖され、恐怖の対象もしくは狂信の対象となっていた。しかし、

ファーストが『力のみの存在』となつたため『神の血脈』を持つ者は普通の人間と戻っていった。現在はその存在を確認されていない。

■ マルスオフ（遺伝子破壊された怪物）

13 神の1人、『5 番目の息子』マルスにより生み出された怪物達。人々から怪物達の総称としてそう呼ばれている。『赤い瞳』を持ち、姿は怪物と呼ぶにふさわしく醜い。大地を通っている『神脈』を嫌い、森の奥や沼地など人が滅多に通らない場所に巣をつくっている。帝国はマルスオフをブルー、イエロー、レッド、ダークと区分しており、マルスオフレッド認定は数が少なくかつ賞金額が高い。

■ エコーズ（旧世界の帰還を呟く者）

神々の失敗作。旧世界の人間。『1 番目の息子』ロードの戯れにより生み出された者。様々な呼称がある。マルスオフと比べて言語能力があり常に「かえりたい」と呟くためエコーズと呼ばれた。数の多いマルスオフとコンタクト・リンクし、集団で襲ってくるのでこの世界では脅威的な存在として扱われている。大体1体のみで行動している。姿は人型から獣型まで様々である。特に言語能力が特に高く、帝国に攻め込んだ24体のエコーズのことを『24エコーズ』と呼ぶ。

■ ハウリング・コール

エコーズの特異能力の1つ。近くにいるマルスオフを呼び出すことができる。すべてのエコーズにこの能力が備わっている。強力なエコーズになると、空間からマルスオフをワープさせ、呼び出すことができる。

■ コンタクト・リンク

エコーズの特異能力の1つ。相手の意識を支配し、操ることができる。主にエコーズはマルスオフに行う。他にも、『副人格』として相手の意識に潜り込む時にも使われる。単純な意識をもつ者には簡単だが、複雑な意識をもつ人間には難解となる。

■ パーフェクト・コンタクト

『主人格』と『副人格』が完全に統合すること。『主人格』が優勢となって『副人格』の力を吸収すること。

■ S級犯罪者（罪名犯罪者）

人の名を持たぬ者。犯罪等級の中では最高であり最悪の犯罪者達。彼らは人の名で呼ばれることはなく、『獣の名』で呼ばれるようになる。自らマルスオフと合成し、その力を得た者が多い。彼らのことをマルスイブと呼ぶ。

■ 赤眼化（神との同化）

13人の神と同じ『赤い眼』と『神の印』をしているためそう呼ばれるようになった。生体研究のマクベスによると、空中に浮遊しているウィルス『紅姫』を無害にする抗体反応が高まって、通常の人間が神の力を得たと言われている。実際黒い瞳を持つ者も、『赤眼化』することによって赤い瞳へと変化してしまう。『ロードの印』と呼ばれる印が右目から下半身に伝わり、『赤眼化』は完了する。この状態になった人間は身体能力が向上し、『13神の力』も一桁詠唱で扱えるようになるため高位魔術師なみの実力をもつ。欠点は持続時間が短く、無理な『赤眼化』を続ければ身体の細胞破壊（人

体の白化現象）が進行してしまう。赤眼化できる人間の数は少なく、帝国諸国は強力なマルスオフやエコーズと唯一戦闘できる希少な人材として優遇している。

■ 13神の力（第一級高度魔力）

13人の神の魔力を扱うこと。力はバリエーションがあり、術者によって個々の特徴が出る。通常の術者は長い詠唱を唱えなければならないが、『赤眼化』したものは『神の名＋一桁詠唱』で術を發動できるため一桁詠唱と呼ばれている。攻守ともに強力な魔術を發動できる。その力は魔術の基礎となっている。また、エコーズやマルスオフ対策として有効とされている。

『魔剣術』<『四天』<『特殊な術』と術が難解になっていき、『魔剣術』が最もよく使用される。

■ 13人の神（力のみの存在）

新世界を構築した神々。『ロード』が世界を造り、旧世界から生き残った女性『望』が子を宿し、『ファースト』が人々に『紅姫』に対抗できる抗体を与え、『ザクロ』が知恵を分け与えたと言われている。他の神は主に怪物達から『望』の護衛をしていた。

■ 外なる神

旧13神に代わる、新たな神の総称。

■ エリニユス（3人の女神）

巨大な宗教団体。いつ発祥したかは不明。3人の女神、『メメント（生への侵犯）』『リブラ（魂の葬送）』『クノックス（閉じた

時間)》を信仰している。各帝国諸国と繋がりがあり、また各国から信者が集まってきている。永世中立国『ノルニル』の教皇『アシエル』が統括している。表ざたは慈善事業にいそしみ、多くのボランティアが働いているが、様々な派閥が存在し、裏では売春、薬物、非合法な行為など問題も多い。

■ 六枚の翼

エリニウスから派生した宗教団体。『女神は1人であり六枚の翼を持ち世界にはばたく』という主張をしている。

■ 烙印の瞳

エリニウスから派生した宗教団体。『赤い瞳に烙印を持つ女神こそが世界に福音をもたらす』という主張をしている。

■ 漆黒の服

エリニウスから派生した宗教団体。『闇よりも黒き服を着た女神が世界を食い尽くす』という主張をしている。

■ ノルニル

帝国諸国によって認められた永世中立国。各国の金融機関を保有し、強力な軍隊を保有している。『戦争禁止区域』として指定されている。

■ ロストナンバー（神が失った数字）

神が刻む数字。神が失った数字を持つ者。賢帝直属の軍隊であり、

大帝の帝国軍第四類と対抗するためにつくられた部隊。死帝と同じくマルスオフやエコーズ、武装犯罪者が戦闘の中心。ナンバー？（1）〜M（1000）までであるが、教授達の過酷な試験により生き残っているのはわずか18人で、ナンバーもバラバラである。ややこしいのでナンバーを統一しようという命令が賢帝王から出されたが、体に刻み込まれたナンバーを変換する技術がまだ開発されておらず、そのままとなっている。主に賢帝に攻めてくるのは機械体のセンチネルが多いため、物質召還を得意としている。その能力は赤眼化と同等である。

■ ギルド

各国の有力な商人が集まって造られた組織。ハンターの仕事の斡旋もギルドが行っている。

ハンターの仕事だけではなく、様々な仕事を紹介してくれる。徹底的にネットワークを発展させていったので情報が集まりやすい。そのため帝国諸国との関係も深い。

ハンターの職能資格等級も作られており、ギルド独自の信頼性がある。1st〜3st（上位クラス）、4st〜6st（中堅クラス）、7st〜10st（下位クラス）と区分されている。

■ レテランス

帝国諸国の軍が出資して造られた組織。主に特殊軍隊の仕事斡旋を担当している。

登録料、手数料無料のため、ギルドでは受け入れられない仕事、登録料を払えない町村などが仕事を持つてくる。それゆえか、高度で難関な仕事が多い。唯一法令違反の仕事だけは受け付け拒否されている。門は広いためハンターにも仕事を斡旋してくれるが、手続きが複雑でめんどくさいため、その敷居の高さからあまり来ない。

ただ、報酬額はよく、ハンターの一部の上位者は積極的に利用している。

■ 紅姫（赤い花びらのウイルス）

新世界に浮遊する殺人ウイルス。旧世界ではこのウイルスにより人類は絶滅した。新世界の人間には抗体があるため、もはや無害のウイルスとなっている。

■ 紅姫現象（滅びの予兆）

赤い花びらが世界の空を覆うこと。この現象が起こるのは、世界が崩壊する前兆だと言われている。実際旧世界ではこの現象がおき、人類は絶滅した。

13 神の魔力集

■ 神々のその後

新世界になり、平穏が続く中、13人の神々の内部で、ある争いが起った。唯一の女性である望を巡って戦いが起きてしまったのだ。ロコ、クラウン、ランゲ、コンスティン、インバルン、エンプネスはザクロに敗れ、そのザクロもファーストに敗れた。しかし、ファーストをザクロから庇った望はその命を落としてしまう。それがきっかけとなり、均衡を保っていた神々の力のバランスが崩れ、それぞれが勝手な行動をし始めた。

自らの遺伝子を残せない事に絶望したマルスとグリードは、世界をもう1度滅ぼそうと生物の品種改良に手を出し、マルスオフという最悪の怪物を造りだした。

レパードとレトリックは望の細胞から新たな母体を造り、新人類なるものをこの世界に誕生させようとしていた。

ファーストは再び望に会うべく世界の改変を企んだ。

——しかし、これらの野望は新世界の人間によって阻止され、唯一残ったロードは新たな母とともにこの世界から消えてしまった。

そして新世界に神はいなくなった。

《特殊な術を使う》

『13番目の息子』レパード

【魔法】幻影、幻術

【特徴】老人のような姿をしていたらしい。

『12番目の息子』ロコ

【魔法】物質を操る

【特徴】遊び好きで、戦略家だったらしい。

『11番目の息子』クラウン

【魔法】模倣

【特徴】本当の姿は13人の中でも見た者はいない。

《四天と呼ばれる魔術》

『10番目の息子』ランゲ

【魔法】水

【特徴】背に水色の翼がはえていた。おしゃべりだったらしい。

『9番目の息子』コンスティン

【魔法】監視

【特徴】背に灰色の翼がはえていた。無口。

『8番目の息子』グリード

【魔法】生命

【特徴】背に黒い翼がはえていた。マルスと組み世界を滅ぼそうとしたことがある。

『7番目の息子』インバルン

【魔法】炎

【特徴】背に赤い翼がはえていた。活動的だったらしい。

《剣に魔力を宿らせる魔術》

『6番目の息子』エンプネス

【魔法】重力

【特徴】巨人だったらしい。

『5番目の息子』マルス

【魔法】風

【特徴】マルスオフを生み出した張本人。

『4番目の息子』ザクロ

【魔法】無

【特徴】神々を殺害した張本人。

『3番目の息子』レトリック

【魔法】氷

【特徴】妖精の王のように美しかったらしい。

『2番目の息子』ファースト

【魔法】？

【特徴】世界を再び改変しようとしていたらしい。金色の目をもち、13神の中では最強の強さと魔力を誇った。

《神と呼ばれた者》

『1番目の息子』ロード

【魔法】？

【特徴】新世界を造った造物神。

メインキャラクターの紹介

《ハンター》…一般的な賞金稼ぎ。

『ソネット・マクベル』

【性別】女

【年齢】18歳

【職種】ハンター（Fst・Cクラス）

【特徴】野性的な茶髪のウルファットでグラマーな体型をしている。目が細いためか、実年齢より老けて見られる。細身の外見をしているが力は強く、ヴィーキング・ソードという大剣を背に背負う。赤い宝石のイヤリングを大切にしている。ある事件がきっかけとなり、ダンテの母親となる。

【性格】前向きで過去は振り返らない性格。息子であるダンテを溺愛している。

『ダンテ・マクベル』

【性別】男

【年齢】13歳

【職種】ハンター

【特徴】銀の髪と目が特徴的な少年。ロングソードを背に背負っている。その美しい姿から年齢を問わず、女性の目を惹きつける。

【性格】 妙に大人っぽい態度をするが、本質は子供なので人懐っこく素直。

《帝国軍》：大帝国の精鋭部隊

『キク・マーガレット』

【性別】 女

【年齢】 20歳

【赤眼化の印】 テファ・大帝国紋章『オピオン』

【職種】 帝国軍第四類所属（死帝ランク11位）

【特徴】 美しいロングの金髪を持ち、目も碧眼。大帝国支給の剣と特注のプレートアーマーをしているが、鎧を着るのが嫌で上半身しかつけておらず、下半身は特注のショーツをはいている。基本下着はつけない派。背は同年齢の女性と比べて低く、典型的な幼児体型。

【性格】 楽天的で子供っぽい、悪戯好き。ただ戦闘になるとリアルリストで正義感が強い所がある。暇さえあれば櫛で髪をといっている。

『カンタロウ』

【性別】 男

【年齢】 21歳

【赤眼化の印】テト・大帝国紋章『オピオン』

【職種】帝国軍第四類（死帝ランク23位）

【特徴】細身の長身で、長髪 of 黒髪を後ろでまとめている。和風の着物を着ており、『雷切丸』という刀を持つ。口に何かを咥えるのが癖。茄子が絶対に食べられない。

【性格】慎重で気配り屋。「くわな」という口癖がある。相棒のキクに気苦労が絶えない。

《神の血脈》：13神の一人、ファーストの影響によって生まれた者のこと。

『ノゾミ』

【性別】女

【年齢】12歳

【特徴】『神の血脈』である『赤い瞳』と『烙印』を持つ。体格は華奢で、黒髪をバレッタでとめハーフアップにしている。リネンで造られた鎧の下に、子供用のスカートの修道服を着ており、サイズが合っていないのだが気にしていない。名前を区切る癖がある。

【性格】年齢のわりには感情が少なく無表情。歌を歌うのが好きで、動物に懐かれる。孤独好き。

プロローグ

《お前の望みを聞いてやろう——なぜなら意味もわからず処刑されるのだから》

『プロローグ：ある少女の処刑』

——鐘が鳴っていた。

その鐘は結婚式やパレードとは違い、異様な重さを町に響かせていた。太陽は沈み、空は赤い色に染まっている。夕刻だというのに町通りは人が集まってきていた。山に囲まれ、小さな町で人口は少ない。その8割が外に出て、直線上に並んでいるのだ。皆深刻そうな表情をしており、笑っている者は1人もいなかった。

小さな子供は何が起こっているのか理解できず、ただ親の膝や手を離さない。多少大きい子供は理解しているのか親と子を守るように前へと出ている。町の大人達はこれから起こることを予想しているのか皆固い表情で通りの道を眺めていた。

黒い鳥が町の屋根へとやってきた。夜行性の虫もそのいくつもある足を這わせ、家の壁へと張り付き動きを止めた。町の外で野犬の遠吠えが聞こえる。この静寂の中、小さな嗚咽でさえ皆の耳に行き渡った。

町通りの遠方から、今日行われる『死刑』の対象が見えた。

重い牛や馬などの大型の動物の死体を乗せる荷台に『罪人』は乗せられていた。町をグルリと一周してきたのだ。まるで見物人達を楽しませる希少動物のような扱いだった。町の人々は『罪人』を睨むばかりで何もしない。声をかければ喉がつぶれる、触れれば手が腐ると信じられているからだ。子供達もその『罪人』に怯えて何もできなかった。

二頭の痩せた馬に引かれたその荷台の右隣には、神父が聖書を持ち歩いていった。左隣には死刑人が布のマスクをつけ一緒に歩いている。2人は無表情のまま罪人と共に死刑台へと向かっていた。

罪人は両手を後ろで縛られていた。土台の荷台は堅く、バランスは悪い。服は汚れた布の服を着せられており、肌が露出するほど引き裂かれている。顔を俯けたまま罪人は荷台の上に座り、何も答えずただ死刑を執行されるのを待っていた。

——罪人はまだ若い女だった。

茶色の前髪で目は隠され、腕からは男性のような筋肉の筋が走る。体格は小さいが、肩幅はしっかりとしており、一見すれば誰もが男と判断しただろう。だが、服の布地から出る、胸の膨らみは誤魔化すことができない。まだ年端もいかない少女なのである。

この少女が何をしたのか町の大人達は皆知っていた。まだ理解の乏しい子供ですら何か悪い事をしたのだという感覚はあった。罪人の少女が通りを進むたびに黒い鳥が血のついた口を大きく開き「ギャー！ ギャー！」と騒いだ。まるで罪人に罪の深さを教えるかのように。

——夕方の火の光が、罪人の少女を照らした。

光を遮っていた町のシンボルである時計塔の影から抜け出たのだろう。少女は突然の光に驚き、現実をシャットアウトさせていた両

目をつい開いてしまった。見たこともない真っ白い鳩が少女の目の前を通り過ぎた。舞うように落ちる白い羽の向こうで、少女はあるものに注目した。乾いた唇が微かに動いた。幼さ特有の大きな目が爛々と輝いていた。

少女が眺めていたもの——それは教会の天窓の外に設置されていた男の神の像だった。光の屈折により、その像は銀色に輝いていた。その神の像を見た少女の瞳から、一筋の涙がこぼれ落ちた。そして涙は止まることなく、少女の太ももを濡らし続けた。その姿に処刑人の男は気づいていたが、幼き命が終わることに同情したのだろう。何も言わず、処刑台がある方向に視線をなおした。

今まさに——処刑が始まろうとしている。

1 - 1 砂漠の町 カスパル（前書き）

《第一章での登場人物》

ソネット…女性でありながら子持ちのハンター。赤眼化できる事で有名。

ダンテ…ソネットを母に持つ少年。銀髪。

カンタロウ…帝軍所属。和風の着物を着ている黒髪の男。

キク…帝軍所属。金髪の髪をした背の低い女。

ノゾミ…塔に閉じ込められている少女。赤い両目に烙印が刻まれている。

ヤン…大将に雇われた傭兵。狐目の男

1 - 1 砂漠の町 カスパル

《運命が言いました——お前の人生はすでに決定されていると》

『第一章：赤い瞳の少女』

——砂漠の町、カスパル

オアシスを中心に栄えたこの町では、砂漠を渡る旅人や商人、昔から町に住んでいる古き人々で構成されている。不思議と砂漠のオアシスには『神脈』の影響が濃く、簡単な円形魔法陣でマルスオフ等の人を襲う魔物は防がれていた。バザールは常に開かれ、いわゆるつきの物やお値打ちの物までピンからキリまで売られている。

発展してからも数十年はたっているためか、商人御用達の『ギルド』支部が建てられていた。ギルドとは交易商人から構成されており、各帝国幹部の天下り先としても有名である。大商人から普通の商人まで身分や地位があり、その発言権はわりと大きい。ギルドの名前から取った『ギル』という通貨単位が帝国標準となるのは時間の問題であった。

他にも砂漠のマルスオフからの護衛を引き受ける傭兵団や砂漠の船であるスナ鳥の貸し出し、乾燥物の食料品や生命の水の売り出しなど活気あふれる商品のやりとりが行われていた。金のない旅人は露天商からの調達と値下げ戦線に奮闘し、金のある旅人はすぐにギ

ルドへと向かい良質な商品を手に入れるという流れも昔から変わっていないかった。

ギルドの建物は石と泥と木でできあがっており、階数は3階である。ギルドの紋章が3階部分の屋根近くにつけられ、強度の関係上2階しかない町ではよく目立ち、旅人の方角を示す道しるべにもなっていた。1階は品物の売買を担当している。2階は主に相談や依頼を受け付ける場として利用されていた。

2階の扉が開き、細かな黄色い砂が建物の中へと進入した。男の手によってすぐに扉は閉められたが、砂は玄関内の溝にしっかりと埋まってしまった。

傘のような大きな帽子をつけた男は、まっすぐ受付へと向かう。通い慣れているのか迷いがない。男は受付の前に立つと、砂漠のドレスを着た受付の女に話しかけた。

「よう。依頼があるんだが」

印象としては、きさくな感じの男である。年齢は30代後半。中肉中背の体格だ。商売人特有の精力的な顔つきをしている。

受付の看板には《依頼受付》と書かれてある。受付の女はまだ若く仕事に勤務して3年目ぐらいといった所だろうか。仕事に慣れた自然な笑顔で男を迎え入れた。

「はい。どのようなご用件でしょうか？」

「人の護衛を頼みたい。ハンターを紹介してくれ」

よくある依頼だ。砂漠には砂蟻や巨大サソリや蟻地獄など、人を襲うマルスオフが存在している。地理のわからない旅人であれば、砂漠の案内人としても利用できる。そういった仕事をするのが通称『なんでも屋』ハンターである。賞金稼ぎとも呼ばれている。

「砂蟻からですか？ それならオススメのハンターを……」

「いや違うんだ。性別は女。男は絶対駄目だ。クラスは3stぐらいがいい。あと『赤眼化』できることが必須だ」

『st』とはギルドが認定するハンターの肩書きである。1st10stまで細かく職能資格等級がある。3stとは『Aクラス』の

ハンターのことだ。このクラスであれば、かなりの魔物を倒す実力があると証明されている。事実、『赤眼化』という高位魔術を発動できる条件をそなえている者が多い。

細かい条件に、受付の女は少し顔をしかめた。

「……少々お待ちください」

女は席を立つと後ろの上司に相談しに行った。そしてすぐに帰ってきた。

「申し訳ありませんが、手持ちのハンターにお客様の条件に当てはまる者はありません。追加料金をいただきますが、呼び出しという形になります」

「いつまで待てばいい」

「1ヶ月ぐらいですね」

「そつ、それじゃ駄目だ。せめて3日！」

よつぽど慌てているのか男は前のめりになり、指を三本、女に突き出した。

「……3日は難しいですね」

「金はいくらでも払う！ だから3日で人をよこしてくれ」

「それならレテランスに行かれては……」

各帝国が出資する『レテランス』に行けば確かに条件に当てはまる可能性は高い。レテランスとは、ギルドと同じく国が人材斡旋を行っている機関だ。収入源は税金なので無料で村単位の依頼を引き受けてくれるかわりに、個人の依頼ではギルド以上にお金を要求される。しかも近くにレテランスはない。男は首を大きく横に振った。

「それは駄目だ。あんな手続きの面倒なところ、さらに時間がかかる」

「……少々お待ちください」

再び受付の女は後ろの上司に相談しに行った。それからしばらくして、今度は女ではなく、女の上司が男の所にやってきた。暑そうに手には手拭いを持っている。その太い体では無理もない。

「すみませんがお客様。人数は何人で？」

「2、3人でいい。いや……1人だ。もう1人でもいい」

「性別は女。『赤眼化』可能な人材であればちょうど1人いますね。まだ1階で待機しているはずですよ」

「1人か」と男は呟いた。

「クラスは？」

ギルドの登録カードを凝視し、ハンター的能力をチェックする。

「うーん」と眉の間を曇らせた。

「Fstです。ランクは『Cクラス』ですね」

Fstはギルドの仕事はそれなりにこなしているが、昇格試験に落ちているハンターのことだ。F9stのハンターを『Cクラス』と呼ぶ。実力、信頼性に欠けるが安く雇えるメリットがある。だが、当たり前外れが大きいのも事実。この場合は慎重な面談と口頭による実績で選ぶしかない。

「Cクラスのハンターか……。有名なのか？ そのハンターは？」

「ある意味有名ですよ」

『有名』という単語に男はすぐに反応した。もしかすると顕在化されないハンターなのかもしれない。これは掘り出しものである。

「ほう。それはいい。すぐ呼んでくれ。面会したい」

「はいただいま。ちなみにお客様のお名前は？」

「ハイドロだ。ハイドロ・スズ」

「ああ、常連の。いつもありがとうございます」

名前を聞いてようやく男が人材派遣を商売にしているお客だとわかった。

客席に案内され、ハイドロは木の椅子に座り待つことにした。椅子には安物の布が敷かれてある。ハイドロはゆっくりと腰をかけ、紹介されるハンターにどう交渉しようか腕を組んだ。

「お待たせしました。こちらソネット・マクベルさんですよ」

受付の女の上司である職員が直接ハンターを連れてきた。暇なもんだとハイドロは思ったが、ハンターの方にすぐ目がいき、息を飲んだ。

女のハンターで、まだ若い。真っ直ぐな鼻筋に、母のような赤く

引き締まった唇。眉はキリツとしていて整っており美しい。髪は茶髪でえり足とトップにあまり差のないウルフカット。目は細く大人びているが、緊張しているのか大きく可愛らしげに瞬きする。耳のイヤリングの宝石の光なのか頬は赤みを帯びている。

体は細身でもやはりハンターであり、二の腕の筋肉は筋が走り、肩幅は広い。足腰も強いのか、背中に背負っている大剣の重さをものともしていない。しかし、レザーアーマーからチラつく胸の谷間はハイドロの視線を釘付けにする。その谷の深さは、かなりふくやかであることを妄想させた。

「よろしく願います！」

元氣よくハイドロに挨拶し、頭を深々と下げた。若々しく張りのある声だ。ハンターの割には人を威圧する重量感もない。謙虚で愛らしさが増す。なぜ食堂の従業員でないのか不思議なぐらいだ。

（おお……ハンターにしてはいい女じゃ……うん！？）

ソネットの隣で何かが動いた。異常に目立つ銀髪と銀色の瞳をもった男の子だ。年齢は13歳になったばかりで、成長途中のあどけない容姿をしている。体のサイズに合ったレザーアーマーを着、その顔形はソネットとどこなく似ている。背中には長い剣を背負っている。男の子はハイドロの視線に気づくとペコリと頭を下げた。

「あの……あなたの隣にいるその子は……」

ハイドロは男の子を指さした。

「自慢の息子です！」

間髪いれずソネットは答えた。

（なっ、なんだと！？）

予想外だった。子供を連れているハンターなど聞いたことがなかったからだ。

「こんにちは。ダンテ・マクベルです。よろしく願います」
ダンテはきちんと挨拶した。

「だから言いましたでしょ？ 『ソネット親子』といいましてね。子連れハンターということでは有名です」

職員は脂っこい汗を何度も布で拭いた。

「子連れ……あの、失礼ですが年はおいくつですか？」

子供を持つにはソネットはあまりにも若すぎる。肌、艶、目元……30間近の女とはどうしても思えない。まだ20代前半なら納得できる。

「年齢は18歳です！」

「へっ!？」「えっ?」とハイドロと職員が目を丸くした。もう一度職員がギルドの登録カードを確認する。登録カードには何度目を合わせても、『28歳』としか書かれていない。ダンテの年齢は『13歳』と記載されている。つまり、もしソネットの年齢が『18歳』であれば5歳しか変わらないことになる。これでは『親子』ではなく『姉弟』である。

ソネットは2人の反応にキョトンとした。なぜなら『18歳』というのがソネットの実年齢だからだ。登録カードには虚偽記載しているのである。

「えっ? えっ?」

(母さん……28だよ)

「あつ……おほほほ。28歳でしたわ。10歳もサバ読んじやった。ごめん遊ばせ」

下手な誤魔化し方だったが、2人は何故か安堵した。まさか5歳しか変わらない親子がこの世に存在するとは思えない。色々な事が起こる世界だが、常識はまだ根付いているのだ。それに、ギルドの肩書きを持っているということは、簡易DNAによる親子鑑定をされているはずである。でなければ身分の曖昧な世界で、資格を持つことなど不可能だ。

「炊事洗濯なんでもやります! どうかよろしくお願いします!」

ソネットはまた深々と頭を下げた――。

1 - 2 旧世界の塔

砂漠——雨が降らず、昼間と夜の気温が極端で、それは最も過酷な場所の1つである。雲がないため地表は焦げつき、降水量は0に等しい。長年のあいだに岩が風化し、小さな粒となった砂は旅人の足を奪う。それだけならまだしも、毒をもつサソリや蛇、突然変異した人をも飲み込む蟻地獄に巨大化した砂蟻などマルスオフも砂影に隠れ、獲物を狙っていた。

乾いた砂がカラカラと風に転がり、動物の乾燥した骨が砂の中に埋まっている。動いているサソリを口に咥えると巢へと持ち帰る小動物の姿も見える。空ではハヤブサが死を迎えそうな獲物がいないか探していた。——そんな名もない砂漠は今とてつもない緊張感にさらされていた。

広大な砂漠の真ん中に塔が3本建っている。

旧世界からあるその塔は屋上が尖っておらず平面四角になっており、階数は30階、高さは約100メートルである。しかし、10階は砂に埋まってしまい、掘り出すことは不可能だった。今でも割れたガラスから砂が入り、遺物とされた塔内の物を埋めていつている。本来は砂漠に住む動物の住処だったのだが、半年前から人間の手によっておいだされていた。

塔の周りには頭にかぶる布に、茶色いマントという砂漠のドレスを着た人間達が囲っていた。手には銃や剣を持ち、指定の持ち場で見張りを続けている。砂よけと紫外線対策を兼ねたゴーグルが太陽の反射で光る。

「……さすがエリニユスの直属の部隊。隙がないわな」

男が塔から数キロ離れた岩山の上から呟いた。頭からかぶった茶色い布は、カメレオンのような保護色の役割をしている。手には軍

からの支給品である双眼鏡を持っていた。傍にある多肉植物も男を隠す役割をしていた。

見張りが動いた。交代なのだろう、やってきた1人が見張りの定位置に立った。

「なるほど、この時間に交代ね」

素早く頭の中に時間をインプットする。

「食事の時間だぞ、カンタロウ君」

「わかった。キク」

カンタロウと名前を呼ばれ、男は見つからないように体を後退させた。ズリズリと布が音を鳴らす。無事塔の兵達に見つからず、仲間の元へと戻れた。

そこではカンタロウの仲間である女が乾燥肉をくわえていた。手元には貴重な水袋もある。布を外すとカンタロウは砂をはらった。

カンタロウの格好は特殊繊維で編まれたボトルネツクの黒いシャツと黒の革ズボン、その上にやわらかな印象の柳紋りの着物を身につけている。黒艶のある長髪を後ろでまとめ、前髪を少し分け額を出していた。澄んだ黒い瞳にピクリとも動かない眉はとても物静かである。腰の刀を定位置に戻し、ポキポキと首の骨を鳴らした。指先を切り取ったカッタウト・クラブが刀の鞘巻きに触れる。年齢は21歳、帝国軍第四類に所属し、キクと組んでまだ1年目の若手だ。

「あゝ。肩こる。まっ、仕事だからしゃゝないわな」

「ご苦労。動きはどうだ？」

唯一の仲間、キク・マーガレットは笑顔でカンタロウを迎え入れた。宝石のように輝く金色の髪、水晶のように透き通った碧眼、小さく笑うリンゴのような赤い唇、どれをとってもモデル並の女性である。年齢は20歳とカンタロウより1つ年下。まだ現役の大帝大学の大学生だ。どうして帝国軍第四類に所属しているのか不可解で仕方がない。その容姿は男性だけではなく、女性までも虜にし、帝国の皇子に愛の告白をされたという実績まである。

女性にあまり興味を示さないカンタロウでさえ、キクの魅力に捕

らわれることがある。キクは人懐っこく、よくカントロウの体に平然と触れてくる。それが単なるコミュニケーションであり、愛を印象づけようとする行動でないことをカントロウはよく知っている。なるほど魔性の女とはこのことかと、カントロウはいつも思う。

帝国軍支給の鎧は胸、胴、肘、膝など簡易な急所のみつけられ、下半身はシヨーツである。そのほうが身軽で動きやすいらしい。動きに重点をおいたブーツをはき、剣身の根元が広い特注の剣を腰につける。

キクの緩んだ表情から白い歯がこぼれた。

「相変わらずだ。あまりスキがないわな。それにしてもアイツ等あんな塔で何やってんだ？」

カントロウはキクの前に座り、渡された乾燥肉を頬張った。筋が固く、噛み切りにくいものの塩がしっかりきいていて味がある。

「しかしいい加減この肉にも飽きるわな。飯が食べたい」

「飯がないならパンを食べ」

「はいはい。それよりも情報は間違いないのか？」

キクは両手を広げた。

「間違いないっしょ？　だってあのミンデル君が言ってただよ？」

「ミンデル君って言うな。せめてミンデル皇子をつけたほうがいいぞ。ウチの国の皇子様なんだから」

ミンデル皇子とは、大帝国第5皇子であり、年は近いが立場は2人より上になる。別名『女たらしの鬼畜皇子』でその名の通り、無類の女好き。容姿も悪くないので自らの意思で皇子の元へ向かう女達の中、キクはまったく興味がないのか動きもしなかった。その反動からなのか、ミンデル皇子自らキクに惚れ込んでおり、相方であるカントロウに嫉妬するという奇妙な三角関係ができあがっていた。

「いいじゃないじゃない。そんな細かい事」

ケラケラと手を振ってかわされた。

「……まっ、そうだな」

カントロウもキクに同調した。それぐらい2人の中でミンデル皇

子の存在は軽かった。

「しかし、もし情報が正しいとしたらあの『S級犯罪者』がここに
来るってことだろ？」

「そんなことよりカンタロウ君。いつも思うんだけど侍なら語尾に
『でござる』ってつけたほうがいいと思うぞ」

「どうでもいいわな。それ」

即カンタロウはキクに突っ込んだ。

「まあいいけどさ。その『S級犯罪者』が来る理由でしょ？」

「犯罪等級最高の犯罪者が何のためにこんな砂漠の塔に来るんだ？
乾燥肉をカンタロウはたいらげる。」

「さあね。それを探るのも私達、帝国軍の役目じゃないかな？ 捕
まえてもし『十の獣』の人だったら——大帝国の裏切り者の居場所
を吐かせればいいし、その場にソイツがいればボコって連れて帰る
しね」

キクは「うー」と肉を噛み切ろうと歯を食いしばる。

「あの塔に何があるんだろうな」

「亡霊でも住んでんじゃない？」とキクの言葉に耳を傾けながら、
カンタロウは塔の屋上を見上げていた。

砂漠を3羽のスナ鳥が歩いている。スナ鳥はこの砂漠に生息して
いる生き物で、旅人用の乗り物として主に利用されている。人に飼
われているスナ鳥は餌を与えれば誰にでも懐く性質があるので飼い
やすい。

スナ鳥の目は小さく、クチバシが大きく、2本足と3本の指で地
上を歩き、もちろん手はない。羽は退化しているが、羽ばたけば5
メートルは空を飛ぶことができる。欠点は鳥臭さがどんな調理方法

をためしてみても抜けないので、食料用としては使えないということだ。

スナ鳥達の背中に3人の男女が乗っていた。ソネットと息子のダンテ、あとはギルドに人材を探しに来た男ハイドロである。結局ソネットを雇ったようだ。

「暑すぎるわ！」

ゴーグルを外し、ソネットは汗をふり絞った。体の日除け専用の布を手でつかみ、バサバサと動かす。そのたびにレザーアーマーから胸元が見え、ハイドロの視線を誘った。

「そうだね。まあもうすぐらしいから我慢しようよ」

ダンテはソネットより大人びた口調だ。銀髪がこの灼熱の太陽でさらに輝きを増す。銀色の目が母を諭すように細くなる。動物の扱いに慣れた手綱さばきは、旅の長さを物語る。

（変わった子供だ……）

ソネットには邪な意味で惹かれるが、この銀髪の少年にもハイドロは興味を抱いていた。銀髪はあまり見かけない。この世界は、妖精や獣人など多種多民族が存在するので注目するほどでもないが、珍しさが際立っている。顔も町の子供よりも相当マシだ。悪い虫がハイドロの腹をチクチク刺す。

「ちよつと——何見てるのよ？」

ギクリと飛び上がった。ハンターの女は大概気性が荒い。形の良い胸をガン見していたのがバレたかとハイドロは思った。

目を細め、ソネットはハイドロを睨みつけていた。

「ちつ、違う！ 別に君の胸を見ていたわけではない！ これは男の本能というか、無意識で見てしまったというか……」
慌てて弁解する。

「何言ってるの？ 私の息子を見てたでしょ！」

「へっ？ まっ、まあ。銀髪は珍しいからな……」

「やつぱりあなたも息子を狙っているのね！」とソネットがスナ鳥を操ってハイドロにもすごい剣幕で迫ってきた。驚いたハイド

口のスナ鳥は「クエー！！」と飛び上がると、反対方向に逃げ出した。「ちょ、ちょっと待て！」とハイドロは手綱を操ったが、恐怖という自然の本能が人間の操作を無視した。

ソネットは息子のダンテに対して常軌を逸した愛情を抱いているのだ。ダンテの容姿は他の子供と比べると格段に上位に位置する。その副作用として男娼を専門とする悪い大人に今でも狙われ続けている。その素直な性格からかダンテ自身も騙されやすい。それゆえにソネットはダンテの事に関しては過敏状態なのである。

「母さん……」

ダンテは呆然と反対方向へダッシュしていく2人を眺めていた。

塔の内部は暑さでサウナ状態だった。団扇であおぐ風はぬるく、温度は30度を軽く超えている。そんな中、立派な黒髭をはやし、夏用の軍服を着たグラム大將が、文句1つ言わず、ブスリとクツシヨンの椅子に座っていた。塔内を徘徊している兵士を統一する役目をもっており、エリニユスの派閥の1つ『烙印の瞳』に所属している人物である。

グラムの体格は軍人らしくガツチリしている。男性ホルモンが濃く髪の毛は全滅し、頭皮は太陽に焼けて黒光りしていた。頭部で残っているのは立派な黒髭ぐらいだ。50歳を超えているためシワが深い。イライラして眉間にシワを寄せるとさらに深くなる。

部屋の中は殺伐としていた。白く固い床や壁は通気性が異常に悪い材質でできている。割れた窓ガラスからは、熱風が入ってきてしまう。部下がグラムに遠慮して最低限の家具はあるが、とうてい心地いいものではない。だが、外で働く部下に愚痴することもできない。

唯一グラムが愚痴れる相手といえば、眼球がないのではないかと思うぐらい目の細い、狐目の男、ヤンぐらいだ。

ヤンはグラムの部下の服装とは全く違う武装工作服を着こなし、皮手袋に防弾チョッキを身につけている。グラムに雇われた若い傭兵である。ヘッドバンドで髪を逆立て、先は針のようにとがっている。釣り上がった口元は笑うと頬にまで切り込んできた。

「――ようやくここもお別れだな」

「まったくですね」とグラムの傍にいるヤンが同調した。ヤンは汗1つかいていない。涼しげな顔で椅子に座っている。立場的にはグラムの方が上である。しかし、この男は魔法、剣ともかなりの実力者であるためここににいるのだ。

「うん？」

グラムの耳にまたあの歌声が聞こえてきた。透き通ったいい歌だ。下手なオペラ歌手よりよっぽどうまい。この砂漠に来て唯一の慰めといえはこの歌だろう。

「女神よ。我等に救いを与えたまえ」

手を合わせると机の前で祈った。「いや、ほんといい歌声だ」とヤンは言った。

「ねえ大将」

「――なんだ」

祈っているグラムは眉1つ動かさない。

「たまには外に出してやったらどうです？」

「それはできない相談だ。アレはか弱く見えても危険である。胸の痛むことだが外に出すわけにはいかん」

はつきり言い切った。

「ストレスで自害しちゃうんじゃないの？ 保護してからもう半年近くはたちますよ」

「仕方あるまい。アレの住む村を襲ったのがあの『十の獣』……『S級犯罪者』で構成された危険な組織なのだ。奴等を振り切るにはここに逃げるしかなかった」

合わせていた手を離した。歌声が止んだからだ。

「だがそれもここまで。奴等に居場所がバレたという情報がきた」

「半年もここにいるからですよ」

「ちがう！ 上の判断が遅いのだ！」

「バンツ！！」と机を両手で叩く。貯めていた怒りが一気に噴き出した。

「『世界の改変』という巨大な力を得ながら、使い方に迷いが生じたのだ！」

「まつ、まあまあ」とヤンはグラムを抑えた。「ふう……ふう……」と暑さの中、グラムの顔は真っ赤になり、今にも熱中症で倒れそうだった。

トント

ドアがノックされた。

「入れ」

「失礼します」

武装した兵がグラム大将に敬礼した。

「ハンター、ソネット親子が到着しました！」

「来たか。すぐ行く」

ふらつきながらもグラムはなんとか立ち上がった。

「ソネット親子？ 聞いたことないニャー。大丈夫なのかニャー」

ヤンのおふざけに、武装兵は顔をしかめたが、グラムは平然としていた。慣れているようだ。

「ソネット親子は『赤眼化』できるらしいからな。能力に不足はない」

その情報源はハイドロからだ。条件に一致するハンターがもういないということ、かなり妥協してその人物を選んだ。これでギルドの認定資格が上位であれば『女神』の世話をさせることに抵抗がない。惜しいものだ。とグラムは思った。

「へー。でもなんで『親子』？ 子供がいるのかニヤ？」
「いるようだ。だが問題はない。『瞳』を見せないように女神にアイマスクを装着させる。もし見られた場合は……仕方がない、ハンターを殺す」

グラムは準備のため部屋から出て行った。契約書、ハンコ、予算の準備と中間管理職がいなかったため大将自ら動かなければならなかった。

「——お腹黒いこつたニヤー」

ヤンの笑い方は、本物の狐のようだった――。

塔の奥の部屋では武装兵が2人、部屋の前に立っていた。部屋の中はベッドと机と椅子、そして一輪の赤い花がさされてある花瓶がある。その部屋には少女がいた。黒髪で華奢な体格をしており、白く細い手を2つに合わせ、静かにベッドの上に座っている。年齢は12歳。その年相応とは思えないぐらいの落ち着きようだ。

少女は母から教わった歌を歌っていた。少女にはそれしかできなかった。それ以外やることがなかったのだ。

トン――

塔の窓に何かが止まった。少女は歌をやめた。視線を向けるとハヤブサが窓辺にとまっていた。

「……お前も1人ぼっちですか？」

少女は立ち上がると鳥に手を伸ばそうとした。だが、背が小さい

ため窓辺に手が届かない。近くを探すと椅子がある。

少女は椅子に近づくと、持ち上げようと力を込める。大人であれば簡単に持ち上げられる重さだが少女には力が不足していた。体をふらつかせながら椅子を窓辺に置く。

少女は椅子に乗ると再びハヤブサに手を伸ばした。

ハヤブサは警戒しながら少女に近づいてきた。

「おいで、怖くないですよ」

少女は優しく微笑んだ。

ハヤブサは少女の『赤い眼』を自分の黒い瞳にうつした。その『赤い眼』には奇妙な烙印が刻まれていた。右目、左目ともに烙印が違っている。

「クアア……」

ハヤブサは一声鳴くと飛び去っていった。

少女はハヤブサが遠くなるまで窓の外を眺めていた。ハヤブサが見えなくなると、窓辺を離れ、ベッドへと戻った。

「そう——アレが来るのですね」

少女はまた歌を歌い始めた。

——砂漠が震えた。

人よりも大きい大型の砂蟻が軍隊をつくり、目的の場所へと移動している。

「……かえ……りたい……かえり……たい……」

砂蟻を指揮している者がそう何度も呟く。

——その者の目は両目とも血のような『赤い眼』をしていた。

1 - 3 神の血脈

「これが……旧世界の塔」

ソネットはその荘厳で巨大な3本の塔に言葉を飲み込んだ。

材料は石や煉瓦が使われている。色は風化しているのか焦げた茶色。屋根は尖っておらず、平面四角になっている。2つの塔を繋ぐ橋には聖人を意味しているのだろうか、ブロンズ製の男の像が座り、地上を見下ろす。

それぞれ中間の屋根の土台に彫刻された像が置いてある。右の塔にはラッパを吹き鳴らす天使達、左の塔には手を広げ喜びを表現する群衆。

真ん中の塔には尼僧のブロンズ像が手を合わせていた。頭部から顎下までを覆うウィンプルを見れば誰でもその像が聖職者であることがわかる。頭部のバンド布の下から覗く表情は慈愛に満ち穏やかだ。ただ、両目から涙のような黒いシミが顎にまで達している。それはまるで黒い涙を流しているようだった。

「すごいわね……」

塔に施されている緻密な彫刻や可憐な美の表現は設計者のこだわりなのだろう。茫然自失。まさしく魂を奪われた状態になる。

「ふ〜ん……」

ダンテには少し早すぎるのか、いまいち感情が湧いてこないようだ。

「エリニユスの軍隊さんがここを拠点にするのもわかるだろ？」

「そうね。信者でなくても住みたくなるわ」

「これが旧世界の遺跡さ」

ハイドロはあたかも自分が造ったかのように塔を紹介した。

「ねえ。旧世界の人達はこんな塔を造る技術があったのにどうして滅んだの？」

ダンテは素朴な疑問をハイドロにぶつけた。

「——はるか昔、赤い花びらが世界を覆うという『紅姫現象』が起こつたらしい。ほら、お前も聞いたことがあるだろ？ 紅姫現象は世界の崩壊の兆候だと」

「うん。ある」

「それによつて人間は悪魔へと変えられ、旧世界の人類は絶滅した。そんな中生き残つたのが『息子』と呼ばれた13人の男と『母胎』である女1人。『1』『13番目の息子』と名付けられていた男達は母胎を護り、俺達新世界の人類を誕生させた……」

「『1番目の息子』ロードが新世界を創り、『2番目の息子』ファーストが紅姫の抗体を創り、『4番目の息子』ザクロが知恵と精神と魂を創り、そして——母胎が私達の肉体を創つた」

こぼれるように口から言葉がでるソネット。「そう、その通り」とハイドロは頷いた。

「さて、塔の中へと案内しよう」

スナ鳥を縄に繋ぎ、さつそくソネットとダンテはハイドロの導きによつて塔の入口へと向かった。入口には武装した兵が2人立っていた。腰には剣が装備されている。

「いつもお世話になっております。人材紹介のハイドロでございます」

急に態度がへりくだる。頭をペコペコ下げ、手の平をこすりつけた。

「ハンターを連れてきたのか？」

ハイドロを知っている兵が口を開いた。

「ええ、無線で連絡した通りでございます」

「ほづ……ふむ」

顎に手を乗せ、舐め回すようにソネットの肢体に視線を這わせる。そしてハイドロと同じく、やはり胸に目がいった。男では有り得ない膨らみに納得がいったようだ。

「間違いなく女のようなだ。だが、体格が細いな。本当にハンターか？ 娼婦ではあるまいな？」

兵にそそくさと近づくと、ハイドロはギルドの登録カードを出した。

「間違いありませんよ。ギルドにはこのようにきちんと登録されています。人材紹介を仕事にしてはや10年。このハイドロの目に狂いはありません」

大型な顧客であるため、きっちりと証明書を貰ってきていたようだ。証明書にはギルドのマークが赤で朱印されている。まず間違いないだろう。兵士は「うむ」と頷くと、体を避けて3人を塔へと誘う。

「入れ」

「失礼します」とハイドロとソネット、ダンテは塔の窓から中へと入った。入口は砂漠の下に埋まっていまいなくなっていた。元の窓は狭かったのか、壁は壊され大人2人分ぐらいは通れるように改築されていた。

「女」

「はい？」

唐突に兵に声をかけられ、ソネットは振り向いた。

「余計な詮索は無論だが、ここは『ハイエナ』が多い。揉め事だけは起こすなよ」

ニヤニヤと笑っている。「どういう意味よ？」とソネットは少し嫌な印象を受けた。

「おう？」

「へえ……」

「これはこれは……」

塔の廊下ですれちがう兵が代わる代わるソネットに注目する。久

しぶりの女にソネットを見るなり個室に走る兵もいた。「ヒューヒュー。俺達と遊ばないか？」とからかう兵達もいたが、ソネットは毅然とした態度で無視した。

男達の反応に慣れているのかソネットとダンテは平然としている。しかし、ハイドロは気持ち焦っていた。意外なライバルの多さである。例えエリニユスの信者といえど、禁欲ではないようだ。

やはりまず子供と仲良くなるべきだなとハイドロは作戦を立てた。そうなればチャンスがあるかもしれない。身内に信頼されている人間に、人は好意を抱きやすいものなのだ。

しばらく廊下を歩くと詰め所が見えてきた。2人の武装兵が扉の前に立っている。ハイドロは話をつけるために兵達に近づいた。

「さつ……てと、それじゃ、母さんはいつてくるから。1人で待つてるのよ」

ソネットは両腕を伸ばした。

「うん、わかった」

ダンテは素直に頷いた。その笑顔にソネットはつい抱きしめたくなる衝動を抑えるのに必死だった。

「さあ、稼ぐわよ。とつとと契約をすましてしまいましょ」

ソネットは肩を回すと詰め所に向かった。

1人残されたダンテは窓から広大な砂漠を見回していた。何も無い砂漠だ。活力ある若さには退屈な光景だろう。

「やあダンテ君」

兵との交渉が終わったハイドロがダンテに話しかけた。

「何？」

笑顔で接する。愛想のいい男の子だと、ハイドロは思った。

「今暇か？ それならおじさんと遊ぶか？」

下心ありありである。

「いいけど——母さん狙いならやめたほうがいいよ」

「げっ！」とハイドロは喉を詰まらせる。見事にまでバレているのだ。ダンテは的が的中し、ニンマリと笑った。

「けっこういるんだ。母さんと仲良くしたいから僕に近づく人。でもいつも失敗して母さんにボコボコにされる。僕はそれを止めるんだけど、前なんか骨が折れるまでやっちゃったもんだからお医者さん呼んでくるの大変だったよ」

ダンテは「ふう……」とため息をつく。ハイドロは青ざめた。

「それでも母さんときあいたいっていうんだったら協力するよ。どうする？」

「……腹が痛くなった。悪いが1人にさせてくれ……」

ハイドロは自然に奥へとフィールドアウトしていった。

「……やっぱり駄目だったな」。母さんときあえる人ってどんな人なんだろう？」

ソネットのことを思って、過去ダンテは色々な男ときあわせてみた。しかしどれも失敗に終わっていた。

（「ダンテを誘拐しようだなんていい度胸じゃないの！」とか「私のダンテに近づくなんてこのケダモノ！」とか「ダンテは私のものなのよ！ 殺す！」とか……。うまくいかないな。母さんの好みの男性って誰なんだろう？）

決してふざけているわけではなく、本気でダンテは母のことを心配していた。昔、親子という言葉の意味を知った。親子には父と母と子がいるという意味もあるとわかった。それなら何故自分達に『父』がいないのかわからなかった。ソネットにその事を聞いてみても曖昧に笑うだけで教えてくれなかった。きつと『父』がいれば母さんも喜ぶと単純に思っていた。

「ふあゝあ……」

まだソネットは出てこない。ダンテは大あくびした。

「ねえ」

「なんだ？」

ダンテは扉を守る兵士に声をかけた。

「トイレはどこ？」

「……そこを左に曲がって真っ直ぐ行け。廊下の突き当たりに青がマーキングされている。そこがトイレだ。糞尿を狙って虫が湧いているが、尻を傷つけることはない」

兵士は仏教面で答えた。ダンテは「ありがとう」と言うと、兵士に言われたとおりの道を歩いて行った。途中、目が異常に細い男とすれ違った。「うん？」と狐目の男はダンテを見て立ち止まったが、声をかけることはなかった。

用をすますとダンテは元の場所に戻ろうと廊下を歩いた。

「……あれ？」

詰め所が見当たらない。

「まずい……迷った」

キョロキョロしていると、何か人の声が聞こえてきた。

「うん？」

——どこからか繊細な歌声が流れてくる。

「……綺麗な歌だな」

ダンテは思わず聞き惚れた。

（……ちよつとぐらいならいいか。きつと母さんは契約金でかなりごねてるはずだから時間がかかるし。今頃もうちよつと上げるとか言ってるんだろうなあ）

母の性格はすでに把握されている。

「よし、行ってみよう」

子供ながらの好奇心を持って、ダンテは退屈な待合室よりも歌を選んだ。

歌は塔の最上階から流れている。石でできた幅の狭い螺旋階段を

慎重に上がっていき、30と番号がかかれた階に着いた。廊下を曲がると、ダンテは小さく声を上げ、慌てて壁際に隠れた。

そこにも兵士が2人ほど立っていたからだ。しかも1階と違って重装備だ。肩にはサブマシンガンがかけられ、腰にはロングソードが装備してある。右手の甲にはエリニユスのシンボルマークである『3人の女神』の入れ墨があった。

2人とも顔中傷だらけである。歴戦の戦士なのだろう、表情1つ変わらない。なんだか重々しい雰囲気だ。

ダンテは近づくのを躊躇した。行った所で容赦なく止められるだろう。

「どうしよう……」

途方にくれ、壁に背をつき考えてみる。ふと、上ってきた階段の方を向くと、ガラスのない窓があった。窓の外に頭を出すと壁に小さな出っ張りがある。大人では渡れそうにないが、子供の小さな足なら大丈夫そうだ。それは兵士達が守っている部屋の窓にまで続いていた。

ダンテはニヤリと笑った。

奥の部屋で少女は歌を歌っていた。

この歌は自分を育ててくれた母が歌っていたものだ。その歌を少女は胎児の頃から聴いていた。

歌を歌っていると不安が紛れた。自分を押しつぶそうとする何かにいつも怯えていた。孤独の中、声が枯れるまで歌い続けた。

——ガタッ

何かが動いた。少女は歌を止め、顔を上げた。

「お前、また来たのですか？」

少女はベッドから立ち上がると窓辺を見上げた。またハヤブサが来たのかと思ったからだ。

ガタツガタツ……

窓辺のガラスのない枠が外された。ハヤブサがそんなことをするだろうか。少女は首を傾げた。

「よしと。これで中に入れる」

声がした。知らない声だ。さっきのハヤブサが人の言語などしゃべるはずがない。

「よいっ……しよっと……」

頭が見えた。銀髪の髪だ。狭い窓を通り抜けようと、少年が無理矢理体をねじ込んでいる。

「よっ……と」

うまく抜け出ると、部屋の床に着地した。

「……………」

少女は怯えることなくその様子を傍観していた。少女にとって久しぶりに見る男の子だ。自分をここまで連れてきた人間は背の高い大人しかいなかった。

「あっ、こんにちは」

少年は人懐っこい笑顔で挨拶してきた。外には見張りの兵がいるので声は低めだ。

「——はい」

少女は反射的に答えた。一瞬兵を呼ぼうかとも考えたが、しばらく様子を見ることにした。

「僕の名前はダンテ。君は？」

「名前？」

「うん」

少女は躊躇ったが、少年の悪意のない表情に少しだけ警戒心をといた。

「——ノゾミ」

「ノゾミ？ 珍しい名前だね」

ノゾミはエリニユスの子供用修道服の上に、リネン・キュラッサという軽量の白い鎧を着せられている。制服のサイズが合っていないのかスカートの丈が短く、太股が出されていた。細く、白い足は精巧な人形のような。背はダンテより少し低い。両目は赤く、ダンテを見る視線が宝石のように輝く。形の違う左右の烙印も瞳の奥で光沢を帯びる。膨らみのない未成熟な体の特権である汚れも曇りもない肌に、ダンテは魅了されていた。

「女の子なんだ？」

「はい」

「やっぱり」とダンテは満足気に笑った。いつもソネットと一緒にいるのですぐに性別の見分けがつく。女の子はなぜか髪が長く、体も華奢で、同い年でも背が小さい子が多いとダンテの頭の中のデータが分析していた。

「ここで何してるの？」

「歌を歌ってます」

「どうして？」

「気分が良くなります」

「綺麗な歌だね」

「……………」

ノゾミは頬を赤らめた。自分の歌を褒められたことがなかったからだ。恥ずかしい感情がよく理解できず、戸惑った。

「少なくとも僕の母さんよりはうまいよ」

「——そう、ですか」

ノゾミの顔が少し曇った。ダンテはその反応を見逃さなかった。

「どうしたの？」

「ダンテ、母がいますか？」

「うん、今いるよ」

「あなた達は何故ここに来たのですか？」

水晶のような赤い瞳がダンテの瞳をのぞいている。

「うん、確か『神の血脈』を持つ人の護衛で僕と母さんは雇われたんだ。僕も一応『ハンター』」

「そうですか。だから剣を持っているのですね」

ダンテの背中にあるロングソードが気になっていたノゾミは、理由がわかり落ち着きを取り戻した。

「まあね」

ノゾミはベッドに座った。

「ねえ。僕もそっちに行っていていい？」

「どうぞ」

ダンテは遠慮なく少女の隣に座った。そして、ノゾミの瞳をジッと覗き込んだ。

「君が『神の血脈』を持つ人？」

それは完全に予測で言ったことだった。ソネットから『神の血脈』を持つ者は『赤い瞳』と『烙印』があると教えられていた。ノゾミの瞳にはピッタリの特徴があり、もしかと思ったからだ。

「そうらしいですね」

淡々と返されてしまった。自分が『神の血脈』であることに何の感慨も持っていないようだ。恐らく、自分の中ではさほど重要なことではないのだろう。ノゾミとダンテの視線がピッタリと合わさった。

「綺麗な瞳——宝石みたいだね」

「宝石……」

白い頬が紅色に染まる。恥ずかしいというより予想外の反応に戸惑っていた。この瞳を綺麗だとは言われたことがないからだ。畏怖と憂慮、崇高と高邁、人間ではない何か——。そんな反応しかされてこなかった。だからよけいにノゾミを困惑させた。

「怖く……ないですか？」

恐る恐る少女は口を開いた。

「別に。どうして？」

「……………」

ノゾミは視線をダンテから逸らした。言葉では思いつかない感情がノゾミにそうさせた。何故か顔が熱くて仕方がなかった。異性には何の興味ももっていなかったはずなのに。

「!？」

急に少女が立ち上がった。ダンテは驚いてベッドから飛び退いた。「どっどっしたの？」

「……………来る」

1 - 4 砂蟻とエコーズ

「あゝ暑い……」

旧世界の塔の屋上で見張りについている武装兵が、持っている布で汗を拭う。気温は最高度になり、昼に近づきつつあった。

屋上では簡単なテントを作り、1人で砂漠中を見回るという勤務についている。気温が高すぎるのか視界がぼやける。汗が目は何度も入り、すでに両目は充血していた。

「塩飴でも舐めるか」

支給品の塩飴を取り出すと、口に入れた。当然塩の味しかない。だが気分は少し安らぐ。肩ひものついたサブマシンガンを置き、ロングソードを放った。本来は規定上見張りの最中武器を置くことは違反なのだが、今まで敵が攻めてこなかったので油断しているようだ。

「もう半年か……女つ気のないこの塔ともようやくお別れだな。それにしてもギンスの奴。仕事ほおって下に行きやがって。ったく、何があるってんだ……」

飴をコロコロと口内で転がしながら武装兵は何気なしに、東の砂漠の方を眺める。

「うん？」

目をシバシバさせた。砂漠の砂が空へと舞い上がっている。こんな光景は今まで見たことがない。

「なっ、なんだ？」

テントから慌てて双眼鏡を持ってくると、砂が舞い上がっている方角を覗いてみた。双眼鏡のレンズに凄まじい数の砂蟻がうつった。あまりの数に目をパチクリさせ、何が起こっているのか必死で分析しようと頭に血を昇らせた。

砂蟻の中心に何かいる。それは下半身を砂蟻と同化させ、灰色の骸骨のような姿でコチラに向かってきている。窪んだ眼窩にある赤

い瞳が兵を睨んだ。

「うつ、うわあ！」

兵は双眼鏡を砂漠へと落としてしまった。だがそれを気にしている余裕はない。人類至上最もやつかいな敵が攻めてきているのだから。

「エッ、エコースだ！」

兵は絡みあう足で、警鐘のある台へ走った。

「冷たい水とが出ないのかしら？」

ソネットは兵士の詰め所の一室で20分も待たされていた。それでもまだこの塔にいる依頼主がやってこない。いい加減イライラしてきたのか自然と貧乏ゆすりが出てきている。

「これは依頼料引き上げ決定ね」

相手のアラを逆手に勝手に契約料を引き上げることを決めた。

「……おっ！ いやいやいや、どうも！」

突然、部屋に男が入ってきた。外にいる兵士達とは違う武装工作服を着ている。目は狐目のように細く、斜めに釣り上がっていた。

「……何よあなた？」

ソネットはすぐに入ってきた男を警戒した。ここのボスにしては若すぎるし、何よりも顔が生理的に受けつけない。人ではない、そう、獣のような臭いがする。

「俺？ 俺はヤン。よろしくお姉さん」

狐目の男はジロジロとソネットの全身を舐め回した。慣れているはずなのに、背筋に悪寒が走った。どこか気持ち悪いものが喉元へ

と這い上がる。

「……うん！ 上等！ 顔は大人っぽいけど体はまだ思春期だな。まったく男だらけで窒息死するところだったぜ！ さっ！ 俺の部屋行こ！」

ヤンがソネットの肩に手を置いた。

「ど・こ・へ？」

ギョウウウウ

「あだだだだだ！ 待って待って！！ 何か知らんけど俺が悪かった！！」

ソネットの肩に手を置いたヤンの腕がえらい方向に曲がった。ヤンが何度も謝り、ようやくソネットの気がすんだのか手が離された。「ふうふう」。いきなり何すんのよ？

「それはこっちのセリフ。気安く触らないでくれます？」

曲がった腕に息を吹きかけるヤン。ソネットは悪びれもせずソツポを向いた。その成熟した顔の割には、子供っぽい態度にヤンは苦笑した。

「えっ？ 君は砂漠の『カスパル』から来たベッキーちゃんじゃないの？」

「違うわよ！ 誰がベッキーなのよ！ 私は『ハンター』ソネットです！」

「げっ、ハンターか。ハンターでその容姿は反則だろ。卑怯だ」

「卑怯じゃないわよ！ まったく！ なんて男はこうアホばかりなの！ まっ、ダンテに近づく女よりかはマシだけどね！」

ついポロツと本音が出た。

「まあいいや。とりあえず俺の部屋に行こう。『天国』に行かせてやるぜ」

「……その口を永遠に閉じさせるには『屍』にするしかないようね」
転がっている石を持ち上げるとソネットはそれを片手だけでバキ

ツと砕いた。そのパフォーマンスでヤンは「あはは……すごい力ね」と笑いちよつと引いた。

「あなたみたいな人に用はありません。早く出て行きなさい」

「悪かったよ。まさかあの『赤眼化』できるソネットさんだとは思わなかった。確か『神の血脈』を持つあの子の護衛だっけ？」

ヤンは意外に事情に詳しかった。もしかするとソネットにわざとふざけたのかもしれない。それこそ狐につままれたような顔にソネットはなった。

「そうよ」

「それはまたご愁傷さま」

ヤンは部屋から出て行くどころかソネットの前の椅子に座った。

ソネットはムツと男を睨んだ。

「あんた。無事じゃすまないぜ」

「……どういう意味？」

「たぶん高額な報奨金目当てだと思うけど、『神の血脈』とつきあったってろくな目にあわないってことさ」

両手を後頭部に乗せるとヤンは椅子に深くもたれた。細い目がソネットを覗く。

「あんた『神の血脈』が絶滅した理由、知ってる？」

「……知ってるわよ。『2番目の息子』であり13神の1人、ファーストが『力のみの存在』となったからでしょ？」

「学者の話ではそうなってるな」とヤンは頷いた。

「まあ絶滅したというか異常体質が治ったといった所だニヤ。『神の血脈』を持つ者は『赤い瞳』を失い、常人を超えた能力を使うことができなくなった」

「『ニヤ』って何よ」とソネットは呟いた。「何か言ったニヤ？」とまたヤンは語尾に「ニヤ」をつけた。「なんでも」とソネットは詳しく聞くことをやめた。

「……何が言いたいのか？」

「人は——希望をなくしたのさ」

「希望？」ヤンの意図がわからずソネットは聞き返した。

「そう。外に出ればマルスオフやエコーズが跋扈する恐怖時代。町や村では円形魔法陣により中は自衛しているが、外に旅立つことは危険極まりない。むろん皆閉鎖的になっていき、領主は通行税がまったく取れない始末。そこで皇帝1人が支配し、税を払わなくてすむ商人に都合のいい『帝国主義』ってのが生まれた。エコーズやマルスオフに対抗する資源を植民地から効率よく得られるようになり、最近ではあの『24エコーズ』ですら大人しい」

今の社会情勢をヤンは説明している。アホな男だと思っていたソネットは意表を突かれた。

「だが人々に不安は残る。いつマルスオフやエコーズが攻めてくるかわからない。安定しているのは各帝国諸国のお膝元の都市や町だが、当然人が住む定数は決まっている。そこから除外された人が願うのは『神』の出現さ。自らの不安を取り除いてくれる『神』をね。エリニウスはうまくそこに取り入り、信者を増やしているみたいだけどね」

「……神なんていないわ」とソネットは呟いた。ヤンはその言葉を聞き逃さなかった。

「なら聞こう。——もしこの世界に『神』が本当に具現化されたのなら君はどう思う？」

「……何も変わらないわ。救いを求めることなんてない」

はつきりソネットは言い切った。ヤンは「ブフー！」と腹を抱えて大笑いした。

「何よ！」

「いやいや。悪い悪い。君は強いね。余計な話をしたな。だけど皆が君のように強いわけじゃない。もし本当に『神』ってやつが現れ

るのなら——どんなことをしてでも手に入れようとするね」

ヤンは椅子から立ち上がった。

「じゃな！ あっ、ウチの大將に報奨金の値上げ交渉しても無駄だぜ。何せあの人は目が笑ってないからな」

フラフラと手を振ると外へと出て行った。

「なんなのあの男……」

ポツンと残されたソネットは小さく文句を言った。

「待たせたな」

入れ替わりに部屋に入ってきた強面の男は、確かに目が笑っていなかった。グラム大將である。手には契約書とペンが入った黒い箱を持っている。

「むっ！ 貴様……」

グラムのシワが深い谷になった。

「はい？」

「娼婦ではあるまいな？」

「ハンターです！」

本当に男はアホばかりだとソネットは思った。

「……ううむ。お前達の事情はわかった」

グラム大將が腕を組み唸った。髪の毛のない額には大量の汗が流れ、黒髭がピクピク動いている。うつすらと頭部に血管が浮かぶ。

「わかっていただけました？」

ソネットがハンカチを片手に涙を拭った。泣き落とし作戦だ。自分達の苦勞を延々と聞かせてやり、相手の同情を誘い、かつ報酬金を上げるのだ。

「だがな。50万ギル上乘せは駄目だ」

キツパリとグラムは断った。提示されている金額は約500万ギル。人の世話をするだけでこの金額は相当な破格だ。格下のエコーズ1匹討伐で相場は100万ギルなのだから5匹分に価する。

「じゃあ25万ギル。私達にも生活つてものがあるのよ」

ソネットは上乗せ分を図々しく半分にした。組織が大手なのでもっとふんだくれると思ったからだ。

「話にならん。提示した金額以上は絶対に払わん」

「なによケチ！」

ソネットは不貞腐れて腕を組んだ。

「ケチでも結構。提示した金額は相場としては破格の額だ。不満があるなら他をあたる」

グラムが席を立とうとすると、ソネットは慌ててそれを引きとめた。わざとグラムはそうしたのだ。これで駆け引きはグラムに軍配が上がった。

「まっさかあゝ。ちょっと冗談を言っただけですよあゝ」

急にソネットの態度が卑屈になった。グラムの狙い通りである。

（……契約決裂となるとこっちがまずい。ダンテにも成長に見合った服や靴を買ってやりたい。今後の資金も貯めたい）

ソネットはこれ以上余計なことを言うのはやめた。

（ここは大人しく妥協しておいた方が利口ね。このおっさん本当に融通がきかないわ。報酬額はいいんだからここは我慢と）

ニヤツとグラムは気づかれないうちに笑った。勝利を確信したからである。

「それなら契約成立だ。さっそく仕事のほう……」

「たったつ大変です！」

若い兵士が慌てて部屋に入ってきた。

「なんだ騒々しい」

「マルスオフが……砂蟻が大群でこの塔へ向かっています！」

「有り得ん！」

グラムは一蹴した。

砂蟻は雑食性で餌を取るときは集団で行動し、人を襲うこともある。体も大人3人分ぐらいの大きさと、硬い顎で骨すら余裕で噛み砕く。しかし、地面に多数いる小さな蟻と違って、普段はほとんど動くこともなく、繁殖能力も低いので餌もさほど必要ない。むしろ積極的に人を襲うことなどない生き物なのだ。

「ただの大移動ではないか？」

砂蟻の生態を知っているグラムは冷静に聞き返した。餌場を求めて砂蟻は大移動することがあるからだ。

「エコーズがいます！」

その一言でソネットとグラムの顔つきが一瞬で変わった。

「なっ、なんだと!!」

「なんですつてえ!!」

若い兵に案内させ、グラムは塔の監視室へと走った。監視室は詰め所の廊下に出る必要はなく、中の階段を10階上つていけばたどり着いた。ソネットもその後ろをついていった。用意されている双眼鏡でグラムは砂漠の先を覗く。

遠くで砂煙が天高く舞い上がっている――。

地面が地震のように揺れた。青くなっている兵士の傍に置いてあった陶器がカラリと地面に落ちた。双眼鏡のレンズの中で恐ろしい数の砂蟻が、触角を真つ直ぐコチラに向けて向かってくる。鋭い顎が2つに大きく割れた。

「くっ……本当にエコーズがおるわ」

グラムの双眼鏡にはエコーズがうつっていた。骸骨のような体で、灰色の皮膚に肋骨が浮き上がっている。下半身は砂蟻と同化させており、上半身しか見えていない。赤い瞳がこの塔を捕らえ、離さない。グラムの持つ双眼鏡が震える。

「くそっ！！ あの数では明らかにコチラが不利！ せつかく手に入れた『神の血脈』を失うことになりかねん！ それだけはなんとしてでも避けなければならぬ！ 飛行竜を用意しろ！ ここから『女神』だけでも脱出させる！」

「はっ！」
兵士は敬礼すると、すぐに準備に向かった。
「ハンター！ お前は……」

ソネットの姿はなかった。グラムは双眼鏡を地面へと叩きつけ、『女神』の元へと向かった。

——『紅姫』の抗体を持たず、毒の回るこの世界で……旧世界の帰還を繰り返し呟く者。『エコーズ』。

ソネットはダンテの元へと走っていた。もはや賞金などどうでも良くなっていた。早くここから脱出しなければならない。

——どうしてあんな化け物が……。

今更ながらヤンの言った言葉が身にしみた。

——『神の血脈』？

ソネットが猫目になった。明らかにハイドロを疑っている。それも当然で『神の血脈』を持つ人間は絶滅してもういないはずだ。これは世界の常識であり、ソネットですら知っている。

ソネットとダンテはハイドロに誘われギルドから出て、居酒屋にいた。夜になると活気づいてくるが、今は昼で誰もいない。店主が欠伸をしながら掃除しているだけだ。ここはハイドロにとって穴場でもあった。生温い水がコップに入れられ、机に3つ置かれていた。依頼内容を聞くまでは素直だったソネットの態度が、一転して不

貞不貞しくなる。だが、ハイドロにとってこれは折り込みずみな
で気にもしていない。

「わかる。俺も依頼で『神の血脈』を護れって言われて顔が狸にな
った」

「ぶっ、そうね」

ソネットの表情が明るくなった。

「ねえ母さん。『神の血脈』って？」

「後で教えてあげる。静かにしててね」

唇に人差し指を置く。ダンテは「はい」と静かになった。

「で、どういうことなの？」

腕を組んで聞く体勢に入った。ハイドロは木の机に肘を置き、両
手を組んだ。

「恐らく『神の血脈』とは象徴のことで、実際『神の血脈』を持つ
者ではないと俺は考えている。今回の依頼主はあのエリニウスだ。
知ってるか？」

「あゝあの有名な宗教の……」

エリニウスとは3人の女神、生への侵犯^{メメント}、魂の葬送^{リブラ}、閉じた時間^{クノックス}
を進行している巨大な宗教団体である。永世中立国ノルニルの教皇
アシエルが最高位についている。それゆえか、ノルニル国の約7割
がエリニウスの信者であり、その防御力は世界屈指とされている。

信者の数も多く、他の宗教団体の追隨を許さない。派閥もいくつ
があり、特に有名なのが『烙印の瞳』、『六枚の翼』、『漆黒の服』
の3つである。今回の依頼主は『烙印の瞳』に所属する軍隊のよう
だ。

「奴等は神の象徴がほしい。その象徴となったのは恐らく『瞳に何
かある女』だ。『烙印の瞳』は獣の記号を嫌う。姿形は普通の女で、
こだわっているのは『世界を見通す目』なんだよ。どこからか適合
する女を見つけてきて、塔に閉じ込めていた。それがエリニウスへ
帰還命令が出たので、護衛兼世話役として女のハンターがほしいわ
けだ。わかる？」

ハイドロはまさか本当に『女神』がこの世にいるとは信じていないようだ。実際護衛対象である女を見たことがないのだから当然なのかもしれない。

「なるほど『神の血脈』とは偽物ってことね」

「そのとおり」とハイドロは拍手した。ソネットも『神の血脈』が本当にいるとは信じていないし、深く考えもしない。お金しか興味が無いからだ。

「奴等の嘘に乗ってやってくれないか？ 報酬はこんなもんだ」

サラサラとギルドから貰った紙に金額を書いた。ソネットは目が飛び出るくらい驚いた。ダンテは「すごい！」と感嘆の声を上げた。「こつ、こんなに……」

これは逆に怪しい。ソネットの目が報酬欲しさと怪しさで葛藤している。

「これぐらい出せると先方は言っている。何せあの巨大大宗教組織だ。金はあるのさ。俺もアンタを紹介すれば結構な額が貰える。頼む。今回は条件が厳しい。アンタに断られたら後がない」

ハイドロはソネットに手を合わせて拝んだ。確かに条件は『女』、『赤眼化』、『ギルドの肩書き』と厳しく、これぐらいなら貰ってもいいのかもしれない。しかも、神の象徴の護衛というかなり高度な仕事だ。たとえそれが女神の偽物でも相手にとっては大切な『神』なのである。

「……わかったわ。引き受けましょう」

初めて自分が『女』であることにソネットは感謝した。魔法はうまく使えないが『赤眼化』できることに感謝した。これは神の天命に違いないと、ソネットはその時は思っていた――。

今、ソネットはヤンの言葉通り後悔していた。

やはり高額な賞金の裏には何かある。人間ならまだしも、エコーズが攻め入るといふのは異常だ。狙いはもしかすると『神の血脈』かもしれない。エコーズは『13神』を嫌っているからだ。

「ダンテ！」

詰め所前へと戻ったが——そこにダンテの姿はなかった。

1 - 5 仕事の依頼

「うん？」

岩山の上で相変わらずカンタロウが様子を伺っていると、急に兵達慌しくなった。何事かと双眼鏡を遠くへ向けてみると、砂煙が舞い上がっている。そこには凄まじい数の砂蟻が塔へと突進していた。

「おんや？」

カンタロウが奇声を発した。

数があまりに多すぎる。異常事態であることは明白だった。

「どうした？」

汚い布で作った簡易テントの中にキクはいた。鎧や剣を外し、休憩しているようだ。暇なのか櫛で金髪をといっている。

カンタロウがその場から立ち上がり、仁王立ちした。保護色の役割をしていた布がハラリと落ちた。

「おい…… 大変な事になってるぞ」

「S級犯罪者がきたか！？ よっしゃ！ カンタロウ君行くか！」

「いや…… 違う。マルスオフだわな」

「なんだ。もう。私は昼寝するぞ」

暇がピークに達しているようだ。この勤務について日は浅いが、さすがにいつも同じ光景だと飽きる。キクは「ブスッ！」と両手を顎に乗せた。

「昼寝なんかしている場合じゃないわな」

「どして？」

「砂蟻が……」

「砂蟻？ 認定外マルスオフじゃん。サボテンでも食べにでてきたんじゃないの」

「砂蟻の中心に——エコーズがいる」

「……はっ!？」とキクが立ち上がった。

グラム大將は逸早くノゾミの元へ向かっていた。状況がわからない見張りの兵が、顔を真っ赤にしているグラム大將を見て戸惑っている。グラムは大声で怒鳴った。

「どけっ！ 少女を連れて行く！」

見張り兵を強引にどかすとグラムは部屋のドアを開けた。そこには『神の血脈』をもつ少女が……いるはずだった。

「なっ！ いないぞ！？」

興奮のあまり誰もいない部屋でグラムは怒鳴った。

「どうなってる！」

「誰も通していませんし、少女は外には出ておりません！」
見張りの兵士も困惑した。

「ではなぜいないのだ！」

グラムは部屋の中に入った。すると、窓枠が転がっている。

「これは……まさか！」

慌てて小さな窓にでかい頭を突っ込んだ。

「あっ！ 貴様！」

窓の外では、少女が少年に手を引かれて下の窓から逃げ出そうとしていた。2人はすでに異変に気づいていたのだ。

「ちょ、ちよつと待て！」

手を伸ばそうにももう届かない。

グラムは少女に声をかけた。少女はグラムの声に気づいて顔を上げた。

「どうして逃げる！ 我々はお前を護衛しているのだぞ！」

「——貴方達では無理でしょう。私はこの少年と行くことに決めました」

ノゾミは冷たく言い放った。

「ごめんよ。この子は僕が責任持つて守るから！」

少女を窓の外から中に引き入れ、銀髪の少年が叫んだ。

「おっおまえ……！？」

塔が大きく揺れた。

先発の砂蟻が塔に突っ込んできたのだ。もう時間がない。

「くそっ！ 仕方ない！ おい小僧！ これを持っていけ！」

大將は少年に向かって何かの紙を投げつけた。その紙は丁寧に丸められていた。少年はそれをうまく受け取る。

「いいかつ！ その地図の場所へ必ず行け！ パンドラという女がお前達を待っているはずだ！ 死んでも女神様をお守りしろ！」

「わかった！」

少年は紙を受け取ると少女を連れて塔の下へと降りていった。

「いいのですかつ！？」

半年も守ってきた大切な神の象徴を、ハンターに任すなど兵には納得のいくことではなかった。

「いいわけがなからう！ あんなハンターに女神を任せられるか！

まずは女神の護衛を優先とし、飛行竜による脱出の準備が出来次第女神を奪還する！ お前はあの少年を追いかけて、女神を護衛しろ！

！ お前はワシと来い！ 飛行竜の使い手が少ないことが仇となったわ！」

「はっ！」

「了解しました！」

2人の兵士は敬礼した。

1 - 6 帝国軍第四類 キクとカントロウ

「ダンテー!! どこなの!!」

ソネットはダンテの名を叫んだ。逃げ惑う兵士の中をかき分け、ダンテを探す。兵達はソネットのことなど無視して廊下を駆け回る。

「おい! お前! 早く逃げないか!」

兵士の1人がソネットの腕をつかんだ。

「うるさいわね。私の息子がいないのよ!」

その手をふりきる。

「もう知らんぞ!」

兵士はさっさと行ってしまった。もはや塔を守るべき兵士は散り散りとなっていた。グラム大将の命令よりも速く、砂蟻が塔に体当たりしてきたからだ。予想外の速さで砂蟻は塔を占拠していった。

サブマシガンがけたたましく塔内に鳴り響く。ロングソードを抜き、砂蟻の腹に突き刺す兵もいた。だが、やはり数に圧倒され、次々と硬い顎により頭を砕かれ、胴体を分離させられ、体当たりによる衝撃により全身の骨が砕けた。すでに兵の数よりも砂蟻の数が多数を占めている。戦況はエリニウス側の敗北を認めていた。

ソネットは何とか砂蟻の攻撃をかわしながらダンテを探し続ける。塔の強固な壁は、砂蟻の体当たりにより簡単に破壊されていく。柱にヒビが入り、塔が少し傾いた。

「母さん!」

「ダンテ!?」

愛しい者の声だ。ソネットはすぐに阿鼻叫喚の中、ダンテの声を聞き分けた。

「ダンテ!」

ダンテが塔の階段から下りてきた。ソネットはすぐダンテを抱きしめた。

「よかった——私の可愛いダンテ」

クシャクシャになった銀髪から懐かしい匂いがする。ソネットの目に涙がたまった。

「母さん……それより」

スタスタと静かに塔の階段を降りる者がいた。

胸で苦しそうにもがくダンテの後ろに少女がいる。

影から現れた2つの瞳は、血のように真紅に染まっている。

だが、それは不気味という感情ではない。人ならざる艶美に思わずソネットは息を飲む。

——すごく綺麗な瞳。だけど……。

心がつかまれ揺さぶられる。心拍数が勝手に早まっていく。口の中の水分が乾いてくる。その赤い瞳は人を底知れぬ不安へと陥れる。

「……あなたは？」

「始めまして、ノゾミです」

ノゾミはスカートを手に取り、恭しく頭を下げた。

「あつ、始めまして」

挨拶を返した後、瞳の奥に何かあることに気づいた。そこには月のように薄い金色の『烙印』がある。それは噂に聞く『神の血脈』ではなかったか。

——そんな……まさか……。

実在しているはずがない。あの帝国が『絶滅宣言』したのだ。この世界にいるはずのない存在なのだ。

「ダンテ……この子は……」

砂蟻がノゾミの後ろの壁を突き破った。

煉瓦が雨のように散らばった。

触角が機械的にソネット達の方へ向いた。

「くっ！」

ダンテは反射的にノゾミの手を引いた。

「砂蟻！ もうこんなところまで！」

ソネットは背中から剣を抜いた。

「かえりた……い……かえり……たい」

マルスオフの頭部から何かがはえてきた。それは人のように頭があり、体があり、両腕があった。下半身は砂蟻と同化している。姿は灰色の皮膚から肋骨が浮き上がり、人の骸骨を連想させた。両目は異常にまで赤く、憎悪の炎に燃えている。それは人の言語である「かえりたい」を何度も呟いた。

「……かえり……たい……」

ノゾミを見つけると、8本の足を使って方向転換し、襲いかかってきた。ソネットはダンテとノゾミの前に立とうと剣を持ったまま走った。だが、予想以上に砂蟻の反応は速い。

「さがって！」

ソネットが叫んだ。間に合わない。それより早くマルスオフの強力な顎がノゾミに振り下ろされる。

「やめっ……」

砂蟻の前に立とうとしたダンテをノゾミは片手で制止した。

ノゾミの瞳が黄金に変色している。

神々しい光がノゾミの全身を包み、外へと魔力を発散させた。魔力を直接受けた砂蟻はエコーズと共に動きを止められた。

——まるで時が止まったかのように砂蟻の動きは完全に制止した。

「……すごい」

ダンテはノゾミの能力に、感嘆した。ソネットは今がチャンスとダンテに向かって叫んだ。

「ダンテ！ 今よ！ 早くその子連れて逃げるわよ！」

ソネットの声でダンテは我に返った。

「行こう！」

ノゾミの手を握るとソネットの後を追った。制止した砂蟻とエコーズは口すら動けず、魔力の効力が切れるのを待つしかない。エコー

ーズは獣のような赤い瞳でノゾミの後ろ姿を睨んでいた。

ソネットはスナ鳥を停車させている区域へと向かった。運のいいことに、まだその区域に砂蟻は侵入していない。スナ鳥達は身の危険を感じているのか大きく鳴き、首の縄を断ち切ろうと暴れている。もう何羽かは逃げ出したようだ。そこにはハイドロもいた。

「あつ！ あんた！」

「おう。あんたも来たのか。悪いけどお先に失礼」

ハイドロはスナ鳥の縄をとくと、背中に乗り、さっさと南西の方角へ逃げ出した。

「私達もスナ鳥に乗って逃げるわよ！」

スナ鳥は残りあと2羽だった。大量のスナ鳥が飼われているはずだったが、兵達が勝手に持ち逃げしたのだろう。

「ダンテ。いけるわね？」

「大丈夫。僕とノゾミと一緒に乗るよ」

ソネットが1羽の背中に乗り、ダンテとノゾミがもう1羽に乗ることになった。ノゾミはスナ鳥の背中に乗ったことがないので最初は戸惑っていた。そんなノゾミをダンテは手を貸し、どうにか背中に乗せることができた。

「僕の背中にしっかりつかまってて」

「はい」

遠慮なしにノゾミはダンテの背中に抱きついた。腕からレザーアイマーの感触が伝わってくる。ダンテはうまく手綱をさばくと、スナ鳥を一回転させた。ノゾミは怖くなって両目をつぶり、ダンテの背中に顔をうずめた。

（…… あつ、いけないいけない）

ダンテの背中にしがみつくノゾミを見て、ソネットは複雑な心境に陥っている自分に気づいていた。その邪念を追い払おうと頭を振った。今はここから逃げることに専念しなければならない。

「よし！ いいよ、母さん！」

「うん！ それならハイドロが逃げていった方向へ……」

突然、ハイドロの悲鳴が響いた。ソネットはスナ鳥の動きを止めた。

「……ではなく。逆の方向へ逃げましょう！」

「オッケー！」

ソネットとダンテは手綱を操り、ハイドロとは逆方向へと走り出した。

3人を乗せたスナ鳥は「クエー！」と一声叫ぶと砂漠の砂を踏み鳴らし、塔から北東の方角へ走った。さすが砂漠で進化した動物だけあって地理に不利はない。旧世界の塔が遠くなっていき、未だに人の雄叫びや銃声が静寂だった砂漠を喧噪に変えている。兵や大將には悪いが、やはり自分やダンテの命が最優先である。ソネットは黙祷を込めてチラリと後ろを振り向いた。

すると、砂蟻達は方向転換してソネット達の方へと移動を開始した。再び砂嵐が空へと舞い上がり、寡黙な砂蟻の4つもある黒い目が太陽に反射した。ゾクリとソネットの背筋に悪寒が走る。

「追いかけてくる！」

ダンテは砂蟻達の異常行動にすぐに気づいた。頬に激しく当たる乾いた風が、氷のように冷えてきた。

「どつどつして追いかけてくるのよ！ 塔の兵士達の方が筋肉もあっておいしいじゃない！」

砂蟻達の中心にノゾミを攻撃したエコーズがいた。真っ直ぐソネット達を睨む。

（あのエコーズ！？ どうして！？）

エコーズの行動原理がわからない。ソネットは少しパニックに陥った。「母さん！ 落ち着いて！」とスナ鳥の手綱裁きに乱れが生じたソネットを、ダンテが一生懸命励ました。

砂蟻達がどんどんソネット達に追いついてきた。スナ鳥の時速は速い部類に入るが、限界までスピードを上げてくる砂蟻達はそれをはるかに陵駕していた。ダンテは何か手はないかと周りを探した。

（あれ？）

空で何かが光った。水色と赤色が虫のように細かく動いている。それは急速に落下してくる。

「いつくぞおー！」

突然、空の彼方から大声が砂漠に広がった。赤色の光は炎の翼をまとった人間だった。水色の光も水の翼をまとった人間だ。2つの相反する翼はソネット達の後ろの砂蟻達に凄まじい速さで迫っていく。

「あれは……」

次の瞬間、水と炎が砂蟻に当たる直前でクロスし、再び空へと羽ばたいた。「ボンッ！」と炎と水の柱が立ち上がり、砂蟻達を地面から吹き飛ばした。強力な攻撃魔法に砂蟻達はたじろぎ、陣形が崩れていく。

「13神の力だわ！」

この世界では典型的な高位魔術だ。ソネットでも知っている。最高クラスの攻撃型魔術。その中でも『四天』と呼ばれる翼を持つ魔法。

この魔法を使えば普通の人間でも空を自由に飛び回る事が可能になる。しかしそのコントロールの難しさに背に魔力の翼をはやせても、空を飛行できるのはさらに修行を積み重ねなければならない。よって今空中を飛行しているのは第一級魔道師に匹敵する。

男と女の両目は赤い瞳であり、右半身に『ロードの印』がうきあがっていた。それは『赤眼化』している証拠だ。2人とも右手の甲に何かの紋章があるが、ぼやけてよく見ることができない。

炎の翼を持った男は大きく回転すると一気に急降下した。マルスオフと同化したエコーズを狙っているのだ。エコーズの赤い眼がギョロリと動いた。

「もらったわな！」

男の刀がエコーズに振り下ろされる。

スカッ

「あら!？」

エコーズは素早く体を砂蟻の中に隠し、刀をかわした。

男はそのまま砂漠の中へと突っ込んでいった。

「ちよつと!？」

男の安否が確認できない。かといって助けることもできない。今スナ鳥の手綱を離せば終わりだ。

エコーズは再び本体を砂蟻の体から出現させた。

「本命はこつち！」

出てきたばかりのエコーズの体に剣が振り下ろされた。

「ぐあっ……」

エコーズの肩が裂けた。赤い鮮血が砂蟻の体に飛び散った。

水色の翼を持った女がそのまま空へと上昇していく。どうやら赤い翼の男は罠で、水色の翼の女がトドメをさす段取りだったらしい。罠にかかったエコーズは、赤い目を動かし空へと逃げた女を追った。

「あの紋章は……」

女の右手の甲に『オピオン』の紋章が出ていた。それは『盲目の蛇』を表す国章だ。つまり、大帝国に所属する者であることを証明している。男の方ももしかすると同じ国章があるのかもしれない。ソネットはゴクリと唾を飲み込んだ。

空では赤い翼を持った男が砂漠の砂を全身に浴びながら待機していた。

「ゴホッ……どうだ!? うまくいったか? キク?」

「いや……浅い。さすがにしぶといね、カンタロウ君」

砂蟻達の進行は止まらない。多少陣形は乱れたが、すぐに体制を整えてくる。指揮官1人いるだけでこつこつと戦況は違ってくるのである。

「かえり……たい……かえり……たい……」

エコーズの眼から血の涙が流れる。そして再びマルスオフの中へと隠れた。

「隠れたか……こつなりや砂蟻ごと一気に」

「待つて——様子がおかしい？」

水色の翼を広げ、キクがカンタロウを制止する。砂蟻達の速度が遅くなった。いや、ソネット達の速度に合わせてきているのだ。

「母さん」

「わかつてる」

ソネットとダンテも砂蟻達の奇妙な行動に気づいた。

「コケー！ コケー！」

スナ鳥達が唐突に泣き叫んだ。

「何！？」

「うわっ！？」

大地震が発生した。画面が激しく上下に揺れる。ソネットとダンテはよろけそうになるスナ鳥を立て直すのに必死だった。ノゾミはダンテの背中から顔をだし、遠く前方を指さした。

「——来る」

砂漠が揺れた。

地震ではない。

砂漠の砂全体が衝撃に耐えられず、轟音を天にまで響かせている。世界の空間が震え、空気がすべてを圧迫し、ゆれは太陽にまで到達した。

「あれは——」

5人の視線が固まった。

砂から巨大な透明な羽が4本飛びだしてきた。

その羽虫のような羽はまだ序章に過ぎなかった。

本体はさらに巨大で、長い胴体の先に小さな頭がある。

砂の中から出てくる際、砂漠中の砂が空に飛び上がり、それは大きな波となった。

まるで海から巨大な大蛇が出てきたようだ。

全長は軽く旧世界の塔を超えている。

体はイモムシのようにドーナツ状に重なっており、色は闇よりも深い黒で光沢を帯びる。

砂蟻のような4つの目に、巨大な顎、2つの触角が静かに動く。

オオオオオオオオ――

その巨大な怪物は声を上げていない。

悲鳴を上げたのは砂漠だ。

圧倒的な怪物の前に自然は為す術もなかった。

「――砂蟻の女王様だ」

口を開けないカンタロウの変わりに、キクがその怪物の名前を言った――。

1 - 7 女王蟻

旧世界の塔の上では、グラム大将と部下が女王蟻の出現に体を硬直させていた。双眼鏡を持つ手が震える。砂漠の熱さが原因ではない生ぬるい汗がとめどなく流れた。グラム大将の後ろで飛行竜が突然の巨大な古代の生物にパニックを起こしている。

「ばっ……馬鹿な。砂蟻の女王が地上に現れることなど有り得ん！」過去にまったく事例がないことだった。ゆえに砂蟻の女王の存在は知っていても、その姿を見た者は少ない。だが、今砂漠を支配している巨大生物は、文献に描かれている砂蟻の女王の特徴と一致していた。

「くそっ！ あんな小僧に女神を任すのではなかった！ おい！」

「はいっ！」

「あの小僧について行けと命令を受けた兵士はどうした！？」

「消息不明です！」

グラムの目元が引きつった。

「おのれ！ 今日に限ってこつも裏目につ！ 飛行竜は準備できたか！？」

「だっ、駄目です！ 興奮し、制御がききません！」

「うっ、うわあ！」とベテランの飛行竜使いが叫んだ。またグラムの目元が引きつった。

「くそお！ なんとかしろ！ ハンター！！！」

「……どうしたら……いいの？」

砂蟻から逃げるソネットは絶望感に支配されていた。このままス

ナ鳥を進めていけば、女王蟻へと突っ込んでしまう。かといってスナ鳥を止めてしまうと後ろの砂蟻の大群に押しつぶされる。斜めや横に逃げようにもエコースにより意思を支配された砂蟻が、V型の陣をとりソネット達を逃がさないようにしている。八方塞がりだ。

「——私がここから降ります」

ダンテの背中を抱きしめているノゾミが提案を出した。

「……えっ？」

ダンテとソネットは意味がわからず聞き返した。ノゾミはいたって冷静だった。

「さっきのエコースの狙いは私です。私が倒ればあのエコースは後ろの砂蟻の制御をやめると思っています。あなた達はそのままスナ鳥で進んで行ってください。砂蟻が歩みを止めた時、方向転換してください」

ノゾミの手がダンテから離れた。

「さようなら——ダンテ」

ゆっくりと体を砂漠へ預ける。

「ノゾミ！」

砂漠へと吸い込まれていくノゾミの腕を、ダンテがつかんだ。力強くけっして離そうとしない。ノゾミは驚いた。

「……ダンテ？」

「駄目だ！ 君を死なせはしない！」

ノゾミの赤い瞳が動揺する。理由がわからないからだ。

「ダンテ、私を離さなければあなたの母も、あなたも、死んでしまいます」

わかりやすくダンテに説明する。だが、ダンテは首を横に振った。「君を絶対に離すものか！」

ノゾミはダンテを説得してほしそうにソネットに助けを求める。

「……うん、さすが私の息子。ノゾミ！ その手を離しちゃ駄目よ！」

予想外の答えだった。ノゾミはもう一度2人に忠告することにし

た。

「でも、あなた達は死にますよ？」

「……覚悟のうえよ」

ソネットはノゾミに振り向くこともなく、決意を告白した。

スナ鳥を操るソネットとダンテの真上では、魔法により空中を飛行しているカンタロウとキクの姿があった。2人はこれからどうするか思考を高速回転させていたが、もう時間が残されていないことを知った。すでに砂蟻の女王の前に、側近である羽砂蟻が奇声を上げ、攻撃行動を開始しようとしている。このまま進めば確実にソネット達の身が危ない。

「これは助けないといけないわな。キク。行くぞ」

「待つて！」とキクはカンタロウを止めた。

「……鳴いている……砂蟻が鳴く所なんて初めて聞いた」

キクは砂蟻の生態に詳しくはないが、この世界の砂漠地帯に必ずいる生き物なのである。旅していた時に何度も目撃している。蟻のわりには気性は穏やかで、人を襲うことは滅多にない。肉食でもあるがサボテンばかり食べているイメージしかない。あんなに奇声を上げる所は学者ですら知らないのではないか。

「まさか……」

キクはある事に気づいたが、カンタロウは待ちきれずソネットの元へ向かった。

「おい！」

「何よ！」

余裕のないソネットは声が荒い。魔法の翼をコントロールしながらカンタロウは許容範囲まで近づいた。

「今からお前達を運んで飛ぶ！ そのスナ鳥は捨てる！」

帝軍が自分達を見捨てず、助けてくれることにソネットは驚いた。普通なら何のメリットもないハンターなど助けずにさっさと逃げていくはずだ。もしかするとノゾミの『神の血脈』に気づき狙ってるだけかもしれないと考えたが、とにかく助けてくれるのならダンテやノゾミだけでも救ってもらいたい。

「わかった！ けどまずダンテとあの子からにして！」

「大丈夫だ！ キクがやってくれる！ キク！」

「カンタロウ君！ わかった！」

キクがカンタロウの傍にまで飛行してきた。水色の翼が太陽の光で輝く。

「何が!？」

「あの女王蟻は後ろの砂蟻とは系統が違う！」

「つまり何!？」

後ろの砂蟻達の足音がうるさく、カンタロウとキクは自然と大声になってしまっていた。

「血が繋がってないってこと！ 恐らく砂蟻は縄張りに敏感で滅多に争いはしない生き物だと思う！ それが今回大群を率いて攻め込んできたから女王蟻とその側近の羽砂蟻がでてきたと思うの！ あの鳴き声はきつと威嚇！」

「そうか！ 自分達のテリトリーに侵入されると勘違いしているわけだな！」

だからあんなに鳴いているのだとカンタロウは理解した。

「だからあのエコーズを止めないと蟻達の戦争に巻き込まれちゃう！」

「エコーズなんて探している暇はないわな！ 俺はこの女を運んで飛ぶからお前はその子達を運んでくれ！」

「それしかないね！ わかった！」

例え女王蟻が出てきた理由がわかったとしても、結論としての答えはそれしかなかった。

さつそくキクはノゾミを抱きかかえた。「あつ……」とノゾミは空気のような声を漏らした。カンタロウは大人であるソネットの体を両手でつかんだ。「変なところ触らないでよ！」とソネットは警告した。「そんなに余裕ならまだ大丈夫だわな」とカンタロウは笑った。

「さつ、君も私につかまって」

左胸にノゾミを押しつけると、キクはダンテに手を伸ばした。

「……止めなきゃ」

急にダンテがスナ鳥の背中の上に立った。ソネットはダンテの様子にまだ気づいていない。

「えっ？」

「ノゾミをよろしくね、綺麗なお姉さん」

「ちょ、何してるの？」

「上を見て」

ダンテの言うとおり、キクが上を向くと黒い影がいくつも射した。空には何十匹という羽砂蟻達がキク達を狙っている。

「羽砂蟻!？」

「いつのまに! 囲まれてるぞ!？」

カンタロウも太陽を隠す羽砂蟻の存在に気づいた。羽音の動きが、自然ではなく規則正しい。明らかにエコーズに操られている。ソネットもダンテが何をしようとしているのかようやく気づいた。

「ねえ綺麗なお姉さん——もし余裕があったらよろしく」

ダンテは微笑むと、スナ鳥の背中を蹴った。キクの真上を素通りしていく。ソネットがダンテをつかもうと手を伸ばすが届かない。ダンテはそのまま空中を遊泳し、ある砂蟻に向かって剣を抜いた。

「そこにいるんだね? ——ごめんね」

ダンテが剣を投げた。剣は砂蟻の背中を貫いた。

「がつ!?! があああつ!?!」

砂蟻とは違う魔物の悲鳴が木霊する。砂蟻は生命の灯火をなくし、スピードの赴くままに砂漠に転がった。その上を仲間の砂蟻達が踏

みしだいていく。

「このおおお！」

空に飛び上がったダンテをつかもうと、キクは手をのばした。ノゾミを抱えているためバランスがとれず、魔力の翼は思うように動かない。大帝国章『オピオン』が苦しげに真つ赤に光る。魔力は限界に達し、キクの手はあと数?の所でダンテの手から離れていった。

——届か……!?

その瞬間——空間が静止した。キクは気づいていないが、ノゾミの瞳が金色に輝く。砂蟻達やキクの動きは静止していないが、ダンテの体だけが空中で止まった。

——今一瞬、空間がつ!?

考えている余裕はなかった。ダンテの手を取った刹那、一気に重力がキクにのしかかった。

「よしっ！」

キクはダンテの手をつかんだまま空へと上昇しようとした。背中の水色の翼に魔力を追加し、曖昧な風切をより具現化させる。もくもくと砂蟻達が起こす砂煙がキクの視界を邪魔する。キクは齒を食いしばった。

「くううう!! ちよつときつい!!」

自分でも聞いたことのない悲鳴だ。子供とはいえダンテとノゾミの体重は、キクの力を吸収していく。『赤眼化』できる時間も残り少ない。最後の力を振り絞って魔力の出力を上げた。それによって水色の翼はさらに具現化され、天使のように大きく羽ばたいた。

砂煙がようやく晴れ、視界が広がった。真上にある太陽と砂蟻の行進によって削られた砂漠跡が交差する。そしてキクの目の前に巨大な岩が姿を現した。

——嘘っ!? キノコ岩!

てっぺんは広がり、根元は細い。砂嵐に根元が削られた典型的な砂漠の岩壁だ。高さはちょうどキクの視線先がてっぺん部分にある。このまま飛行を続ければ確実に衝突する。

一瞬、キクとノゾミの目が合った。キクは固くなった表情をとい

た。
キクはダンテとノゾミを捨て、体重を軽くし真上に逃げるという選択をしなかった。むしろ自分の体を盾にするため体を翻し背中を向けた。両目を閉じたのは重傷を負うであろうダメージに耐えるためだ。

「インバルンの名において命ずる！ 高速の炎の塊となり敵を砕け！」

カンタロウの声が空に響き渡った。炎の塊がキノコ岩の前の砂漠を吹き飛ばす。キクの翼はうまくその上昇風になり、空へと舞い上がっていく。

「よっしゃ！ ナイス、カンタロウ君！」

「おうよ！」

カンタロウは親指を立てた。

「よかった……ダンテ……」

ソネットも安堵のため息をついた。

「はあ……無茶するな。ところであの子はお前とどういう関係なんだ？」

「はっ！？ ちょっ！？ 何強く抱きしめてんのよ！ はっ、離しなさい！」

真っ赤になったソネットがカンタロウの体から離れようと手に力を込めた。

「いやっ。今ここで離すと落ちるわな？」

必死で抵抗するソネットを宥めようとしたが無駄なようだ。カンタロウは翼を閉じると砂漠へと降りていく。

「いやっ！ やめて！」

「暴れるな暴れるな。今降りるから」

地上では指揮官を失った砂蟻達がウロウロと今いる場所の確認を

していた。エコーズからの意識支配から目が覚めたのである。支配されている時の記憶はなくなっているようだ。

「はあー。無茶するね。君は」

「ごめんなさい。でもお姉さんすごいね」

ダンテは申し訳なさそうに頬を掻いた。

「まゝあね……って、この子寝てるし」

キクに抱えられていたノゾミは「スー、スー」と寝息をたてていた。

1 - 8 新たな旅立ち

砂漠は平穏を取り戻しつつあった。

砂漠に高波が現れ、山が盛り上がっている。女王蟻が地中のコロニーに帰るためできた砂漠の波だ。他の側近の羽砂蟻も女王と共に帰っていく。砂漠は海のように、女王達を飲み込んでいった。

ソネット達を襲った砂蟻達は、違う砂蟻のテリトリーに侵入しそうになっていることに気づき、慌ててその場を去って行った。女王蟻を護るために巣に向かっていた砂蟻も、杞憂だとわかり、砂漠の砂へと潜っていく。砂漠に日常的な光景が戻ってきた。

『赤眼化』を解除し、キクとカンタロウは地上へと降りた。2人の右手の甲にあった国章や右半身の神の印も消えている。カンタロウから離れたソネットは、すぐにダンテの元へと走る。

「ダンテ！」

ソネットの剣幕にさすがのダンテも萎縮した。

「あつ、ごつ、ごめん母さん……」

「母さんを困らせないで！ どうしてあんな無茶するの！ もしあなたが……私からいなくなったら……もう私……」

ソネットは強くダンテに抱きしめた。目には涙がたまっている。

「……ごめんよ。母さん」

真剣に自分を心配する母に、ダンテはもう一度謝った。

キクとカンタロウはお互いの無事を確認していた。

「はいカンタロウ君。この子おぶってよ」

キクはノゾミをカンタロウに差し出した。それでもノゾミは起きてこない。小さな寝息をたてている。

「うん？ なんで寝てるんだ？」

「さあね。まつ、起こすのも悪し」

「そうかい。いい寝顔だわな」とカンタロウはノゾミを受け取り、背中に背負った。

「ヤッホー。大丈夫かい？」

ノゾミをカンタロウに託し、手を振ってキクがソネット達の元へ近づいてきた。ソネットは慌てて涙を拭いた。

「次からあんな無茶しちゃ駄目だぞ？」

キクはダンテに注意した。

「わかった」

ダンテは素直に頷いた。

「……一応お礼は言っておくわ」

低い声でソネットはキクにお礼した。

「いいってことよ。で、その子とあなたはどんな関係？」

「別にそんなことどうでも……」

「僕の母さんだよ」

ダンテが答えてしまった。「ダンテ!？」と答えを渋ったソネットが叫んだ。

「ええっ！ そうなのっ!？ ぜんぜん似てないじゃん」

その言葉にソネットはカチンときた。

「ほっというてよ！ これでも鼻はそっくりだねって言われるんだから！」

「ちょー微妙じゃん。よくわかんないし」

ソネットとダンテをキクは見比べている。

「よく見なさいよ！ ほらほら！」

鼻を突き出す。キクは少し引いた。

「わかったわかった。そういうことにしておくよ。そんで？ あの子はあなたの娘？」

今度はノゾミを指さした。

「そんなことどうでも……」

「あの子はノゾミ。依頼主から丁重に送り届けるように言われてるんだ。『神の血脈』の子」

「へっ!？」とキクは驚いた。「ダンテ……」とソネットは頭を抱えた。

「どうした？」

ノゾミを背負ったカンタロウが近づいてくる。ソネットは慌てて誤魔化そうとしたが遅かった。

「その子『神の血脈』を持ってるんだって。気づかなかった」

「……本当か？」

キクの報告に、カンタロウの目が細まる。犯罪の臭いがプンプンするからだ。『神の血脈』に関する事件は特に多い。

「本当よ！　って、あっ！」

言ってしまった。ソネットは口を抑えたが、遅かった。

「この子をどうするつもりだったんだ？」

「あなた達に教える理由はないわ」

これ以上キク達と関わりあいたくないソネットはソップを向くことにした。

「そうか。俺はカンタロウ。帝国軍第四類所属」

「私はキクだよ。同じく帝国軍第四類所属。よろしく」

2人はとりあえずソネット達に自己紹介した。

帝国軍第四類。大陸中央を支配する五大帝国の1つ、大帝国が所有する軍隊である。エリートで構成される帝国軍第一類、一般兵で構成される帝国軍第二類、技術兵で構成される帝国軍第三類、そしてマルスオフ、エコーズ等強力な外敵を討伐するために精鋭部隊で構成される帝国軍第四類。定員は50名、全員が十三神の力を発動できる条件、『赤眼化』を持ちその力は第一級魔道師に匹敵する。

「大帝国の軍の人！？　すごい！　だからあんな高度な魔法使えたんだ！　それに帝国軍第四類って死帝って呼ばれてる人達だよね！　？　カッコいい！」

帝軍は子供に尊敬される職業ランキング上位である。ダンテは興奮して飛び上がった。それに対してソネットの反応は低い。

「あなたは反応薄いね。証拠見せようか？」

「別にいいわよ。その右手の甲。盲目の蛇オピオンの国章を見たから」

『盲目の蛇：オピオン』は大帝国の国章だ。特に帝国軍第四類の国章の表現方法は特殊で、赤眼化が完了すると同時に右手の甲に表れる仕組みになっている。国章は卵から盲目の蛇が出てくる姿が描かれており、他の帝国もそれぞれ特殊な国章をもっている。個人を識別するコードも含まれているので、両手がない者は帝国軍第四類になれる資格をなくしてしまうのである。

ソネットがそれを知っているということなので、キクは右手を下げた。

「そう。でっ、君達のお名前は？」

「あなた達に名乗る必要は……」

「僕はダンテ。母さんはソネットって名前だよ」

またまたダンテは素直に答えてしまった。ソネットはもう何も言わなかった。

「ねえねえ！ もう一回『赤眼化』して見せてよ！」

「駄目駄目。もう疲れちゃった」

「え〜」とダンテは残念そうに項垂れた。「また今度ね」とキクはフォローした。

「さて。自己紹介も終わった所で、この子が仮に『神の血脈』をもった子だとして、お前達はどうする気だった？」

カンタロウが問い詰め始めた。

「それはね……」

「待ってダンテ。私から説明するわ」

ソネットは手を上げてダンテを止めた。

「私達はあるその旧世界の塔にいたエリニウスっていう宗教団体から依頼を受けたの。その子を護ってほしいってね。ただそれだけよ。深い意味は無いわ。それに犯罪だったとしても、私達はお金さえ貰えればなんだってやるの。待遇のいい帝軍さんとは違うんだから」

ぶっきらぼうにソネットは答えた。

「やけに突つかかるな」とカンタロウが言うと、「今ツンが出ております」とキクが返した。

「でっ？ 帝軍さんが何故こんな砂漠にいるのよ？」

今度は逆にソネットがカンタロウ達を問い詰めた。

「それは教えられんよ。何せ機密事項だから……」

「私達はS級犯罪者を追ってたんだよ。エリニウスが基地にしているあの塔にその犯罪者が現れるってどっかからリークされたの」

「……っておい」と機密事項を言ってしまったキクにカンタロウが突っ込んだ。

「でも匿名だから信用性はゼロ。そんな情報で人は動かせんということで、私達2人だけでわざわざこんな大陸西の砂漠まで来たってわけ」

「S級犯罪者……って、あの国1つ滅ぼすことができるっていう？」

口に手を当てソネットは驚いた。

「まあそれは拡張しすぎだと思うが、それぐらい危険な犯罪者だ」
カンタロウが補足した。

「ねえ母さん。S級犯罪者って何？」

「人の名を呼ばれない者——皆『獣の名』で呼ばれているわ。犯罪等級最高の犯罪者でその能力は国1つ滅ぼすと言われているのよ」

「母さんがやつつけてる人？」

「あれは小物よ。あんな奴等よりよっぽど手強いはずよ。会ったことないけど」

「へー……」と初めて知った知識にダンテは息を漏らした。

「もしその情報が本当だとしたら……やはりノゾミを……」

「狙ってるかもしれないね。もしこの子が本当に『神の血脈』を持っているのなら」

背中ですやすや眠っているノゾミに全員が注目した。

「ノゾミは本当に『神の血脈』を持ってるよ」

「だとしたら保護対象だ。この子は俺達が預かり、大帝国へと連れて行く」

平然とカンタロウは言った。

「そんな！？ 待つてよ！ その子の護衛を依頼されたのは私達よ！ 報酬金が……あつ」

「どしたの？」と目を丸くするソネットにキクが訪ねた。

「報酬金……まだ契約が済ませてないわ！ 今から行って契約を！」
まだグラム大将との契約をソネットは済ませていなかった。契約途中でマルスオフが攻めてきたからだ。時間は元には戻せない。ソネットは焦った。

「あの塔なら全滅してるよ。エリニユスの人ももう生きてないんじゃないかな？」

確かに、塔を見ると黒い煙が上がり、人の気配がしない。しかも人肉を貪りに大型のマルスオフがやってきている。兵士の遺体を啜え、巢へと持ち帰るつもりなのである。数時間前までは人の活気に溢れていたのに、今では再び魔獣の住処へと戻っていた。

「確かめなきゃわからないじゃない！」

「駄目だ。砂蟻がまだウヨウヨしてるし、人の死体の臭いをかぎつけて砂漠のマルスオフが集まっている。俺達の体力もないし危険すぎるわな」

「もういいわ！ なら私1人で……」

1人で行こうとするソネットをダンテが止めた。

「母さん。この地図の場所にノゾミを連れて行けば報酬金が貰えるんじゃないかな？」

「えっ！？」とソネットが叫ぶ。ダンテは手に持っていた地図を広げていた。

「この町にパンドラって人がいるから。そこにノゾミを連れて行ってくれて髭のおじさんが言ってたよ」

「さすが私の息子！ 素晴らしいわ！」

ソネットはまたダンテを抱きしめた。「苦しいよ……母さん」とダンテは呟いた。

「というわけで、お引き取り願おうかしら？ この子は私達が無事送り届けますので」

ソネットが腰に手を当て言ったが、キクとカンタロウの姿はそこにはなかった。2人はちゃっかりとダンテから地図を見せてもらっていた。

「ほうほう。この地図から目的地への道は……ここから南に渡って入り江がある港湾都市から船にのって沿岸航海してこの町に到着すると」

赤いバツ印から逆算して地図をなぞっていく。ダンテもカンタロウの指を追った。

「町から結構離れてるね。山脈を越えた所だな」

「聞いたことのない町だな。エリニウスは幅広く宣教しているからもしかすると支部があるのかもしれない」

「そんなことより久しぶりに新鮮な海の幸が食べられるな。よっしゃ！ 行くかカンタロウ君！」

キクがはりきって手を振り上げた。

「大陸中央に住んでいるとなかなか食べられないからな。行きますかね」

カンタロウは冷静に同意した。

「ちょ、ちよつと待って！ あなた達何言ってるの？」

「君達について行くことに決めただけだよ？」

「どうして！ あなた達には関係ないじゃない！」

ソネットがキク達に抗議した。

「関係なくはない。もし本当にS級犯罪者が『神の血脈』を狙っているのならこの子についていくのが妥当だ。それにお前に守れるのか？ S級犯罪者からこの子達を？ 無事ではすまんわな」

「そつ、それは……不確定な情報なんですよ？」

痛い所を突っ込まれ、ソネットはしどろもどろになった。確かにS級犯罪者の力は未知数で自分1人で『神の血脈』を守れるかと言われれば自信がない。

「火のない所に煙はたたないでしょ？ 何、別に私達は何も不利益なこととはしないよ。ただこの子が無事エリニウスに届けられるか見

届けるだけ。それが終われば任務は終わり。S級犯罪者が現れないことが無事証明され、大帝国に帰れるってわけ。こちら仕事なんだよ？ し・ご・と」

「その割には楽しそうじゃない……」とソネットは小さく抵抗してみせる。それぐらいの抵抗ではキクは動じないので「ふふん」と逆に余裕を見せられた。

「母さん、僕はいいと思うよ。一緒に来てもらおうよ」

ダンテに頼まれれば嫌とは言えない。ソネットは渋々頷いた。

「仕方ないわね……」ただお金は絶対にあげないわよ！」

一応自分の利益をソネットは主張した。キクとカンタロウは反論すらしなかった。

「いいよ別に。そうと決まったらとりあえず風呂と飯だな！ もう金属の上で卵を焼くのも飽きたし」

砂漠の気温は40度を超えている。今ここで立っているのも辛くなってきた。

「ああ、しばらくは見たくないわな」

卵を食い飽きたカンタロウは、お天道様を見上げた。

「じゃカスパルに行くか。レッツゴー！」

拳を空に突き上げ、キクは先頭をきつて歩き始める。その後ろをダンテとカンタロウがついて行く。

「明日ギルドへ行つて、スナ鳥を借りて砂漠出るか」

すでにカンタロウは次の段取りを考えていた。ソネットは1人ため息をついた。

「は……ほんと、どうなるのかしら？」

カンタロウの背中ではノゾミは可愛らしげな寝息を続けていた――。

1 - 9 S級犯罪者 イナゴとアリゲモ

カスパルに帰る前に、ソネット達はスナ鳥を手に入れることにした。幸い砂蟻達に押しつぶされなかった2羽のスナ鳥が生きていた。カンタロウとキクがもっていた食料を分け与えることで、再びその背中を許してもらうことができた。ダンテとノゾミ、ソネットが1羽に、もう1羽にキクとカンタロウが乗り込んだ。

スナ鳥を手に入れた後は、ダンテのロングソードの回収だった。エコーズを倒したその剣は砂の海に突き刺さっている。エコーズの死体はなかったが、恐らく砂蟻達によって巣へと持ち帰られたのだろうと推測され、そのままカスパルへと向かうこととなった。

旧世界の塔の屋上ではグラム大将と部下が8人ほど生き残っていた。塔の下ではマルスオフが、人の臭いをかぎつけ集まってきていた。新鮮な肉に我慢ができず、マルスオフは吠えたが、グラム大将は無視していた。

グラムが双眼鏡を置いた。

「よしっ！ 今より女神奪回を開始する！」

「はっ！」

グラムの一声に、8人の部下が敬礼した。腰にはロングソード、肩にはサブマシンガンがつけられている。この8人以外の部下はすでにマルスオフの餌となっていた。

「目標は女神である少女！ その他ハンターである女1人、その子供1人、魔術師の男1人、女1人である！ 女神さえ回収できれば他の者の命は保証しなくていい！ 奴等はカスパルへと向かっている！ 恐らく今日の宿をとるのだろう！ 今夜奇襲をかける！」

「了解しました！」

こんな状況でも部下の士気はまったく落ちていなかった。皆信じるものがあるからだ。『女神』とはそれほどまでに人に強靱な精神力を与えていた。

「飛行竜を用意しろ！ 女神奪回後ただちにハオスへ向かう！」

「失礼します。ハンターの命も奪ってよろしいのですか？」

1人の兵士が敬礼しつつも前に出た。

「女神の世話役が必要だ。言うことを聞かないようであれば子供を人質にとれ。それでも駄目なら殺せ」

「了解しました」

「ではすぐ準備にとりかけ！ 我等は女神に選ばれた戦士である！ 数は問題ではない！ 我等には女神のご加護があるのだ！！」

「女神の祝福を！」

兵士達はさつそく飛行竜の準備にとりかかった。グラムは屋上から砂漠の果てを見据えた。

「……待っておれ。野蛮人などに女神を渡してなるものか……うん？」

手元で何かが動いた。

茶色の虫だ。

不快な羽音をさせている。

この虫の名前を、グラムはよく知っていた。

「——イナゴ？」

「ぎゃあ！？」

突然部下の悲鳴が塔の屋上に響いた。何事かとグラムは振り向いた。

「うつ、うわああああ！！」

「ぐふっ！？」

「なっ、なんだ！？」

「ひっ、ひいひい！！！」

「ぐえっ！？」

一瞬で5人もの部下が血まみれとなり倒れている。剣に太陽の光が反射し、グラムはその者の顔をよく見ることができなかった。だ

が、銀縁の眼鏡、黒の布地の服に、口は黒の布で隠されていることがわかった。部下がもっているサブマシンガンが火を噴く。

「きつ、貴様！ 何者……まさか……」

GRAMの顔に絶望が走った。「ぐわっ！」とサブマシンガンを連射していた部下の腕が空中へ飛ぶ。ロングソードを振り上げた部下の胸が切り裂かれる。最後の部下が目の前で倒れた時、ようやくその男の名前を思い出すことができた。

「S級犯罪者——イナゴ！」

背中に隠してあったハンドガンを男に向ける。だが、その弾が発射される前に剣がGRAMの胸を貫いた。

「ぐっ！？」

力が抜け、地面へ倒れる。口の中に赤い血が広がる。瞬き1つせず、見下ろす男に向かってGRAMは血で染まった歯を食いしばった。

「……おのれ……貴様等なんぞに……女神を……」

それがGRAMの最後の言葉となった。体中から力が抜け、心臓は活動を停止した。イナゴと呼ばれた男は長剣を肩に乗せた。

「ふん——以外に呆気ないな？ エリニユスの軍隊も」

「殺す必要はなかったんじゃないのかな？ イナゴ」

イナゴの後ろでまた別の男の声がした。全身を小汚いの布で包んでいる。頭の布がはだけ、無感情な表情を出す。普通の人間とは違い、特異なのは頭頂部にはえた2本の角だ。イナゴの銀縁の眼鏡が太陽光線に反射する。

「姿を消して高みの見物をしている奴に言われたくはないな。アリグモ。シナリオではコイツ等はマルスオフではなく俺達に全滅させられるはずだった。予定が狂っただけさ」

アリグモと呼ばれた男はイナゴの目を覗いた。

「……僕はトドメをさす必要性はなかったんじゃないかと言っているんだが？」

静かな反抗だ。イナゴは鼻で笑った。

「ならばコイツ等がさっき言った作戦を実行すればどうなる？ ど

のみち誰かが死ぬぞ？　それに俺の凶行を止めないお前は罪にはならないのか？」

アリグモは答えられない。静かに両目を閉じる。

「……僕は争いが嫌いなだけさ」

「まあいいさ。今はお前と喧嘩する気などない。女神がハンターと出て行く所まではシナリオ通りだ。帝軍が入ってきたのはやっかいだが問題はない」

すでに2人は事の顛末を見ていた。エコーズが砂蟻を操り、旧世界の塔を襲い、女神がハンターに連れ出され、帝軍に助けられた事もすべて。アリグモはソネット達が向かった方角に視線を合わせた。「あのハンター……大丈夫かな？　無事女神を届けることができるだろうか？」

「できるさ。あの地図の道通り行けば問題は無い。報酬金だって高いから女神を丁重に扱うだろう。行路からしてエコーズと出会う可能性だって低い」

地図の内容まで把握されている。すでにソネット達はS級犯罪者達の手の上にいるのだ。

イナゴが邪魔な死体を足で蹴った。それが死者を冒瀆する行為に見えたのだろう。アリグモの顔が一瞬歪んだ。

「不満そうだな？　俺も殺しは好きじゃない。ただ少女を神だと崇めてこんな塔に閉じ込めるコイツ等を好きになれそうになかっただけさ」

それは本音だった。アリグモはイナゴの真意に驚き、それが本当かどうか確かめようと体の動揺に注視した。しかし、イナゴは嘘である証拠を微塵も感じさせなかった。それでアリグモはふと、イナゴが犯したミスを思い出した。

「その性格が災いして大帝国に僕達がここに来る計画がバレた」

「そうだな。だが問題はない。あの女も少しは反省しただろう」

「君は脅迫が得意だからね。女神の実の母親は突然の受胎告知に発狂したというのに。——さて、この飛行竜を使わせてもらおうか」

飛行竜はさっきの戦闘でかなり興奮していた。屋上に繋いでいた鎖がギシギシと叫ぶ。その興奮を、アリグモはすぐにおさめていた。飛行竜がアリグモを上位階層の者と認めたからだ。時間にして1分はかかっていない。2人分あればいいので、あとの飛行竜は空に逃がすことにした。

「イナゴ」

準備ができたのでアリグモはイナゴを呼んだ。イナゴは塔の屋上から女神が向かった先をまだ眺めていた。

「——やはり気に入らないな。あんな幼い子供を……切らなければならぬのは」

アリグモは細い目を、イナゴの背中に向けていた――。

「ア……アア……」

砂漠の砂が動く。それは砂をかきわけながら前へ、前へと進んでいた。しかしキノコ岩の前で力尽き、手の動きを止めた。空を飛ぶ鳥達が、その生命が尽きるのを今か今かと待っている。

それは呻いた。もうすぐ自分の寿命が尽きようとしていた。ダンテの放った剣により胸を貫かれ、何とか剣を抜き逃げ出したがここまでの。だが自分の役割は十分果たした。あとは願いを叶えて貰うだけだった。

「よっ」

軽めの挨拶をされた。それが見上げると誰かが立っていた。キノコ岩がちょうど太陽の影になっている。それに声をかけたのは狐目の男、ヤンだった。

「ご苦労さん。お前のおかげで女神の力が見れた。ありや本物だな。あのハンター達が運が良かったのが予定外だったけど問題は無い」

それの……もうすぐ命の灯火が消えかけそうになっているエコーズと同等の赤い瞳をヤンは持っていた。細目ゆえに誰も気づかなかったのだ。血よりも深く、深く濃いその目は死にかけているエコーズに最後の希望を与えた。エコーズの手が救いを求めるようにヤンに向かって上げられる。

「すぐに楽にしてあげるよ——帰るといい。お疲れさん」

ヤンが指を鳴らすとエコーズがいる地面に魔法陣が現れた。円形魔法陣だ。円は魔力を循環させ、エコーズの体を優しい光で包んだ。エコーズの両目が静かに閉じられていく。そのまま光の結晶となり——この世界から消えていった。

「さてと……上も片付いたようだ。まさかイナゴが来るとは思わなかったニヤ。あんなのと会ったら命がいくつあっても足りないしね」

ヤンはすぐに岩の影に隠れた。

S級犯罪者イナゴ。『使役使い』とも呼ばれている。エコーズやマルスオフとは違った別の異世界の魔物を操る人間。例え『24エコーズ』とて、『使役使い』は非常にやっかいな存在だ。数が少ないのが唯一の救いである。

飛行竜が旧世界の塔から飛び立った。方向はソネットとは逆の方角へ向かっている。ヤンは首を傾げた。

「うん？ 奴等……女神を追いかけないのか？ 『神の血脈』を手に入れることが目的ではないということか？」

岩陰に隠れながら考えてみたが、イナゴの行動がわからない。もしかすると『神の血脈』に気づいていないのかもしれないとヤンは考えた。

「それならそれで都合がいい——さっそくアイツ等呼んで、女神をこの手に入れることとするかね」

ヤンの尖った八重歯が「クククッ……」と笑った。

『赤い瞳の少女：完』

2 - 1 水浴び

《僕を――照らさないでくれ》

『第二章：まがいものの女神』

男が全力で走っていた。

樹木がまばらな疎林で腰に刀をつけ、東洋風の服を着た男が木を避けつつも素早く動く。木々の間から射し込む太陽が、男に道を指し示しているようだ。激しい呼吸が、土を蹴る音が、薄い森林に響く。

「グフツ！」

男の後ろで獣が鳴いた。せつかく見つけた獲物だ。獣の足は地面を削り、土を飛ばす。丸く曲がった2本の立派な角が口からはえ、茶色い毛に4本足で突っ込むように突進する。イノシシのような姿だが、両目の赤い目はマルスオフの特徴の1つだ。体格は男の体の2倍はある大きさである。

だが、獣は気づいていなかった。あまりの興奮に男の逃げ方に違和感を感じることができなかったのだ。脳内の戦闘のホルモンが、獣の野生の勘を狂わせていた。

「キク！ 来たぞ！」

男が叫んだ。獣の耳には入らない。そのまま男の体に角を向ける。「よっしゃ！ 任せろ！」

突然木々の間から太い縄が現れた。獣の視界に縄が入ったが、遅かった。すでに足に縄が絡みつき、獣を太い横模様の木の幹に激突させた。

「ソネット!」

「いただきます!」

大剣が獣の体に突き刺さった。大きな悲鳴が木を震撼させる。およそ5秒で獣は生命の火を目から失い、力がなくなった。

ソネットが獣から大剣を抜いた。ヴィーキング・ソードという主に切断を目的とした剣だ。剣の幅が広く、厚い。サイズはもちろんソネットに合わせて作られている。大型のマルスオフに対応するためにソネットが特注した品物である。

「ふう……これで飯が手に入ったわ」

獣の血で剣は赤く濡れていた。ソネットはその太い剣を片手で振る。

「よかったよかった。さすがハンター。剣の扱い方うまいね。一発で仕留めちゃった」

木に縄を縛り付け、罾を仕掛けていたキクが木陰から出てきた。

久しぶりの動物性タンパク質に舌なめずりをしている。

「まあよかったんだろうが……この役変わってくれないか?」

獣をおびき出す役のカンタロウがゼイゼイと息を切らしている。

その懇願は女性2人の耳に届かず、見事にまでスルーされた。

「ご苦労カンタロウ君。さっそくダンテ君の所に行こう」

ダンテとノゾミは結界がはってある休憩場所です3人を待っていた。

「この体では……3人分って所ね。もつとないかしら?」

ソネットが獣の遺体に触れた。

「おいおい……まだやるのか? うん!」

「どうした? カンタロウ君」

カンタロウの言葉が詰まった。口をつむぎ、指を指している。キクが振り向くと、倒されたマルスオフとそっくりな獣が2体、興奮し後ろ足で土を蹴っている。体格は小さく、もしかすると獣の子供

かもしれない。ソネットもその2体の獣に気づいた。

「ふふふ……餌が大量にかかったわ」

獣以上にソネットが興奮していた。

ダンテはロングソードを振っていた。母から教わった型を身につけているのだ。普通ロングソードの長さはショートソードよりも長く作られているが、ダンテの体のサイズではギリギリの範囲内である。ただ剣は分厚く、固い。マルスオフと十分戦える。ダンテの手が握り部分からギシギシと唸っていた。

「ふう……」

汗を腕でふく。本来はソネットとダンテがコンビを組んで餌を探しにいくのだが、キクとカンタロウが仲間になってからダンテは留守番役になってしまっていた。ノゾミの護衛もあるし妥当といえば妥当な選択だ。

そろそろソネット達が帰ってくるので鍋の準備をしなければならぬ。ダンテは服と鎧が置いてある木へと向かった。汗が流れるダンテの肉体は、同年齢の子供よりもたくましく発達している。だが、傭兵や戦闘を主にする職業ではダンテぐらいの体格の子供は珍しくはなかった。

「うん？ 歌だ……」

静かな歌声が聞こえる。寂しげなオルゴールのメロディーのように、細く和らげで儚い。ダンテは上半身の服を着ないまま歌声の元へと足を歩めていた。

休憩場所でノゾミが歌っていた。ノゾミの周りには小動物が集まっていた。小鳥や兎、リスなど草食系の動物が多い。肉食系の動物である狐や狸、狼もたまにいますが、争いは絶対に起こらない。不思議

議な能力だとダンテは感心していた。

「あつ」

ノゾミがダンテに気づいた。同時に、ノゾミに集まっていた小動物達が離散した。

「あつ、ごめん。邪魔しちゃったね」

まじまじとダンテの体を見ていたノゾミは、気持ちを落ち着かせるために息を吐いた。

「いいえ」

一言、そう言つとノゾミは立ち上がった。

「いい歌だね。誰の歌？」

「母です」

「へーお母さんどこにいるの？」

「ベルドという村だと思います」

会話が續かない。いつもノゾミは質問を単語で返す。出会つてからもう3日はたつが、まったく変わらないノゾミの態度にダンテもすっかり慣れていた。

「今は何をしてるの？」

「たぶん——もういません」

「そうなの？」

「はい」

ノゾミは視線をダンテに合わせない。頬が赤くなっている。

「会いにはいかないの？」

「もう会えませんか」

それだけ言つと、ノゾミはささっと休憩場所に戻つていった。

「……そろそろ鍋の準備しようか」

ダンテは服と鎧を着に、置き場所に向かった。

鎧を着たダンテは水を川からくんできた。ノゾミは鍋を準備している。

「ただいまダンテ。今日も大量よ！」

元気よくソネットが紙に包まれた獣の肉を持ってきた。手を大き

く振っている。その後ろではキクとカンタロウが同じ種類の獣の肉を持っていて。大きさはソネットが持っている肉が一番大きい。残りの部分はマルスオフ達が血の臭いで集まってくるので、遠くに捨てられていた。

ダンテは血まみれの獣の肉に、ノゾミがどう反応するか心配だったが、以外に平気なようだ。表情に怯えもなく、まったく変わらないう。動物に好かれるということ、動物を食べるということはノゾミの中では別物なのだろう。

「3匹も捕る必要があったのか？」

「育ち盛りだからいいのよ」

ニツとソネットは白い歯をカンタロウに見せた。

ソネットの頬に獣の血がこびりついている。こうして見ると本当に狩人の女みたいだ。逃げ役だったカンタロウの体にはまったく血がついていない。

「そんなことより血で体汚れちゃった。私、川浴びに行きたいぞ」
キクの体にはそんなに血はついていない。どちらかというと汗まみれな体が嫌なようだ。

「料理はどうするんだ？」

「カンタロウ君やってよ。今日料理当番じゃん」

「そんなこと決めてなかったわな」

あまりにも子供っぽい嘘だ。キクはいつもそうである。カンタロウはもうすっかり慣れていた。

「いいじゃん。じゃ、任すからな。ソネット、川浴びに行こうよ」

「やれやれ」とカンタロウは料理役を暗黙で引き受けた。人のいい性格がでたようだ。キクから獣の肉を受け取る。

「嫌よ。私は1人で入るわ」

「そんないい体してるくせに？」

「いい体ってどういう意味よ？ 私は1人で入りに行きます」

ソネットは頑として一緒に川浴びすることを拒否している。

「ならせめてキクの近くの川にするほうがいいわな。ここは神脈が

あまり通つてないみたいだからマルスオフが多い。丸腰で川にはつかれんだろう」

剣も持たずにマルスオフに襲われれば一巻の終わりである。ソネットもそこはわかつているようだ。

「そうだよ。だから2人の方がいいじゃん」

「……まあそれなら……でも私は離れて入るから！　あと裸見にこないでよ！」

「それを女の私に言うの？　じゃ、ノゾミもついでに連れて行くことにしよう」

どうしても裸を分かち合いたいのか今度はノゾミが目をつけられた。

「キク、私は特に汚れていません」

ノゾミは首を横に振った。

「いいからいいから。臭い女は男に嫌われるぞ？」

その言葉に、ノゾミの赤い瞳がダンテの方を向いた。ダンテは「？」と顔をしかめた。

「わかりました。行きましょう」

あっさりと承諾されてしまった。あまりにも呆気なかったため、強制的につれていこうとするキクの怪しい手の動きが止まった。「何をする気だったの？」とソネットは目を細める。

「じゃあダンテと俺で料理を作っとくか？」

「そうだね、わかった」

ダンテは素直に頷く。ソネットから大きな肉を両手で受け取った。「それじゃ、女3人川浴びに行きますか！」

拳を天高く振り上げ、キクは先頭を歩き出した。その後ろにノゾミがついていく。

「お言葉に甘えるわ。ちなみにカンタロウ。ダンテに手を出さないでよ！」

ビシッとソネットがカンタロウを指摘した。

「出すわけないわな」

「母さん……」

恥ずかしい母の行動にダンテは顔から火が噴き出しそうだった。

「わあ……すごく綺麗」

ソネットが感嘆の声を上げた。

その滝は落差15メートル、標高200メートル以上だろうか。白水が直瀑式に流れており、水が白く濁っている。落差が低いだけに迫力はたいしたことなく、静かに滝は流れているが、その姿はとても優美で美しい。川近くに散りばめられた、真つ白の石がさらに滝を際立たせている。

ソネットはさっそく靴を脱ぐと白い石に素足を降ろした。つるりとした感触が足から伝わってくる。ゾクゾクとソネットは体を震わせた。

「冷たいです」

ノゾミが白水に手をつけた。

「味は……普通の水だな。飲めるぞ」

キクはぺろりと水をつけた指を舐めた。

「ダンテも連れてくればよかったわ」

「いつも一緒に入ってるの？」

「そんなわけないじゃない。交代で入ってるわよ」

「へー禁断の背徳関係を期待してたのに」

「ウシシシシ……」とキクが密かに笑った。

「何言ってるの？」

ソネットは本当にキクが言っている意味がわからないようだ。首を傾げている。キクは「なんでもないって」とまだニヤニヤしていた。

「さっ、マルスオフの気配もしないしさっさと入っちゃおう」

さっそくソネットは布を広げると、木の枝に結わえつけた。キクとノゾミに自分の裸を見せないためだ。黒い影は見えるがそれは仕方がないと諦めた。

「いいっ！　ここが境界線だから！　ここから先は入ってきちゃダメよ！」

滝側を自分のテリトリーだと主張すると首を引っ込める。

「了解了解。滝壺には気をつけるよ」

すでに鎧を脱ぎ捨てているキクが適当に答えた。

「キク、どうしてソネットは一緒に入ることを嫌がるのでしょうか？」

ノゾミはまだ服を脱いでいない。軽量型の鎧を脱いだだけだ。修道服のスカートはサイズが合っていないので本当に短い。一応男子がいるのによく気にならないなとキクは思った。

「お尻にアザがあるんじゃないの？」

「何か言った！」

「なんでも。さっ、ノゾミも脱ぎなよ」

一枚布で仕切っているだけなのでお互いの声はよく聞こえていた。

「……………」

ノゾミは服を脱ぐことを躊躇している。

「何恥ずかしがってるの？　ほらほら、脱がせてあげようか？」

「いいです。自分で脱ぎます」

意を決してノゾミは修道服を脱いだ。エリニユスのマークが、胸に糸で縫われていた。

キクは服を脱ぎ捨てさっさと川につかった。外の外気温と水の温度はちょうどよく、全身の神経を緩めていく。筋肉が柔らかくなり、気持ちよさが頭を駆け巡った。

「あゝ気持ちいい」

白い砂利が足のツボを刺激する。ちょうど大木があるので太陽の光も避けられた。布の向こうでソネットの裸体の影が動く。川につかった瞬間、ソネットの息が漏れた。

「いい天気だねえ」

ふと気づけば、ノゾミもすでに川につかっていた。ただ、キクとは距離を離しているようだ。バレッタを外し、肩まである黒髪のが水に泳ぐ。鎧を着ていたのでわからなかったが、本当に細く華奢で色白。細い指が、艶のある黒髪を手櫛でといた。成長したらこの子は結構な美人になるとキクは思った。

「ノゾミ、こつち来なよ」

「……………」

キクの言葉にノゾミはちゃんと反応している。恥ずかしそうに両手を胸に置き、どうしようか迷っているようだ。恐らく、他人と一緒に水浴びなどしたことがないのだろう。

「何恥ずかしがってるの？」

キクの健康的な小麦色の腕がノゾミの体を抱きしめた。「あつ……」とノゾミは声を上げた。体温が急上昇している。

「ふふん。いい体してるねえ。最近の子は発育がいいわ」

「うつ……」と自分の体を撫で回されても、ノゾミは小さく声を上げるだけで抵抗はしない。キクは幼児体型の体を押しつけ、さらにノゾミの体を弄くり回した。

「ぎゃー！」

いきなり川の水圧がキクを弾き飛ばした。「ドボン！」と川にはまる。

「あんた！ ノゾミに何してるの！」

ソネットからの攻撃のようだ。布から顔だけ見せている。

「何にもしてないよ。耳がいいな」

キクはブルブルと髪を振った。

ソネットに警戒されたキクはしばらく川の流れに身を任せ、空を見上げることにした。布の影からソネットの鼻歌が聞こえる。ノゾミは岩に頭を乗せ、水辺で川遊びをする小鳥達を見つめていた。尾が鮮やかな瑠璃色の鳥だ。

「こんなのは初めてです」

「川浴びが？」

「いえ、同姓と川浴びすることがです」

瑠璃色の小鳥がノゾミの頭に止まった。すぐに逃げ出すかと思われたが、毛繕いをしている。キクには絶対に近づいてこないのに何故かノゾミだけは安心できるようだ。

キクは目をパチクリさせた。

「すごいね君。その鳥は警戒心が強すぎて絶対に人には近寄ってこないのに」

「そうですか？」

頭を動かしても鳥は逃げない。むしろノゾミの頭に腰を降ろしている。

「キクはありませんか？」

「ないない。私の所に来たら捕まえて食べられると思ってるからね」
「そうですか」

ノゾミの表情は変わらない。年齢の割にはやはり表情が乏しい気がする。

「ねえ、ノゾミ」

「はい」

「——親は、いるの？」

言葉に間が入った。聞きにくい事だからだ。

「いました」

過去形だ。ソネットも聴いているのか、鼻歌がやんだ。

「血は繋がっていませんが育ての母はいました。歌が大好きでよく私に聞かせてくれました」

珍しくノゾミは饒舌だ。これなら色々な疑問点に答えてくれるかもしれないとキクは思った。

「エリニユスの人？」

「はい」

「どこにいたの？」

「ベルドという村です」

「小さな村？」

「はい」

矢の如く質問しなければ会話が途切れてしまう。キクは質問を続けた。

「その村はいまでもあるの？」

「たぶん」

「たぶん？」

「もう村があるかどうか。私にはわかりません」

淡淡としている。感情を押し殺すこともない。微動だにもしない。

「……誰かに襲われたの？」

「私は村が襲われる前に逃げ出しました」

「そしてあの塔に行つたのね？」

「はい」

経緯はわかった。ノゾミはベルドという村で生まれ、そこでエリニユスの信者と共に育った。しかし、女神を狙う何者かに村が襲われ、今はもう存在しないかもしれない。エリニユスの軍隊が動いたぐらいだ、相当な敵が現れたのだろう。

その後、旧世界の塔に閉じ込められ、半年近くすごした。ノゾミと同年の年齢の子ならば精神的にまいるかもしれない出来事だ。それでノゾミは無感情になったのかもしれない。

「そっか……」

キクは質問を止めた。もう十分だろう。「ヘクチツ！」とソネットが小さくクシャミした。我慢していたのが出たのだ。

「ねえ。あなたの本当のお母さんは……」

瑠璃色の鳥が空へと羽ばたいた。ノゾミはキクの質問に答えなかった。ただ水辺で遊ぶ鳥を……いや、虚空を見つめていただけかもしれない。

「うん。ごめん。なんでもない」

白い川の流れは絶えることなく3人の体をすり抜けていった――。

2 - 2 赤眼化

しばらくしてソネット、キク、ノゾミの3人は水浴びを終え、川から出た。着替えもすまし、あとはダンテとカンタロウの元へと帰るだけなのだが、ソネットが洗い物があるからと言って2人を待たせていた。

「ふん♪ ふふん♪」

上機嫌で洗い物をするソネット。滝の細やかな飛沫が肌に当たり気持ちがいい。鳥が水浴びをし、小さな羽をパタパタと水辺で飛び跳ねる。下流では狐の親子だろうか、人間に警戒しつつ水を飲み、山から出てきていた。すでに太陽はピークへと達していた。キクのお腹がそれに合わせて鳴いている。

「ソネットー、まだあー？」

キクは櫛で乾いた髪をといていた。

「あとちよつとよ。待ってて」

鎧を着終わりいつでも帰れるキクを尻目に、ソネットはマイペー
スに洗い物を続けている。「ぶうー」と子供のように拗ねるキクに苦笑しながら。

ノゾミは自分の傍へとよってくる小鳥達と遊んでいた。人差し指を出せば今度は腹と腰が黄色い小鳥がとまる。まるでノゾミに愛を告白するかのように「チチチッ、チチチッ」と歌を歌う。無表情なノゾミが一瞬柔らかな顔になった。キクがそれに気づき近づくと小鳥は逃げてしまった。

「あつ……」

「あつ、ごめん」

「いえ」

また無表情に戻った。キクは残念がった。

「ねえ、もう一度その目を見せてよ」

ノゾミに頼む。3日前カスパルの宿で詳しく見たが、もう一度ノ

ゾミの瞳の烙印を調べておきたいと思った。カンタロウが手帳にきちんと書いているが、生と紙とではやはり印象が違う。

「はい」

ノゾミは素直に烙印を見せてくれた。最初は警戒していたが、ダントテが「信用していいよ」と言ってくれた時からノゾミはキク達を信用しているようだ。すでにノゾミの中で本人は気づいていないが、ダントテの存在が大きくなりつつあった。

キクはノゾミの頬に両手を触れると、その瞳を覗いた。

——不思議な瞳。

キクはそう思った。今から100年も前、『瓦礫の塔』と呼ばれる地図でいえば海を中心に小さな島があった。そこには『十三神』が住み、『生命の樹』と呼ばれる大木があった。そこから人類は誕生し、世界へと散っていったと言われている。

だが、神々は自らの欲望のために争い、その肉体を滅ぼし『力のみの存在』へと変わっていった。最後の神『ファースト』が『力のみの存在』となったと確認できたのは、『生命の樹』がある『瓦礫の塔』が地図から消滅したからだ。島はいつの間にか地図から消え、海の藻屑へとなっていた。

その時から『神の血脈』はすべてその力を失った。最初『神の血脈』とは『赤い瞳』を持つ者のことだった。そう、『烙印』はなかったのだ。血のように真紅の瞳を持つ者は、普通の人間の瞳へと戻り、『赤い瞳』を持つ『神の血脈』は絶滅したと発表された。帝国のシナリオではそうだった。しかし、ここに『赤い瞳』と『烙印』を持つ少女がいる。

今でこそ高位魔術である『赤眼化』は一般化されているが、もしかすると100年以前の『神の血脈』とは、『赤眼化』できる人間だったのではないかという説が今最も有力だ。つまり『神の血脈』でもなんでもないということだ。『ファースト』が『力のみの存在』となった影響で、『赤眼化』の持続時間が単に短くなったのではないかという学者もいる。

様々な憶測が飛び交い、人の想像は盲信へと膨らんでいく。だけど真実はとても単純な理由なのだ。その真実を飛び越えて、絵本の世界からノゾミが出現してしまった。

——もしかすると、ノゾミは本当に『神の血脈』の子かも。

キクの考えが正しいのなら、それこそ歴史が変わる大事件だ。エリニウスが丁重に保護するのもわかる。解剖好きの賢帝国の教授に知られればどこまでだって追いかけられる。今後この子の人生はとても厳しいものになるだろう。

——だけどたぶん……この子は……。

キクの顔に影が射した。真実は単純だが、とても残酷だ。ノゾミに対する暗い現実を考えずにはいられない。

「よしと。結構汚れが落ちたわ。それじゃ、行きましょ」

暗澹あんたんな気持ちを払拭するかのような、明るく元気なソネットの声が、キクとノゾミの耳に届いた。

カンタロウとダンテは料理を作りながら、ソネット達を待っていた。

薄い森なので森の香りの元となる揮発性成分も少ない。降水量の少なさが疎林を進行させていったのだろう。木の影も少なく、太陽の光が槍のように射し込む。木の木陰で作業していても、草に光が反射した。

「やっぱり多いな。鍋が脂っこい」

鍋をかき混ぜるカンタロウが愚痴った。肉が鍋を埋め尽くしている。熱い火が水をようやく沸騰させた。

「かといってほっとけばすぐに腐るしね」

鍋の中で肉は脂ぎっており、とても朝食にはできない。胃にもた

れるのは明らかだ。

「こんなにお前は食うのか？」

「ううん。よく食べるのは母さん」

「……よく太らんわな」

これだけの量を食べてあの体型を維持できているのである。貴族の娘が見たら嫉妬しそうだ。体の太さは富の象徴だが、動きが鈍いという悪い印象がある。

「まあ乾燥スープはたくさんあるから。これで誤魔化せるよ」

「塩もいれとくか。香辛料はあるのか？」

「ないよ。高いもん」

「そりゃそうだわな」

一般人では、なかなか香辛料は手に入れない。値段が高価なのだ。ダンテは鍋に手をつけ味見した。

「うん。こんな感じ」

カンタロウも味見してみた。

「ほうほう。なかなかおいしいわな」

「この肉がいいんだよ」

「マルスオフは危険だが食料にはもってこいだわな。マルスオフを捕らえて食料にする仕事もあるんだぜ」

「へ」

「俺も何日か働いたことがある。けっこう給料はいいぞ」

「みたいだね。母さんも働いてた」

「どうやらソネットも経験があるようだ。カンタロウは感心した。

「なんでもやってるな。お前の母ちゃんは」

「お金になればなんでもやるよ。僕も手伝ってる」

「そうか。まっ、こんな時代だ。生きるのに四の五の言ってる場合じゃないわな」

ダンテは両目を伏せた。

「……でも母さんは僕に危険な仕事はさせたくないみたいなんだ」
「そりゃそうさ。大事な息子だ」

「僕には関係ないよ。母さんを手伝いたいんだ」

その年で立派な事を言う。だが、この時代では珍しくない。

「うん。ならもつと剣の腕を磨くんだな。いつかお前が母を養う時が必ずくる。人は成長する。そして必ず年老いて死ぬ。それはすべての人間に与えられた試練だ」

「試練……か。ねえカンタロウさん。赤眼化してみせてよ！」

急にダンテが高揚して言った。よほど『赤眼化』が見たいようだ。そういえば初めてカンタロウと砂漠で出会った時もダンテは『赤眼化』を見たがっていた。

「母ちゃんから見せてもらったことはないのか？」

ソネットは『赤眼化』できるはずだ。カンタロウはそうソネットから聞いた。

「見たことはあるけど僕が見せてつて言っても見せてくれないんだ」
ダンテにも理由はわからない。『赤眼化』することで何か危険が及ぶものでもない。カンタロウは首を捻った。

「そうか？ 理由はわからんが……まあいいさ」

暇つぶしにカンタロウはダンテに自分の赤眼化を見せてやることにした。息を吸うと体内を循環する魔力を高める。神脈を感じ、赤眼化を発動させる。カンタロウの右半身にロードの印が現れる。

「あれ？ 目が赤くならないよ？」

「まだ『起動状態』だからさ。この右目から右の足の爪先まで『ロードの印』と呼ばれる紋様ができる。次に右目の下に文字が浮かぶ、俺の文字は『テト』と呼ばれるものだ。この文字ができ『赤眼化』は完了する」

カンタロウの右目の下にテトの文字が現れた。と、同時に両目が赤くなり、赤眼化は完了した。そこまでの時間はおよそ10秒。神の印である紋様は、戦闘部族が戦争前に顔や目に化粧している姿と似ている。魔力がその紋様を伝っているのか、赤く光り、線を循環しているようだ。この姿から見てもわかるように、赤眼化した人間はかなり目立つ。

「うわぁ！」

ダンテは飛び上がって喜んだ。

「そんなに珍しいもんじゃないわな。ちなみにこの右手の甲にできたのは盲目の蛇『オピオン』。大帝国の国章だ。帝国軍第四類は皆『赤眼化』と同時にこの国章が出てくる仕組みになっている」

カンタロウは右手の甲に浮かび上がった国章をダンテに見せた。

「なんで？」

「高位魔術の発動条件を兼ね備えている証拠としてさ。帝国軍から外された者はこの国章を消される」

「かつこいいい！」

「そつ、そうか？」

少し照れる。赤眼化すれば人の反応は2つに分かれる。1つはダンテのように喜び、もう1つは気味悪がられるのだ。やはり前者は男の子が多い。

「その文字は人によって違うの？」

テトの文字が気になるようだ。

「違うわな。個人によって文字が違う理由はわかっていない」

「キクさんも違うよね？」

ダンテは砂漠の攻防でずば抜けた視力を発揮していた。そのためキクの文字もしっかりと見えていた。

「よく知ってるな？ ああ、確か違っていたわな。……まあ少し変わってるが」

「どうしたの？」

「うん……まあなんでもないわな」

言いずらそうにしている。その態度はますますダンテの好奇心を刺激した。

「ええっ！？ 気になるよ！ 教えてよ！」

「ねえねえ！」とあまりにダンテがせがむので、カンタロウは折れた。

「しょうがない。教えるけど母ちゃんには内緒だわな？」

「わかった！ 約束する！」

「よし。男と男の約束だ」

「うん」

カンタロウとダンテは拳を合わせた。

「キクの文字は『テファ』。この文字を持つ者はキクしか確認されていない」

「どうして？」

「キク以外ないからさ。俺の文字『テト』は結構持っている者がいるんだが、キクの文字を持つ者はまだ発見されていない。だから珍しいんだ」

「ふ〜ん……」とどうしてかダンテは考えている。以外に思量深いなとカンタロウは思った。

「お前の母ちゃんはどうな文字なんだ？」

カンタロウはふと、ソネットについて聞いてみた。

「わかんない」

ダンテは首を振る。どうやら赤眼化の文字についての知識がないようだ。「それなら……」とカンタロウは木の枝を見つけてダンテに渡した。

「文字の形は覚えているか？」

「覚えてるよ」

ダンテはさらさらと地面に形を描き始めた。意外と絵心はある。

記憶もはつきりしているようだ。

「こんな形」

「……これは」

言葉が詰まった。その文字にカンタロウは見覚えがある。

「本当にこんな形なのか？」

「間違いないよ？」

「……………」

黙り込み思考している。カンタロウの表情は真剣そのものだ。ダンテは何故態度が変わったのか理由がわからなかった。

「どうしたの？」

「あつ、いやつ、なんでもないわな」

我に返ったカンタロウは手を振った。ダンテは気になって聞こうとしたが、ソネット達が帰ってきてしまった。

「ダンテ！ 無事だった！」と、ソネットの第一声がこれだった。

「どういう意味だ？」

「母さん……」

異常な母の愛情に、ダンテは本心でやめてほしかった。

「うまそうな匂いだなカンタロウ君。さあ飯にしようぜ！」

キクがはりきって自分専用のスプーンを懷から取り出した。

2 - 3 選択の結果

食事を終え、今後の計画を話し合うことにした5人。地図を広げて指で道をなぞりながら、ソネットとカンタロウ、キクが話し合っている。ダンテはその様子を眺めていた。ノゾミはダンテと少し距離をおき、塔のように立ち上がっている白い花を見つめていた。

「反対だ」

「なんでよ！」

ソネットとカンタロウの意見が割れた。

「今日まで3日。カスパルで1宿、砂漠を出て1宿。今回は速く移動したいからということで、街道を外れて村道を通り、さらに外れて疎林に入った。たださえ神脈から遠いうえに、マルスオフだつて出てきている。これ以上道を外れて森に入ってしまったら強力なマルスオフと出会う確率が高くなる。ここは一旦街道に戻って宿場で1泊するのがかしこい」

「そんなことすれば一週間かかるし、前金もらってないからお金がないのよ！ それならこの辺りで野宿して、明日この森林を夕暮れまでに越えて、一気にココの街道に入った方が時間もお金もかからないわ」

地図を乱暴に指さし、感情的になり始めるソネット。カンタロウは冷静にソネットの意見に反論する。

「まあ気持ちはわかる。このルートは緊急時には使われてたみたいだからな。湾岸都市までの距離が短くなる。だが、行方不明になった旅人もたくさんいると噂では聞いている。神脈もあまり通ってないみたいだし、基本的に深い森林は別名荒海と呼ばれるほどの危険地帯だ」

「危険なことはわかってるわよ。けどもうお金がないの！ 街道に出ても稼げそうな町は遠いし、目的地まで時間がかかるわ」

一歩も譲る気はないらしい。色々な角度からカンタロウはソネット

トを諭したが、聞く耳をもってくれない。

「ダンテ君は野宿平気？」

「よくしてるから平気」

「なるほどなあ……」とキクはダンテをダシに使うことをやめた。恐らくダンテはソネットに味方する。

「そんなに嫌なら別にここで別れても結構よ！」

完全に癩癪を起こしてしまった。カンタロウは口をやむおえずつむぐ。

「あのさあ、ソネット。ダンテ君と君だけならいいと思うけど、ノゾミもいるんだよ？ 彼女にも危険が及ぶかもしれないし」

キクはノゾミを使うことにした。自分が使われているのに、ノゾミは興味がないのか花から目を離さない。

「……まあ、そうだけど」

核心をつかれ、今度はソネットが口をつぐんだ。

「ソネット、私は平気です」

ノゾミは根拠もないことを言った。旅の経験がないだけに危険なことでも受け入れてしまうようだ。

「おっ、おい」とカンタロウが突っ込もうとしたが、それより早くソネットが立ち上がった。

「はい3対2！ 3対2よ！ 多数決でこちらが圧勝よ！」

ソネットはここぞとばかりに勝ち誇った。ここで民主制の多数決を持ち込むのはどうかとカンタロウは思ったが、ノゾミの護衛の依頼を受けたのはソネットである。ただの付き添いの立場である2人は強く言うことができない。討伐目的であるS級犯罪者がノゾミを狙っているという確証がない限り、ハンターの利益を妨害することは法律にも違反する。

「はあ……どうする？ カンタロウ君？」

諦め気味な態度でキクがカンタロウに振った。

「仕方がない。今回だけは付き合ってやる。だけど次からはこんな危険なルートやめとけ」

「なに？ 帝軍も案外小心なのね？ 私達なんてこんなの日常茶飯事なんだから」

「おっほっほ！」とますますソネットは調子に乗った。

「じゃ、決定ね！ お鍋とナイフ、洗いに行きましょう！」

対立していた態度を切替え、ソネットは鍋とナイフを持ち川へと向かった。ダンテはその後ろをついていく。手伝いに行くのだ。「ノゾミ、行こう」とダンテからの誘いを受け、ノゾミもダンテについて行った。

「はりきってるわな」

「そうだよね…… よしカンタロウ君。今夜はソネットに復讐しよ
ぜ」

カンタロウの肩をモミモミしながら、キクは悪戯っぽく八重歯を光らせた。

「えらい事言うわな」

特別カンタロウは止めなかった。

――夜。森林に入る前に決めておいた丘で、5人は野宿することにした。結界の魔法陣が書きやすい平地を選び、キクがナイフでさ
らさらと描いていく。ダンテが興味があるのかキクと一緒に魔法陣
作成を手伝った。中央に棒を刺し、頑丈な糸を使って綺麗な円を描
く。あとは絵を描くだけだ。

「これはなんていう円形魔法陣なの？」

「円形魔法陣『月の都第2』だよ。だいたい2〜10人ぐらいの人
間をマルスオフやエコーズから守ってくれる結界」

中央に都を描き、円の東西南北に閉じた門を書き入れる。魔法陣
を描き終わると、次にキクは詠唱を唱えた。

「うわっ……」

魔法陣が薄く光り、周りに魔力を波及させる。不可視の結界がこれで発動された。

「はい、終わり」

「こんな結界が町や村にはあるんだ？」

「そうだよ。町や村の中央に神殿があつて、そこに魔法陣が必ずあるはずだよ。さて、みんな仕事終わったかな？」

ソネットとカンタロウは、落ちていた木の枝を集め火をつけていた。ノゾミはみんなのために布を用意した。

円陣結界の中、たき火の前で軽い食事をすませた後、突然キクが怖い話をしようと言い出した。「そんなの怖くないわよ。無駄無駄」とソネットは戯れ言と片付けようとしたが、ダンテが興味津々なので結局話を聞くことになった。

キクの怪談話が始まった。

「……ある国王が王位をめぐる争いに負け、死んだの。王妃はショックで白い喪服姿のまま城に閉じこもり、憔悴しきつたまま亡くなったわ。そしたらそのお城に出入りする人が少なくなっちゃって、最後は庭番しか残らなかったの。ある夜、庭番がお城に行ったまま帰らない。心配した奥さんはお城に行くと橋の上で夫が恐怖の形相のままこと切れていた。やがてそのお城では白い喪服姿の婦人が彷徨っているという噂が……」

ソネットは無意識にカンタロウの腕をつかんでいた。

「なっ、なっ、なっ、何よそれ？ 白い猫だったんじゃないの？」

力がこもる。カンタロウは痛さで顔をしかめた。

「怖くないの？」

「怖くないわよ！」

皆から細い目を向けられるソネット。「なっ、何よ」と視線の矢から顔を逸らす。

「それなら俺の腕を離してほしいんだが。すごい力だから腕が切れる」

もう我慢ができないようだ。そう言われ、ようやくソネットはカンタロウの腕をつかんでいたことに気づいた。

「別に怖いからつかんでるんじゃないわよ！　何か握りたいの！」

「それならとりあえず離してほしいわな」

相当痛いらしい。ハンターだけに力の強さは折り紙つきだ。

「ほら！　ソネット後ろ！」

突然、キクがソネットの後ろを指さした。

「きゃああ！！」

叫びが丘を振動させた。たまらずソネットはカンタロウに抱きついた。鎧を脱いだソネットの豊満な胸を、まともにくらったカンタロウの呼吸が止まった。

「きゃはははは！　全然駄目じゃん！」

キクは爆笑だ。よほどソネットの反応が面白いらしい。

「キツ、キク！　驚かさないで！」

「うぐっ！」とソネットの羽交い締めから解放されようとカンタロウは抵抗したが、凄まじい力によって無力化される。「母さん。

カンタロウさんが死んじゃうよ」とダンテが言ってくれたおかげでカンタロウはようやく解放された。「ごほっ！　ごほっ！」とむせている。

「あれ？　幽霊怖くないんじゃないの？」

「ニシシ……」と笑うキクに、ソネットは憤慨した。

「怖くないわよ！　目の前を嫌いな虫が飛んだから叫んだのよ！　ねっ、ダンテ！」

と、恥ずかしさを誤魔化そうとダンテに同意を求めた。

「そうだね」

「大人だな。お前は」

「いいえ」

自分の喉を手でスリスリ触るカンタロウがダンテを褒めた。

「はあ……それじゃ、もう寝ましょ。火も小さくなってきたし、私が先に起きて見張りを担当するわ」

「ごめん」とカントロウに謝り、ソネットは自ら手を上げた。

「次は俺が担当しよう」

カントロウが手を上げる。

「私は朝まで寝る」

キクがカントロウの次に手を上げる。

「おい。そりゃ駄目だ」

「どうしても？」

「どうしても」

さすがに受け入れられないようだ。わかってたことなので、キクは両手を上げた。

「しゃくがない。それならお先に失礼。ノゾミ、コッチおいで」

「はい」

ゴロリと布の上で横になると、キクはノゾミと一緒に寝ることにした。微かだがキクの口から寝息が聞こえてくる。

「……寝るの早いわね」

「いつもあんな感じた。じゃ、俺も寝るわな」

カントロウも横になった。

「僕も。おやすみ母さん」

「はい、おやすみダンテ」

母親らしく優しく柔らかな口調だ。

「何かあったら大声で叫べ。俺よりキクの方が起きるのが早い」

寝転びながらカントロウは手を上げた。

「そうなの？ わかった」

ソネットは丘の上に1本だけあった木に腰を降ろすと、火を消した。

灯りが消えれば——周りは黒よりも暗い漆黒。火種が弾ける音がなくなれば鳥の静かな鳴き声に支配される。静寂と沈黙。暗闇から聞こえるのは小さな寝息だけ。

空を見上げれば満天の星。白、青、赤の星が川のように色づく。乾いた風が髪をゆらす。どこからかする森の匂いが精神を落ち着か

せる。

ソネットはこの世界にある3つの月を眺めていた。赤と黄色と黒の月を。

（綺麗な月……）

あの人が教えてくれた。あの月が3つある理由を。豊富な知識と薄い唇で丁寧に優しく。昔のことを今のようにソネットは思い出した。

（——あの人が、こんな月を見たらどんな感想を言うだろう？）
目を閉じれば思い出す。ダンテは成長するたびにあの人に似ていく。病弱で動けない体だったあの人に比べると、ダンテは元気に育ってくれた。これからも色々な冒険をさせてあげたい、あの人にはできなかったから。

私の存在が——この世界から消えるまで。

黒い手だ。

どうして起きているのに、私は悪夢を見ている？

駄目だ。

あの男がやってくる。

黒い男が私の体に触れる。

卑しい笑みが弓張月のように曲がる。

『お前の人生は——私のものだ』

「はっ!？」

全身に汗をかいていた。ソネットはここが現実か夢か区別しようと目を激しく動かす。頬に大きな手が触れた。

「大丈夫か？」

カンタロウだ。カンタロウの体温に妙な安堵感をソネットは感じている。血が一気に顔に上った。

「なっ、何よ！」

手を払いのける。顔が真っ赤になっているのがわかる。

「ふう……交代だ。疲れていたのか？ 見張りなんだからしっかりしろ」

「あっ、ごっつ、ごめんなさい」

「いいさ。代わろう」

カンタロウが手の平を上げた。「何よ？」と行動の意味がわからず、ついソネットは言ってしまったが、それがタッチだということに気づき、手を「パンッ！」と叩いてあげた。

「よろしくね」

「あいよ」

ダンテの元に向かうと、スヤスヤと寝息を立てていた。隣に座っても起きてこない。ソネットは横になると、ダンテの前髪を優しくかき上げた。いつも嗅いでいる息子の匂いがする。

「よく眠ってるわ。ダンテ……」

「いい寝顔だな」

ソネットが見張りで座っていた木に腰を降ろすと、カンタロウは刀を抱きかかえた。

「ありがとう。あなた達が旅の手伝いをしてくれるからダンテの負担を軽くできる」

「気にするな」

「——昔は大変だったのよ。よく悪夢を見て起きちゃうの。だけどそれもいつの間になくなっちゃった」

初めてソネットが自分の事を話した。ある程度キクとカンタロウを信用したようだ。

「何かしたのか？」

「ううん。私は添い寝しただけ」

「いい母親じゃないか」

「そうかしら？ 自信ないな」

手からダンテの体温が伝わってくる。緩くなった表情が可愛い。

ソネットは微笑んでいた。

「間違いないさ。自信をもて」

辺りが静かなだけに言葉はソネットの心の奥底にまで入ってくる。今日の昼間の出来事を思い出し、ソネットはカンタロウに謝ろうと思った。

「……今日ごめん。あなたが言ってることは正しいわ」

今日の昼間、カンタロウやキクの言っていることは妥当だとソネットはわかっていた。

「……ああ」

「だけど私には——もう時間がないの」

「うん？」

「ううん。なんでもない。おやすみ」

手を振ってソネットは両目を閉じた。

「ああ」

カンタロウもそれに答えた。

「いい雰囲気じゃないか？」

ソネットとカンタロウの会話を聞いていたのかキクがからかった。どうやら目を覚ましてしまったようだ。

「お前は本当によくそういう所に食いつくわな」

「ふふん……あれ？ ノゾミちゃんまだ寝てないの？」

ノゾミの赤い瞳がパツチリと開いている。闇の中輝く赤さはひときわ目立っていた。

「キク、どうして星はあんなに輝くのでしょうか？」

星を眺めていたようだ。

「ううん……どうしてだろ？」

「昔母が言っていました。あの星はこの世界で死んだ者の魂が輝いているのだと」

「ロマンチックだねえ。私そういう考え方好き」

「私は非科学的だと思いました。あれはただの恒星。自ら光を作っているだけだと」

ピシヤリと自然の事象を断定する。

「本で勉強したの？」

「それ系統の本は読みました。母も知っているはずです」

「ならさ。ノゾミは天国つてあると思う？」

キクに視線を向けるノゾミ。キクは真っ直ぐ空を見据えている。

「……わかりません」

「どうして？」

「死んだ人から聞けないからです」

「そうだよ。この世界には、わからないものがたくさんある。だから人は想像できるの。もしかするとあの星は恒星じゃないかもよ。だって誰も宇宙に行ったことないんだもの」

ノゾミとキクの視線が合う。

「……………」

「だからさ——魂が輝いているってのが一番ロマンチックじゃん。

君のお母さんは素敵な人だね」

「……そうですね」

無感情なノゾミの口元がほんの少しだが笑った。

「キクさん」

急にキクの名前が呼ばれた。ダンテだ。眠いのか目をこすりながらキクの傍に立っている。

「おお、どうしたダンテ君？ お母さんじゃ物足りないのかい？」

どうしても下ネタの方向へ誘導したいようだ。カンタロウは咳払いした。

「違うよ。悪いけど、ここで寝ていい？」

「どうして？」

「母さんはイビキが……」

「グゴー！！ フゴー！！」

この世のものとは思えないイビキが闇を浸食している。喉が震え、

気道が叫ぶ。口を大きく開け手足は四散し、品の欠片もない姿のソネットが夜の醜態を皆にさらした。カンタロウとキクはその人間とは思えない魔物の雄叫びにドン引きした。交代してまだ1分足らず、『早寝大会』というイベントがあれば優勝者として世界に君臨できるだろう。

「……凄まじいんだ。いつもは耳栓してるんだけど宿に忘れちゃった」

平然と魔物の息子、ダンテは大あくびした。

「おいおい……大丈夫なのかコイツ？」

異常なイビキにカンタロウは心配になった。イビキの停止は、下手すれば生死にかかわるかもしれない。

「すごっ！ でもさ。ノゾミちゃんもダンテ君達と同じ部屋だったよね？ 耳栓してるの……」

キクは呆氣にとられた。「スー、スー」とノゾミは寢息をたて熟睡している。魔物の呪われた叫びですら平然と眠る神経の図太さに誰もが感服した。

「ノゾミはすごいんだ。母さんのイビキをものとしてない」

「なんか……さすが女神って感じ」

知られざる女神の生態が今初めて発見された瞬間だった。

「仕方がない。おいでダンテ君。お姉さんと一緒に寝よう」

キクは両手を広げてダンテを受け入れようとした。

「いやっ、近くで寝るだけだからいいよ。どうして両手を広げるの？」

キクの申し出を明らかにダンテは拒否している。照れてるのが顔も赤い。

「セクハラはやめとけ。ダンテ、こっちに来い。俺の傍で寝ればいいさ」

カンタロウがダンテに助け船を出した。

「えー。ダンテ君。せっかく美人なお姉さんが一緒に寝ようって誘ってるんだよ？」

「僕はカンタロウさんと寝るよ」

「即決！？ やっぱりまだ年齢的に早かったな」

「ブー」とふて腐れてキクはゴロリと横になった。ダンテはカンタロウの傍に布を広げると横になった。ソネットの魔物の雄叫びはまだ続いている。

「それにしてもイビキが止まらん。鼻になんか突っ込んでくか？」
さすがにあのイビキを聞くのは耐えがたいらしい。

「平気だよ。あのイビキでマルスオフがやって来ないんだ。ビビつて」

「お前はすごいな…… まあ、ある意味便利な兵器だわな」

慣れとは恐ろしいとカンタロウは思った。

まだ5人は気づいていなかった。

夜の闇にまぎれ、遠くの木から5人を見つめる大きな瞳を。

怪鳥は一鳴きした。

その瞳の奥は5人の姿をありのまま映していた。

深淵な夜の森の奥。一番高い木の太い枝に寝転ぶ男の姿があった。線のように細い目をしたその特徴は、ソネットが砂漠の塔であったヤンであるとする判別できる。

ヤンは腕に小型のマルスオフをとまらせていた。そのマルスオフは目が人の何十倍もあり、ヤンの腕をつかんでいる手は一本しかない。つまり、目と手しかない怪物なのだ。主に通信手段として利用されるマルスオフで、地面から引っこ抜けば半年はもつ。半年後は萎びて死んでしまい、眼球が割れて胞子を飛ばす。森の奥にしかない魔物である。ヤンが持っているのは特別に改良されたものだ。
「あらら……こんな所にいたのか。まさか女神がいるってのに危険

なルートを通るとは予想外だった」

怪鳥の視界が映像として『千里眼』と呼ばれるマルスオフに伝えられていた。映像からソネット達5人が寝ている姿が覗える。ヤンは「ふゝむ……」と顎をさすった。

「見つけたのかえ？」

ハンデタイプの無線から女がヤンに話しかけた。音声のみで映像はないため、声の主の姿はわからない。賢帝国技術者が作った無線機械は枝の間に設置されていた。市場で売られていたものをヤンが買い取ったのだ。

「つたくしつかりしろよ！」

チャンネルの違うもう1つの無線から若い男の声がした。

「悪かった悪かった。落ち着くニヤ。とりあえず目標は発見できた」
「今から行くか！」

深夜という時間帯を利用して敵に攻め込むつもりらしい。ヤンは苦笑した。

「いやつ、さすがにこれからあそこまで行くのは時間がない。待ち伏せするのが妥当だニヤ」

「わらわ達はどうすればよいのかえ？」

癖のある口調で女がヤンに判断を求めた。

「このルートだと……街道に戻るか森を通るか……」

「わざわざ危険な森を通るとは考えにくいがお」

「俺なら森を通るぜ！」

「ふむ……よし。とりあえず森で待ち伏せすることにしよう。外れればまた別ルートを考える。とにかく船に乗られる前に捕らえないとな」

「よっしゃ！」と若い男の声と共に、無線の奥から無数のマルスオフの興奮した叫び声がノイズと共に木霊した。

2 - 4 深淵なる森林の中へ

朝がきた。

朝影が丘を射し、最後の見張りとして木に座っていたキクを照らす。細い目蓋から光が入ると、全身の体温が上昇する。仄明かりが脳を活性化させ、鼻孔から濃厚な自然の匂いが感じとれる。どこか遠くで間延びした鳥の鳴き声が聞こえた。キクはゴシゴシと目を擦ると両腕を伸ばした。

「うつ……ん」

暖かで穏やかな協風が肌を撫でる。全身をマッサージするように脳の快楽神経を刺激した。寝起きの眼に夜では見えなかった、黄色のヘビイチゴの花や白く小さなナズナが小さく風に揺れる。手を地面につけば土が、夜の冷たさを伝えてくれた。

「おはよう！」

丘の登頂で誰かが立っていた。ソネットとダンテだ。2人は両腕を左右に動かし、両足を屈伸させている。

「……何やってんの？」

「何って朝の体操に決まってるじゃない！ あなたもやる？」

ソネットの体が大きく左に曲がり、そして右に曲がった。ダンテもそれに習う。どうやら毎日の日課のようだ。

「……朝から元気だな」

カンタロウも起きていた。起き上がり頭をボリボリ掻いている。その隣ではノゾミが朝の光を浴びてもなお、目を閉じ寝息をたてていた。

「まだ寝てるのか」とカンタロウはノゾミの寝起きの悪さに驚いた。茶色の体に背中に黒い斑点のある小鳥達が、ノゾミの胸の上で遊ぶ。「うつ……」とノゾミは苦しそうな呻き声をあげた。

「椰子の木みたいな頭してるわね。さっ、とにかくあなたも体操しましょ」

金髪の髪が何本か天に向かって広がっている。キクの寝癖である。どうやって寝ればそうなるのか未だ解明されていない謎だ。

ソネットがキクの腕をつかんだ。強制的に体操に加える気だ。キクは「えゝ」と迷惑顔で抵抗した。

「やだあ。朝から体動かしたくない」

「何恥ずかしがってるのよ？ さあさあ。カンタロウも立って」

「うゝ」と結局ソネットの力に負けてキクは朝の体操に巻き込まれた。

「……俺もやるのか？」

「もちろんよ！」と女特有の元気で張りのある声に、カンタロウも渋々立ち上がった。

体操を終えた後、川で洗顔と髪を整え、朝食をとることになった。昨日取っておいた木の実が並べられる。

「いい？ 喧嘩するように平等に分けましょう」

1人、1人にソネットは木の実を渡していった。固い殻はすでに取り除かれ、中の脂肪分の高い、岩のような形の実が手の中で転がる。2つほど余った実は、ダンテとノゾミに渡された。後はそれぞれパンを頬張った。

「ふう……何か朝から体痛い。しかも眠い」

ポリポリと実をかじりながら、キクは目をしばたかせた。昨日のソネットのイビキと早朝の体操が相当体にこたえたようだ。

「しっかりしなさいよ。だらしないわね」

「誰のせいだ。誰の」

「何よ？」

カンタロウの皮肉にソネットは顔をしかめた。

「昨日魔物のイビキが聞こえたんだよ」

「えっ！？ ほんとに！？」

「精神的にダメージを受けてもうボロボロ」

腕を伸ばすキク。眠気がまだ収まらないようだ。

「私は熟睡してたから知らないけど……でもたいしたことない魔物

ね。私平気だし」

「だらうね」

「何よ??」

本当にわかっていないようだ。ソネットは隣でパンを食べているダンテに尋ねた。

「ねえダンテ、昨日何かあったの?」

「別に、何もないよ」

母を気遣ってかダンテは本当の事を言わない。

「なんだ。やっぱり何にもないじゃない。ノゾミもそうよね?」

「ソネット、イビキがうるさいです」

「ブー!」とカンタロウの口から木の実が噴き出した。「直球で言ったよ」とキクはノゾミの怖い物知らずの根性に感心した。ダンテは銀色の瞳をパチクリさせた。

「何言ってるのよ? 私は生まれてから今までイビキなんてしたことないわ。キクじゃないの?」

まったく自分のイビキの凶悪さをソネットは理解していなかった。熟睡しているので当たり前だが、やっぱり責任をキクになすりつけている。

「……ソネット」

「なっ、何よ」

キクはゆらりと立ち上がった。

「うりゃ!」

「ひっ!」

素早くソネットの後ろに回り込むと両手で胸を鷲づかみにした。手が安物の鎧であるレザーアーマに食い込む。卑猥な指の動きが柔らかな大きな乳房を揉みほぐした。あまりにも公然とした猥褻行為に、帝軍のカンタロウですら自分の立場を忘れていた。

「何すんのよ!」

真っ赤になり肘をキクの顔面に食らわせるソネット。

「うぎゃ!??」

キクは後ろに吹っ飛んだ。

「ふー！ ふー！」とソネットの呼吸が荒い。頬を紅色させキクを睨んだ。「お前な……」とカンタロウは顔を手で押さえた。

「……ふふ、カンタロウ君。一矢報いてやったぜ」

地面に頭をめり込ませ、お尻を空高く突き出しつつも、キクは満足気に親指を立てた。

「体張ったわな」

カンタロウは頷いた。

丘を出て徒歩約1時間。

まだ朝露が乾ききらない時刻に、ソネット達は難関である森林に到着していた。陸地は湿地地帯で雨の水が溜まった淡水湿地なのだろう。花飾りのように半球体に広がった黄色の花であるリョウキン力が点々と点在している。植物の栄養が富んでいるため名前も知らない多様な植物が足に絡まってくる。遠くで、人に驚く灰色のコウノトリが様子を伺っている。

「これは……」

森林を前にしてカンタロウは声を上げた。高木を超えた林冠や高木の間に低層の木々が埋め尽くされている。あまりの木の高さに遠くを予想することすらできない。その森林にポツカリと暗い穴が開いているのである。もしかするとここを通る旅人によって切り開かれた穴かもしれない。

「完全な熱帯林だわな」

湿地よりも高層ゆえ、地面は固く乾いている。自分達より高い木によって光合成ができない木は、人の死体のように地面に倒れている。そこから傘の茶色いキノコが何本もはえている。

「どうしてこんな森できるの？」

「単純に降水量が多いからだ。プレートが収束して山もできてる。その山から水が流れ巨大な湖を形成してるんだろうな」

ダンテの疑問に答えつつも、カンタロウは地図を地面に広げた。

「この地図からして陸地なのは北と、南西と、東の3つ。後は山と湖に囲まれてるわけか。それにしても単純な地図だな」

等高線の表現が浅く傾斜がわかりにくい。これでは山頂はなんとかわかってても、森の広さの予測がつかない。ただ単純に街道を中心として描かれた地図のようだ。

「森のど真ん中進むしかないわね。予想以上に山の傾斜がきついわ」ソネットに続いてダンテも地図を覗く。

「そうだね。今僕達は南西にいるから……一気に北に向かって森を抜けないと日が暮れて危険だね」

それがどう考えても妥当なようだ。

「もう少し詳しい情報を聞けなかったのか？」

「しょうがないじゃない。宿屋のおっちゃんに地図見せて聞いたならそうだつて言うんだもの」

2泊目の宿屋でソネットは近道を宿屋の老人に尋ねていたようだ。

「はあ……街道を外れるつて言う所からおかしいとは思ったが。本当に信用していいのか？」

「大丈夫よ！ 宿屋を経営して30年。多くの旅人を見てきた俺の目に狂いはない！ つて言つてたわ」

「イメージが目には浮かぶわな」と、自分が痴呆気味であるとわからず旅人にアドバイスする老人の姿が見えた。

「まあいいじゃん。とつとと行こうぜ！」

キクはズケズケと深淵な森林の中へと入っていった。

森に入り30分経過した辺りから、道はますます険しくなっていた。動物の骨に混じって人骨まで出てきた。嫌な予感が辺りに侵食し、それは現実となった。

キクが4人に向かって片手を上げた。何かが来る合図だ。キクのマルスオフに対する直感は異常に鋭い。カンタロウはそれを知っているため「気をつける」とソネットに忠告した。

突然、マルスオフが現れた。背中に鋭い針のあるワニ型のマルスオフ、2本足で立つ毒々しい紫色のカエル型のマルスオフ、木の上から襲いかかるサル型のマルスオフが奥の森林から襲いかかった。久しぶりの新鮮な人肉に獣と爬虫類は興奮し、彼等にとって戦いは餌の取り合いである。

この3種類は帝国によりマルスオフ：イエロー認定されているクラスだ。イエローは一般的に人を襲うマルスオフのことである。よって名称もカエル型は『ツトグラ』、ワニ型は『ボクルグ』、サル型は『エト』と呼ばれているが、この3匹はそれらの亜種なため便宜上名前を呼ばれるのみの最下層のマルスオフだ。

「くっ!？」

カンタロウはボクルグの噛みつきかわし、身軽な体技で忍者のように木の幹の横に立った。ボクルグの背中から針が飛ばされる。刀で飛ばされた針を弾くと、真上からボクルグの背中を貫いた。

「やあ!」

ソネットは木の上から降りかかってくるエトを一気に3匹切り裂いた。さらに地面を走ってくる2匹を仕留めると、マルスオフの血のついた剣で威嚇する。いきなり仲間5匹殺されたエトは、本能的に恐怖を感じ後ずさった。

「いつ!？ 気持ち悪!」

キクはツトグラを相手にしていた。ギョロギョロと大きな両目を動かしながら、透明な体液を吐きつけてくる。木の陰に隠れ、体液をかわしながら、1匹、また1匹と剣で切り裂いた。2匹やられた

所でツトグラはすぐに逃げ出した。

敵を退けたという安心からか、3人の呼吸が漏れた。すると、後ろで剣の金属音が響く。「ダンテ！」とすぐにソネットは踵を返す。
「ノゾミ！ 僕の後ろへ！」

ダンテが骸骨と戦っている。骸骨は錆びて刃のこぼれた剣を振り上げ、ダンテの剣に打つ。次々と地面に倒れていた人の骸骨が立ち上がり、ダンテの方へとゆっくりとした歩調で歩いてくる。1体、2体とダンテは骸骨の遅い動きの隙をつき、倒していくが、下半身を折られても地面を這いずって襲いかかってくる。

ソネット、キク、カンタロウの3人も戦いに参戦した。だが木が邪魔なうえに骸骨の剣をかわすのも一苦勞で、徐々に中央に追い詰められていった。

ノゾミを中心に囲み、4人は東西南北と背中をつきあわせた。

「なんか骸骨多いわね！」

「恐らくこの森林に入った旅人だわな」

興奮で感情的になっていくソネットとは対照的に、カンタロウは冷静に切り返した。

「なんとかならないの！」

「無理無理。あれは術者が操ってるから何度攻撃しても無駄」

死者を操る魔法原理を知っているキクは手を振った。

「どこにいるのよ！？ そんなの！」

「たぶん近くにはいないわな。恐らく森に古くから住む妖精か何かの仕業だろうさ」

勝利を確信してか、ケタケタと骸骨達が笑う。人を小馬鹿にしたような笑いだ。

「とんだ悪戯者ね！」

そんな事を言っている間にも、骸骨はますます数を増していった。武器の特徴から、かなり前時代の骸骨もいるようだが、腐るところか艶のある太い肋骨をしている。どうやらこの森林には澱んだ空気が溜まりやすく、しかも骨は腐ることなく存続できるようだ。

「ちょ、ちよつと……数が多くなってない？ 獣や爬虫類型のマルスオフは逃げたのに！」

森の闇から光る赤い眼窩の多さに、さすがのソネットも後ずさり始めた。

「すごい数の人がこの森で死んでるんだわな。大方術者はお前に道を教えた宿屋の親父だったんじゃないか？」

「あつ、それ有り得る。カンタロウ君面白い推理」

キクとカンタロウはまったく動じていない。「……すごい余裕ね」とソネットは汗の流れる額を拭った。

「じゃ、あれやるぞ！ カンタロウ君！」

「わかった」

キクとカンタロウは同時に赤眼化の魔力を発動した。右半身に赤きラインが走り、右目下に文字が浮かぶ。カンタロウは『テト』をキクは『テファ』の文字が出るまで10秒。赤き両目をした高位魔道師が骸骨達の前に歩み出た。

「インバルンの名において命じる。黒き結界を作りあげ、我等を守れ！」

カンタロウの手が地面におかれ、短い詠唱である『一桁詠唱』で炎が広がる。炎は草や地面を焦がし、黒い結界を作った。範囲は狭いが簡単な円陣型魔法陣ができあがっている。

「何っ！？」

何をしているのかわからないソネットは、敵前の前にもかかわらず後ろを向いた。

「よし。この中に入って動くなよ。キク！ いいぞ！」

5人を円陣型魔法陣に入れると、キクは両手を横に広げ赤き目を閉じた。

「ランゲの名において命じる。紅海の大蛇よ、高波をもって敵を一斉攻撃せよ！」

キクの両手から紅い水が渦を巻いて巻き起こった。それは空で大蛇となり、魔法陣の外を凄まじい勢いで回転している。蛇が通った

地面から高波が上がり、森林の一番高い木を追い越して流れだす。波は骸骨を押し流し、森林の奥へと追いやっていった。

「すっ、すごい……」

ゴクリと唾を飲み込む。ここまでの術者をソネットは見たことがなかった。波はキクが魔力の放出を止めると、すぐに消失した。

「すごいやキクさん！」

ダンテは飛び上がった。

「ふふん、お姉さんに惚れたろ」

赤い瞳でダンテに向かってキクはウィンクした。「はいそこ！ダンテを誘惑しない！」とソネットが突っ込んだ。

「見事に洗い流したな。これでしばらくは襲ってこないわな」

戦闘が終わり、森林は元の静けさを取り戻していた。

2 - 5 魔法とマルスオフ

だが、それで終わりではなかった。

30分もたたないうちに、マルスオフはソネット達に襲いかかった。ノゾミがいてはうまく逃げることもできない。正面突破しか攻略法はないのである。

しばらくして、ようやくマルスオフの攻撃が止まった。森林にいるほとんどの種類のマルスオフと戦ったのではないだろうか。今がチャンスと、5人は小休止をとることにした。

キクは得意の木登りで天候の確認をしにいった。一番高いである木の上に金髪が摩く。

「うーん……すごい森の匂い」

足を枝に、手を幹に、しっかりとつけ遠くを見据える。

空から眺める森林の景色はあまり変化がない。緑の海に酔いそうになる。先も木が邪魔でよく見えない。動きがあるとすれば鳥が空を飛び立つ時ぐらいだ。

「どうだ!？」

「大丈夫! 絶対に雨はこない!」

自信をもって言える。森林の下では見えなかった青空が世界を覆う。これで雨が降るといふのなら異常気象だろう。

「よし。わかった」

激しい雨の恐れはなくなった。しばらくは安心して森林を進めよう。方角の確認のため、太陽もついでにキクに見てもらった。

「器用ね。あの子」

少しソネットに疲れの色が見えた。やはりマルスオフの数が多い。今まで何とか撃退できていたが、これがダンテとノゾミだけの3人なら、どうなっていたかわからない。帝軍のキクとカンタロウの助けがあったからこそ、ここまで生きてこれたようなものだ。

「どうした? 少し後悔してるか?」

「……うつん、疲れただけ」

——後悔はしない。それをするぐらいなら前に進まない。
ソネットは頬をパンツと叩いた。

「ダンテ、奇妙な形のキノコがあります」とノゾミは腰をおろした。傘の赤茶色のキノコが、何本もはえ、地面に輪をつくっている。「これは妖精の輪だよ」とダンテはノゾミに教えてあげた。

キノコは地面の中で糸のような菌で絡み合っている。それで輪ができあがるのだ。

「物知りですね。ダンテ」

「そうかな？ 旅をしていたら普通に見られるよ」

「私はあまり旅をしたことがないですから」

「そうなんだ？ それならこれからもっと面白いものが見られるよ」
「楽しみです」

無表情だがノゾミは喜んでいるようだ。そんなほのぼのとした会話に、ソネットの不安が少し和らいだ。

「カンタロウ君！ ほら見る！ 蛇だ！ 食おうぜ！」

「……でかくない？」

キクが片手で振り回している蛇は、カンタロウが引くぐらいでかかった。

太陽が頂点に近くなってきた。

森林に入り約2時間、マルスオフの攻撃は気持ちが悪いくらい静かだった。

巨木が寿命を終え、真横に倒れている。緑のコケが巨木の最後の生命を吸い取るようになっていく。カンタロウ、キク、ソネットの3人は、その上を難なく渡っていった。大人ではなんでもない

障害物でも、女の子にとっては巨大な壁で、その幹を越えるのは至難の業である。線の細いノゾミは無表情だが途方にくれた。

「ノゾミ」

ダンテが手を出してくれた。ノゾミはその手を取った。それでどうにか巨木を越えることができた。白く細い指が、子供の指にしてはゴツゴツした太い指と絡まる。その感触にノゾミはいつも驚いていた。同じ年齢で性別も違うが、ここまで皮膚の感触が違うものなのか。

「どうしたの？」

「いえ」とノゾミは首を横に振った。

——どんな生き方をすれば、こんな指になるのでしょうか。

屈託のない笑顔を向ける少年に、ノゾミは徐々に興味を覚え始めた。

しばらく森林を歩いていると、急にダンテがムズムズし始めた。

カンタロウに何か聞きたくて仕方がないようだ。

「ねえ、カンタロウさん」

「なんだ？」

ついにダンテは気になっていたことをカンタロウに聞いた。

「魔法について教えてよ」

どうやらキクの魔法が衝撃的だったらしい。町や都市では魔法は規制されているので、滅多に強力な術を見ることはないのだ。

「『一桁詠唱』のことか？ お前の母ちゃんから教えてもらったことはないのか？」

「ないよ。母さん魔法使えないもん」

ダンテは口を尖らせた。

「ダンテ、使えないんじゃないわ。使わなくても大丈夫なの」

ソネットは虚勢を張るかのように、腰に手をやった。

「ふーん……まあいいわな。この世界で魔法の元となっているものは何かわかるか？」

「魔法の元？ うーん……神様？」

「そう。世界を創世した『13神』だ。幻影のレパード、物質操作のロコ、模倣のクラウン、水のランゲ、監視のコンスティン、生命のグリード、炎のインバルン、重力のエンブネス、風のマルス、無のザクロ、氷のレトリック、最初の息子ファースト、造物神ロードの13神だな」

「みんな『息子』って呼ばれてたんだよね？」

「そうだ」とカンタロウは頷いた。

「これらの神はすでに体をなくし、『力だけの存在』となり神脈に力が溶け込んでいる。神脈とはこの星全体の地面を通っているエネルギーのことだわな」

「それくらいだったら私だって知ってるわ」とソネットも割り込んできた。

「魔法を使う者は詠唱と呼ばれる『赤の言霊』を唱える必要がある。神の力を借りるためのキーワードを一字一句間違ふことなく読むことで、魔法は発動する。一般的に魔術師でなくても魔法は使うことができるが、強力な魔法は呪文を間違ふと暴発するので注意がいるわな」

「ふんふん」と初めて知った知識に、ダンテは興味深そうに首を動かす。

「だが、それでは時間がかかる上にマルスオフには対応できないということ、呪文は簡略化されていったがそれも限界があった。そこで赤眼化の誕生だ。お前も見たいように神の印が右半身に現れるのは、神脈から魔力を吸っているからだ。右目下の文字は神脈を魔力に変換する電動機みたいなもんだな。この2つができて初めて『一桁詠唱』は可能になる」

「えー。赤眼化しないといけないの？」と、赤眼化できないダンテはがっかりした。

「続けるぞ？ 一桁詠唱は『神の名＋イメージする魔法』で発動可能だ。直接言葉で表現することによって、自分が思っている魔法を発動することができる。かなりの熟練者になると、身振り手振りだ

けで魔法を発動することもできるようになるそうだな」

「詠唱、必要ないんだ？」

「だがやめておいたほうが無難だな。何せイメージが崩れれば魔法が術者に逆流してしまう。いわゆる自爆というやつだな。魔法を使う者は細心の注意と安全性の確認をもって行ふべし」

カントロウの魔法講座が終わった。

「他に何か教えてほしいことはある？ お姉さんが何でも教えてあげる」

キクがダンテの肩に手を置く。手つきがどこなくいやらしい。その手をソネットが素早くつかみ上げた。

「私の息子に触れないでくれますか？」

「あだだだ！ ごめん！ ごめんってば！」と背中に手を回され叫んだ。「ふしゅー」とソネットから鬼神の吐息が漏れた。

「じゃ、マルスオフって何？」

ダンテは学校に通っていないので、世間の常識に疎かった。カントロウは嫌な顔一つせずそれに答えた。

「マルスオフってのは、『5番目の息子』風のマルスが作った化物のことだ。昔はマルスオフがない時代があつて、人が最も発展していたらしい。その均衡を崩したのがマルスだ。神々の争いによつて母胎を失ったマルスは世界に絶望し、破滅へと向かったと言われている。動物実験や人をさらつては人体実験を繰り返し、マルスオフという化け物をこの世界に解き放った。のちに人間に倒されるまでマルスの凶行は続いた」

「ちなみにマルスに協力していたのが『8番目の息子』生命のグリードね。純血のマルスオフが異種交配を繰り返し、さっき私達を襲った亜種が数多く生まれてしまったわけよ」

キクがカントロウの話を補足した。

「純血のマルスオフはすごいのか？」

「あれ程度じゃすまない。帝国認定レッドがダーククラスだ。その凶暴性から目立ちやすく、人間にほとんど駆逐されてしまい絶滅気

味ではあるがな」

現実、純血のマルスオフは人を見れば襲いかかり、どんな強者でも逃げださなかった。逃走本能は動物に自然にそなわった生存戦略である。これが取り外されているのだから、生存確率は非常に低い。今ではその活動はすっかり沈静化されてしまっていた。

「マルスオフがいない時代か……ほんと、そんな時代がくれば世の中平和なのにな」

それは全人類が願う希望だろう。

「じゃ、エコーズって？」

「エコーズとは繰り返し旧世界の帰還を呟く者、人間がこの世界に生まれる前からいた旧世界の遺物だ。元は新世界になる前の人間だったと言われている。13神が『力だけの存在』になる前までは、神の力によって行動を押さえられていた。だが、神がこの世界にいらなくなつてからはマルスオフを使い、帝国に攻め込むようになった。それがおよそ100年前、『生命の樹』が地図から消滅してから始まつたと言われている」

「……あなた以外に物知りね」

スラスラとしゃべるカンタロウを、ソネットは少し尊敬した。

「こんなの常識だよ。知らない君がおかしいの」

「ぐっ……」とキクに突っ込まれ、ソネットの言葉が詰まつた。

「あつ……」

ノゾミの足が止まつた。

その視線の先には何かの鳥が地面に倒れている。

フクロウの死骸だ。

何者かにやられたのだろうか、枝をつかむ大きな足はもはや力なく、茶色の毛の中に埋もれた両目は静かに閉じられている。

まだ生きているのではないかと思うくらい、死を迎える前の姿そのものだ。

ノゾミの様子に気づいたダンテは、何事かとフクロウの死骸とノゾミに視線を交互させた。

ガサッ

「何っ!？」

草むらが動いた。森の奥から足音がする。ちょうど木の影になっており、姿が見えない。

「またマルスオフか？」

カンタロウとキクが剣を構える。ダンテはノゾミを後ろにやった。

「おっ？ よう!」

草むらから出てきたのは、狐目の男、ヤンだった。

2 - 6 ヤンの正体

「あなたヤンじゃない!?」

懐かしい友に会ったように手を上げるソネット。それにヤンも気づいた。

ヤンは旧世界の塔で出会った時のままの格好で、武装工作服を着ていた。薄い金髪の髪を上にした、特殊ヘアバンドによるツンツンスタイルも健在だ。物を収納するいくつものポーチ、ホルスターには小型銃が見える。

「おおう!? お前か? よくあんな砂蟻の大群から逃げられたな?」

「あなたもね」

「確か……カスパルのベッキーちゃん?」

「ソネットよ!」

「冗談冗談」とヤンは白い歯を見せた。カンタロウとキクが顔を見合わせる。

「知り合いか?」

訝しげな表情になるカンタロウ。

「同じハンターよ。あんたもエリニウスに雇われてたんでしょ?」

「そうだよ。お前とは別口で雇われてた。いや、それにしても助かった。森に入っただけで迷っちゃった」

恥ずかしそうに頭を掻く。こんなに深い森林ではあり得ることだ。

「馬鹿ねえ」

「ところで後ろの4人はどちら様?」

ヤンはソネットの後ろの4人を知らない。

「ああ、帝軍のカンタロウさんとキクさん。そして私の息子ダンテと……」

1人1人紹介していったが、ノゾミの所で迷いが走った。ダンテの後ろでノゾミは修道服についているフードを目深にかぶっている。

自分が他の人間とは異質なのを知っているのか、無自覚に行動したようだ。

「どうした？」

「むっ、娘よ！ ちょっと人見知りだからフードかぶってるの」

ノゾミが『神の血脈』をもっている事は言わないことにした。例え同じハンターでもヤンはそこまで信用できないようだ。

「ほう？ 何か修道服を着てるみたいだけど？」

顎をさすって細い目をますます細める。その修道服はエリニユスの物であることは一目瞭然だ。動揺からかソネットは手を慌てふためいた。

「服がなくなつて貰つたのよ。別にどうでもいいでしょ！」

さらに下手な言い訳をしてしまった。

「そういえば……『神の血脈』はどうしたんだろうな？ 行方不明みたいだが……」

「契約途中だったから私は知らないわ」

ソネットは会話を断裂させた。

「まあいいや。俺はヤンだ。流れハンターをやってる。よろしくニヤ」

「ニヤ？」キクが首をかしげた。「口癖よ、口癖」とソネットは補足した。

「この森を通るってことは、湾岸都市に行くつもりか？」

「そうよ」

「なるほど。ちょうどいいや。俺も急用でそこへ行くつもりだったんだ。仲間に加えてもらえないか？」

拝むように、手を合わせた。

「いいわよ。ねっ？ 協力し合いましょ」

ソネットは快く受け入れた。

「それはありがたい。よろしくニヤ」

「こちらこそ」

お互い握手を交わそうと手を差し出す。

「ソネット、待て」

それをカンタロウが止めた。

「ちよつとこつちへ来い」

「何よ？」

カンタロウとソネットはその場を離れた。ヤンに聞こえないように小声で話す。

「誰か知らないが信用していいのか？」

「別にいいでしょ？」

「こつちには『神の血脈』を持つノゾミがいる。気づかれでもしたら変な噂がたつ」

「それを言うならあんた達だって信用できないじゃない」

その言葉にカンタロウは心外そうな顔をした。

「俺達はちゃんと大帝国の証明があるだろう？」

「どうだか。とにかくいいじゃない。困ってるようだし、仲間にしてあげましょうよ」

「しかし……」

「それならこの森林を抜けるまででいいじゃない」

「うむ……」

実はソネットはそれほどヤンを信用しているわけではなかった。

しかし、目上の人間に何かを言われれば、反抗してしまう性格である。帝軍という絶対的な肩書きを持つ、キクやカンタロウにどうしても主張を抑えられないようだ。

「何か突然のことで申し訳ないニヤ」

揉めている原因が自分だとわかっているのか、ヤンは申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいって、いいって。じゃ、改めてよろしくねヤン」

ソネットとヤンが握手した。

「ノゾミ？」

ようやくダントは気づいた。自分の腕をつかんでいるノゾミが微妙に震えていることに。ソネットとは違い、感情的になれないノゾ

ミは何かを伝えたくても言葉にできない。ダンテは心配になり、ノゾミの表情から心を読み取るうとしたが、無表情ゆえにわからない。次にキクがヤンの前に立った。

「よろしく。キクです」

「こりやどーもどーも。まさか帝軍さんに会えるとは思わなかった……」

キクの握手に応えようと、ヤンは手を差し出した。

その瞬間、キクは腰につけている剣を振り上げた。

木の枝から落ちてきた木の葉が真つ二つに分かれる。

「えっ!？」

ソネットは2つの事に驚いていた。

1つはキクがいきなりヤンを剣で切りつけたこと。

もう1つはキクの剣を素早くかわし、常人を超えた脚力で後ろに飛んだヤンにだ。ヤンは細目の表情をまったく変えず、その場から立ち上がった。

「ひゅゝ、危ない危ない。急に何すんのよ？」

「人間とは思えない身のこなしだね」

「まあ仮にもハンターだからね。それよりもこれはどういうことだ？ 君達本当に帝軍？」

疑いの口調になる。顔は笑っていても、声色が鋭く痛い。矛先はキクに向けられている。

「間違いないよ。だからこそわかる——君が人間じゃないってね」

「どういうこと？」とソネットは困惑する。「しっ!」とカンタロウは再び戦闘の構えになった。

「おいおい。どこからどう見ても俺は人間だニヤ。ちょっと身体能力が高いだけで……」

「私があなたを敵だと判断した理由は3つある」

ヤンの言い分を聞かず、キクは指を3つ出した。

「1つ、この状況は偶然にしてはできすぎ。あなたは森林を通れば湾岸都市に早く行けるって誰に聞いたの？」

「宿屋の親父だよ」

「どうやって聞いたの？」

「単純に湾岸都市に行く方法を聞いただけさ」

「そんなあいまいな情報によく飛びついたよね？」

「急いでいたからな」

ヤンは躊躇なく答えていく。

「ならなおのこと通らないでしょ？　だってここ帝国認定のレッドゾーン区域、つまりマルスオフ出現率80%の場所だよ。つまり入れば死ぬってわかる場所なの。大事な用があるのにわざわざこんな危険地帯を通るの？」

「……自信があるからさ。俺はこれまでこんな危険地帯を通ってきたからね」

雲行きが怪しくなってきた。明らかに言葉を考えている。

「1人で？　それ普通の人間の感覚じゃないよ」

「……………」

ついに黙ってしまった。

「レッドゾーン！？　そんなの聞いてないわよ！」とソネットは慌てた。「知らなかったのか？」とカンタロウは冷静だ。

「次に2つめ。あなたの特徴。狐目、ツンツン頭、武装工作服、もしかして無線機もってるんじゃない？」

「うつ……………」

自分の特徴だけでなく、愛用の無線機を言い当てられた。

「エコーズ『一尾』。エコーズの中ではアナログ派で、武帝国を襲ったことで有名。『24エコーズ』の1人として認知される。帝国軍関係者なら『24エコーズリスト』をもっているから誰でも知ってる」

『24エコーズリスト』とは実在するリストである。『24エコーズ』とは帝国各国にマルスオフを使い、攻めてきた24体のエコーズをさす。エコーズの中では特に巨悪で、その正体を詳細に書かれているのが『24エコーズリスト』である。このリストは世界各

国に周知されている。

「……一応聞くが、3つめの理由は？」

「ふふ。聞きたい？」

「ぜひ」

「女の勘」

ニツとキクは笑った。

「……ふふ」

ヤンはしばらく啞然としたが、すぐにその口を閉じた。

「わはははは！ いや、面白い。お前みたいな帝軍がいるとはね。それにしても有名になるとやっぱやりずらいなあ」

それは自分が『24エコーズ』だと認めたということだ。本心からおかしいのかヤンは笑い続ける。

「あなた……」

楽しそうに笑うヤンとは対照的に、ソネットの顔から血の気が引いた。もしこのまま仲間にしていれば100%危険な相手だ。

「まあいいや。それじゃこちらの条件を伝えよう——その『神の血脈』の娘を渡してもらおう」

やはり狙いはノゾミだ。すでにフードをかぶる少女が『神の血脈』を持つ女神だと気づいている。ビクリとノゾミが小さく震えた。

「条件？ どういう条件だ」

刀を抜くと、カンタロウは構えた。

「——お前達を生かす条件さ」

ヤンの線のように細い目蓋から、血のような赤い瞳が覗いた。

2・7 24エコーズ 一尾

——そんな。

ソネットはショックだった。

旧世界の塔で出会った時、ヤンは好みのタイプとは程遠かった。それでもヤンに悪い印象はない。ヒョウヒョウとしていて、どこか垢抜けていて……そう、餌さえ与えれば誰でも懐く猫のよう。自立的でマイペース、自分にはない強さ。虚勢を張り、弱さを隠してどうにか保てる自分にはない何か。

それが崩れていく。ポロポロとパズルのように。頭ではまだヤンを一尾というエコーズだと認めていない。

だけど事実は——絶対だった。

「それにしてもリストに特徴までのつてるとは……。人の姿はよくするが、何故服装までわかった？」

ヤンを改め、一尾は顎に手を当てる。

「お前が頻繁に人間の市場に出てくるからだ。しかも目立ちたがり屋で去年も事件を起こしたろ？」『24エコーズリスト』は更新されてるんだよ」

「あゝ納得」

ポンと一尾は手を叩いた。

「よく仲間から注意はつけているんだが、つい自分の改造物を見せたくてね」

「たははは」と一尾は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「どうして……どうしてノゾミを狙うの？」

喉がつかえる。こんなにも自分がショックを受けているのかとソネットは驚く。

「決まってるだろ？——殺すためだ。俺達エコーズは13神の力が苦手だね。神が消えるまで暗い闇の中にいたのさ」

「神を……恨んでいるわけね？」

「……くくく」

唐突に一尾が含み笑いしだした。

「何がおかしいの!」

「馬鹿正直な反応だなソネット。そんなわけないだろ? 別に地底暮らしなんてしてないし、他はともかく俺はよく人間の都市や町に行ってたよ」

「からかったのね!」

カツと、頭に血が上る。

「悪い悪い。年のわりにはお前は素直で騙しやすいんだよ。まるで——まだ穢れを知らない乙女のように」

「うっ、うるさいわね!」

今度は別の意味で顔が赤くなった。

「それじゃ、君の目的は何? 女神を殺すことではないのなら」

「——兵器を造るのさ」

キクの質問に即座に返ってきた答え。一尾の口元が大きく開いた。「俺は数多の兵器を造ってきた。マルスオフを使い、合成して、軍事国家のような戦車や戦闘用ヘリなんかも造った。お前達は何か作品を造ったら世間に出て人に見せたいだろう? 自分の作品がどんな評価を得るのか試したいだろ? 俺は頭の悪そうな武帝国に自分の作品を使うことにした」

「そんなことで……たくさんの人を殺したの?」

狂気の兵器開発者が言いそうな台詞だ。しかも戦争に対して何の責任も、重みも感じていない。あまりにも理由が軽すぎる。

「そんなことで? これは純粋な探求心だ。どんな威力か? どんな使い方をするのか? 俺の作品を目にした人間はどんな反応をするのか……」

「そんなことじゃないわ! 人を殺して何とも思わないのかって聞いているの!」

「おいおいソネット? その質問ははつきり答えがでてるじゃないか? お前は自分の餌になるマルスオフのことなど考えるか?」

「……それは」

一尾を攻める言葉が出てこない。人とマルスオフは違う。だけど生命は同じではないか。単純だが奥が深く、ソネットは簡単な答えを思いつけない。

「俺とお前達は種類が違う。お前達が人間なら、俺はエコーズだ。そこに超えられない絶対の壁がある。——食用の豚に同情の涙を流すのか？」

「ううっ……」と顔をしかめるソネット。一尾はすでに割り切っている。もう自分は人と仲良くなどしないと。いつでも裏切るのだと。

「何悔しそうな顔をしている？ 一時でも、一緒の時間を共有した仲となったことで愛情でもいただいたか？」

「いにくくないでしょ！」

凶星なだけに語気が荒くなる。もう一尾と握手できそうにない。

ソネットのあふれ出る感情が、涙目となって表れる。

「そう——それでいい。俺とお前の関係はそれでいい」

一瞬だが一尾の顔が緩んだ。まるでソネットに嫌われて安心して見えた。あまりにも一瞬だったため、誰にも一尾の感情は気づかれなかった。

「さて、話を戻すぞ？ 最初は武帝国攻略を目標にしていたが、さすがマツチヨの大国。戦況はいつの間にか不利になっていた。なによりも俺が飽きた」

またふざけた理由だ。もうソネットは何も言わなかった。

「そこで兵力を強化しよう」と情報を集めていたら、エリニユスが女神を手に入れたという。確か、エリニユスの派閥の1つ『烙印の瞳』だったか？ 半信半疑だったが、とりあえずあの髭の大将の護衛というチャンスを得ることができた」

「結構、めんどくさいことするんだね」

呆れたのかキクが両手を広げる。

「そついうのが好きなんだよ俺は。後は老齡のエコーズを使ってあの旧世界の塔を襲わせた。女神がいる部屋はわかっていたが、力があるかどうか試したかったからな」

「老齡のエコーズを？」

刀の構えを崩さないまま、カンタロウはオウム返しに聞いた。

「エコーズはこの世界に浮遊し、目に見えないウィルス『紅姫』の抗体をもっていない。死ねば『赤い花』にその身を喰われる。邪神の血となり肉となってしまう。それは人間に殺されるよりも屈辱だ。安らかな死を与える代わりに塔を襲えともちかけたら、あつさり乗ってきた。まっ、実際は異世界に送っただけだけだね」

旧世界の塔が襲われたのは、ただエコーズがこの世界の人間を嫌ってではなく、裏に複雑な要因があったようだ。

「さあ、話しは終わりだ。よくわかったろ？」

「適当感があるけど長い話、ありがとう」

「はは……やはりお前は面白い」と一尾はキクに向かって言った。「では——女神を渡していただこう。そうすれば戦いだけは避けられるぜ」

ローブを頭にかぶるノゾミはまったく反応しない。一尾の八重歯が口からはみでた。

「お前の肉体を滅ぼし、『13神』と同じく『力だけの存在』にしてやろう。そして俺の兵器となり——絶対的な恐怖で世界を支配してもらっ」

一尾の前に、ダンテが一步でた。「うん？」と一尾が反応した。

「力だけの存在……それは……生きてるの？ 花を綺麗だと思ったり、星の輝きに喜んだり、鳥や動物達と遊んだりできるの？」

「できないなあ。ただとただの人間として生きるよりかはマシだぜ？」

一尾の表情が張り詰める。

「もし女神の力がないとしたら……お前達帝軍がその子を護るか？」

ハンターがお金にもならないその子を守るか？——エリニユスの信者が命をかけて、その子を守る必要があるのか？」

ノゾミの瞳から一筋の雫が流れた。

何かを思い出しているのか、激しく動揺している。

雫は地面に落ちて粉々に砕けた。

言葉にならない感情が、ノゾミの涙を促す。

「ただの人間に価値はない——大切な人を失っても、流れない涙に
してやるう」

「もう……もうやめろ！」

叫ぶダンテ。興奮から言葉が引きつる。息子の激しい感情にソ
ネットは目を開く。

「ほう」

「僕はお前の言うことなんか聞かない！ だから——ノゾミに神の
力がなくなたって護ってみせる！」

「威勢がいいな。いや、いいことだ。子供は元気でなくっちゃ」

人間の言葉は、エコーズには届かないのか。一尾は平然とダンテ
の言葉を聞き流す。いや、むしろ人間の言葉を信用していないのか
もしれない。それを表すように、一尾は自分の耳を指でほじくった。
激しく呼吸するダンテの肩に手が置かれた。ダンテは空を見上げ
た。

「カンタロウさん……」

「まっ、そういうことだ。お前にノゾミは渡さない。ほしけりや俺
を殺していけ」

刀を構え、戦闘の態勢になるカンタロウ。

「答えは出たよね。言っとくけど、ノゾミは私のものだから」

キクも剣を構え、カンタロウの横に立った。「いや、お前のもの
じゃないわな」とカンタロウは突っ込んだ。

「ヤン……いえ、一尾。あなたと初めて出会った時、生理的に受け

つけないと思っただけ。今はますます駄目になったわ」

ソネットもキク、カンタロウと並んで横に立つ。ノゾミを渡すつもりはないという全員の意思表示だ。予想外の展開に、ノゾミ本人は驚き皆を見上げた。それはそうだろう、自分を目の前のエコーズに渡しさえすれば全員が助かるというのに、わざわざ戦いを選ぶというのだから。

「まっ、こうなることは予想済みだ。なんつったって強者同士。話し合いは土台無理。ならば戦いで決めるしかない」

パチン

一尾が指を鳴らした。

突然、地面に円形魔法陣が描かれ、星のように光った。

太陽の射さない森林に、不気味な光が蛍のように仄かに大木を照らす。

「何っ！？ 円形魔法陣！？」

普通魔法陣は手でもって描かれる。

それが指1つで構築できるのだ。

相当な実力者でなければこんな芸当はできない。

「召喚魔法だ。一尾といえば『殻のマルスオフ』の使い手だ。油断するなよ」

カンタロウの言うとおり、茶色の固そうな装甲が巨大な魔法陣から姿を出す。砲弾をまっすぐ飛ばすための長く大きな筒が3つ、ゴツゴツした凸凹の表面、狭い森に似合わない巨体。いびつな姿をした戦車型マルスオフが、戦闘を前にして喜び叫ぶ。

「もとより戦うつもりだったんだよ。——うまく女神を護って死んでくれ。帝軍にハンターさん」

一尾はマルスオフの上に乗ると、そこから5人を見下ろした。

2 - 8 24エコーズ 青火と紅葉姫

戦車型マルスオフは歓喜するかのようにキヤタピラを回す。左右の5つある車輪が「ガララララ！」と轟音を鳴らし、召還魔法陣を荒く削った。岩が砕け、石が飛び散り、悲鳴を上げながら大木が倒れ死んでいく。長い筒が自在に動き、木の幹を木っ端微塵に砕いていく。その行動は破壊神そのものである。

「アドバイスだ。うまくよけるよ。コイツの火力は半端ないからな。まともに当たれば体は残らないぞ」

余裕の笑みを浮かべる一尾。

一尾の足の下でマルスオフの大きな目がカツと開いた。グルグルと眼球が動き、敵に焦点を合わせる。破壊できる敵に打ち震え、口のない巨体をさらに振動させた。

「カンタロウ君！」

「わかってるわな。ノゾミ、俺の背中に乗れ」

すぐにキクとカンタロウは行動を開始した。腰を降ろすと、ノゾミに背中に乗るように催促する。ノゾミは躊躇した。

「どうした？」

「カンタロウ——私を置いていけば助かるのですよ？」

「……それで？ とにかく乗れ」

「……………」

ノゾミは手を握りしめ、胸に掲げて迷う。だが時間がない。決心すると、言われたとおりカンタロウの背中におぶさった。

「ダンテ君、おもしろい走りる？」

「うん。大丈夫」

「コケるなよ」

頷くダンテ。2人が何をするのかまだわからないが、生きる意欲

だけは感じ取れる。

「何？ どうするの？」

帝軍の行動がわからないソネットは、剣を抜いたまま困惑している。

「準備できたぞ」

「よっしゃソネット！ とんずらするぞ！」

言うが早いか、カンタロウはノゾミを背負い、キクはダンテの背中を叩くとその場から全速力で逃げだした。

「……へっ？」

「母さん！ 早く！」とダンテも倒れた大木を飛び越えて逃げる。肉食動物を見つけて、草食動物が我先にと逃げていくかのようだ。もう帝軍2人の姿は森林に隠れてしまっていた。

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

ソネットも剣を背中にしまい逃げる。背中からマルスオフの圧力の高い威圧感がある。後ろを振り向かず、ただ全力で疾走する。

「……あれ？ ……おい……」

まだ召喚魔法陣からマルスオフは体のすべてを出していない。全力で逃げた5人を一尾は追いかけることができない。むしろまさか帝軍が、ブラックリストにのっている自分を前に逃げることなど想定外だった。

「どうして逃げるのよ！ 戦う雰囲気だったのに！」

さっそくソネットがカンタロウに突っかかる。

「一尾は『24エコーズ』の1人だ。あんなのとまともに正面から戦う必要はない」

赤眼化していなくてもカンタロウの身体能力は高い。進行に邪魔

な木を体に当てることなく、ピョンピョンかわしていく。背中に乗っているノゾミは怖さからか両目を閉じていた。

「でもあなた達『死帝』って呼ばれてるんでしょ!」

『死帝』とは『帝国軍第四類』のもう1つの呼び名だ。ある犯罪者がその容赦ない攻撃と高い能力ゆえに、恐れをなしてつけたあだ名である。そのイメージは人々に伝えられるうちに変質し、どんな敵でも逃げ出さない『最強の軍隊』となっていた。男の子のなりたて職業ランキングを押し上げている強烈なインパクト要因である。

「チチチッ……。ソネット甘い。アイツ絶対戦いのための準備ちゃんとしてる」

「どうしてそんなことわかるのよ？」

「指パッチンであんな巨大な召喚魔法使えるわけないじゃん。きつと他にも魔法仕込んでるよ。きつと」

考えてみればそうだ。あまりにも出来過ぎている。いくら『24エコース』といえど、召還するものを即座に決め、しかも都合よく狭い木々の間ではなく、広く開いた木のない平地で召還魔法陣を発動できるだろうか。1つ1つ潰していけば、これはかなり綿密に計画されている。

「そつ、そつなの？」

自分の考えの浅はかさによつやく気づく。

「とにかく運がよかったのはあいつは南側にいたってことだ。俺達は北側を目指してこのまま進んで行けばこの森林を出られる」

「無理して戦う必要はないってこと」

どういふ経験を積みばそんな決断をすぐにできるのだろう。黙って従えば助かるかもしれないとソネットは思った。ただ、1つだけ納得できないことがある。必ずこの戦いが終わったら聞いてみよう、言葉を心の奥底まで詰め込んだ。

「……まさか逃げるとわね」

マルスオフの召還は完了した。だが敵がいらない。不発となったストレスからか戦車型マルスオフの両目がしきりと回る。

「人間つてのは予想の斜め上をいく。せつかく準備してたのに。俺の攻撃で傷を負いながら逃げるってシナリオだったのに」

砲塔のハッチに座り、顎に手を乗せ逃げた敵の方角を眺める。緊迫した場面から、あまりにも呆気ない結末に、つい緊張がゆるみ隠していた尻尾が出てしまった。この茶色毛の尻尾は一尾の体の一部でピコピコと動く。

「……やはり人間つてのはわからん」

ソネットに嘘をついていたことが1つある。武帝国に攻め入ることを「飽きたからやめた」という理由だ。実はそうではなく、追いつめられたのだ。

当時、マルスオフの司令塔である一尾はいつものように戦争に出ず、森の奥へと隠れていた。マルスオフの視覚を自分の視覚とリンクさせ、戦争を眺め指示するのが一尾の戦争スタイルだった。自分の正体がバレず、しかも傷つくこともないという完璧なやり方だと自負していた。しかし、居場所が相手側にわかり、思わぬ攻撃を受けた。

まだ若い3人組の戦闘員だった。武闘赤眼化し、不意をつかれた。奇襲攻撃は成功し、一尾に重傷をおわせ、戦争は終わったのである。それから一尾の災難は続いた。

自分の正体が詳細に敵に知れてしまったのである。『24エコーズリスト』という不名誉なリストに入れられてしまった。あんなリストにのるエコーズは戦争の素人だと思っていたのに、まさか自分が書き込まれるとは思ひもなかった。頭の悪い国だと思って油断した愚かな自分。知恵のある動物に攻撃を加えると、必ず思わぬしっぺ返しをされる。一尾はようやく『人間』を学んだのだ。だから

こそ慎重に戦いを進めなければならない。

「さて、それじゃアイツ等に連絡しておくか」

一尾は無線機を取り出した。

「もしもし？ もしもし」

応答がない。ノイズだけが波打っている。

ガサツ。

木の枝が震えた。空から2匹のマルスオフが落ちてくる。

「うん？ なんだ？」

1匹は灰色の狼。後肢にある4本の爪を地面にたて、2本足で立ち上がる。長い顎を開け、発達した裂肉歯が丸見えになるまで口を開く。

もう1匹はコウノトリだ。森林の入口で、ソネット達に驚いていた野生の鳥である。ふわりと舞い降りると足指を地面にくいこませる。狼と同じく、上顎と下顎を大きく開いた。

【どうなったんだよ！】

灰色の狼から若い男の声がする。

【待ちくたびれたぞ。わらわは暇は嫌いじゃ】

コウノトリからは女の声がした。どうやら無線機は使わず、マルスオフの口と自分達の口をリンクさせているようだ。

「あれ？ お前等無線機は？」

一尾はまったく驚かない。声の主はわかってるし、目の前の2匹は獣の皮をかぶったマルスオフである。つまり、エコーズの操り人形なのだ。

【あんな扱いにくいアナログ機械使えるか！ マルスオフ使えばいいだろうが！】

【まったくじゃ。あの機械はわらわの部下が踏んでしもうた】

不平不満。使う機会の少ない無線機はすでに放棄されていた。一尾はそんなことでは怒りはしないが、女の無線機を壊したという単語にはピクリと眉を寄せた。

「……青火。お前も壊したのか」

無線機はかなり高価な物だ。一尾の口調が変わる。それを微妙に感じ取ったのか、青火と呼ばれた若い男の声が慌てた。

【壊してねえよ！ 俺の部下が飲んじまったただけだ！】
それは壊したと同義だ。

「はあ……」と一尾はため息をついた。そして無線機のすばらしさを教えようとした自分が馬鹿だったと後悔した。

「お前等後で弁償な」

【なっ！？】

【うっ！？】

2人のエコーズは絶句した。

【コホン……ともかく。計画は進んでおるのか？】

女のエコーズはとりあえず話題を変えた。

「バッチリだ。この森林の出入り口はすでに把握している。お前の方へ向かったぜ。青火」

【そうか！？ ははっ、燃えてきたぜ！ 久々の強敵だ！】

狼の口を通して、青火が興奮しているのがわかる。

【……で、一尾。敵に……その……アレだよ。アレ】

と、興奮したかと思えば今度は改まった。

「なんだ？」

【おっ……女性はいるのか？】

「はっ！？ 聞こえないぞ？」

声が小さすぎて何を言っているのかわからない。一尾は耳を傾けた。

【女はいるのかって聞いてんだよ！】

【急に何を言っておる？ 発情した猿かおのれは】
女のエコーズが呆れている。

【ちげーよ！ 敵の性別を把握したいだけだ！】

【嘘っけ】

【ほんとだっつってんだろ！】

誤魔化すのが下手なタイプのような。表情を見なくても声からし

て嘘だとわかる。

「まあまあ。敵は5人。男2人、女2人、女神1人だ。その内訳は帝軍が男女2人。ハンターが残り2人だな」

敵の情報を詳しく一尾は教えてやった。

【ほう？ 珍しい組み合わせじゃな？】

【女が2人もいるのかっ！？】

ますます青火が女というワードに興奮してくる。

「でもその中の1人は子持ちだ。息子がいるって言うってたな」

【チツ、ババアかよ！ ババアに用はねえ！】

若い女しか興味がないらしい。ソネットの実年齢は18歳なのだが青火は吐き捨てた。熟女はお気に召さないということだ。

【……で、もう1人の女は……その……世間一般的にいうとアレだ……美人の人か？】

【汚らわしい。お前にはババアの方がお似合いじゃ】

よほど女神よりも女を優先する態度が気に入らないようだ。また女のエコーズが毒づいた。

【違っつつってんだろ！ 深い意味はねえよ。ゴニョゴニョ……】

言い訳のネタが尽きたのか最後の言葉は小さかった。

「うゝん。まあ美人の方じゃないか？ 金髪碧眼ってのは珍しいしな」

キクの姿を思い出す。人によって美人の基準は違うが、世界の人々が恐らく彼女を美女だと認めるだろう。キクには資質があるからだ。

【マジでかっ！？】

【そんなわけがあるものか。帝軍にしるハンターにしる戦士であるう？ ゴリラと同類の面構えのはずじゃ】

女のエコーズはあくまで認めない方向で行くらしい。

「それでもないぜ。ちなみに帝軍の方だ」

一尾がお墨付きを与えた。

【よっしゃ！ やってやる！ やってやるぞ！】と青火のモチベーションが鰻登りに上がっていった。

【ならば女神はどうじゃ？ まだ幼子じやろう？】

「年齢的にはギリギリだと思うが……まあ温室育ちって所か。女神として育てられたのか感情の起伏が少ないしな。神に感情は必要ないって感じ」

【ほほっ、よいよい。わらわのモノに相応しい】

幼女が好きなのか女のエコースのモチベーションもそれなりに上がった。

「とにかく、よろしく頼むぞ」

【任せろ！】

【了解じゃ】

灰色の狼とコウノトリは口を閉じると空へと舞い上がった。狼は木の枝から枝へ、コウノトリは大空へと飛翔する。残された一尾は首をコキコキ鳴らした。

「さて……マルスオフを使って奴等を追うか」

森林の北側出口となる平地。

土の栄養に乏しいこの場所では森林と呼べるほど木はなかった。

先にあるのは岩山で緑の草は少ない。森林の出口ともいえるこの平地で、狼の頭をした数十人の兵士達が、残り少ない草花を踏み潰していた。

彼等は人間と同じ2本の足で立ち、2本の腕には剣を持っていて。体は固い鎧を身につけ、一見すると普通の戦士と見間違ふ。

『コボルト』と呼ばれているマルスオフで、社会性があり群れにはリーダーが必ずいる。彼等のリーダーが高い岩の上に立った。

「よし！ お前等戦争の始まりだ！」

『ブルーレバノン』という血溝が青い剣を天に掲げ、人間でいう

と青年の姿をしたエコーズが戦闘を前にして雄叫びをあげた。釣り上がった眉に、剥き出された歯は血気盛んな若者を連想させる。髪瞳共に青く、着用している鎧も同色だ。目に止まるのは体の一部に青い炎が燃え上がっている事である。防火性のある剣や鎧のおかげで素肌をさらさない仕組みになっている。それゆえに、本人のみならず身につける物すべて青く染まる。

『24エコーズ』青火。その名の所以となる体についた青い火は、本人ですら消すことができない。

「女は生かして俺の所に連れてこい！ 男は殺せ！ いいな！」

青火の言葉にコボルト達は大きく吠えた。剣を青火と同じように天に掲げる。興奮はピークへと達していた。『獣のマルスオフ』の使い手である青火に自らの戦闘意欲をアピールしているようだ。

「ははっ！ いいぞお前等！ 楽しくなってきたぜ！ 今日騒ぐぞ！」

御輿のような建物が、木陰の地面に置かれていた。

御輿を担ぐために必要な、突き出た4本の木の棒の傍には、異様な者が立っている。

「……ふん、下品な奴等じゃ。昨日の夜もドンチャン騒ぎしおつて。まあ戦いは奴等に任せておけばよい」

移動用御帳台の中で女のエコーズが呟いた。天蓋の屋根は布で覆われ、太陽の光を薄く和らげている。板敷きの上に畳が二帖ほど敷かれ、茵いんという敷物が使用されている。脇息わきいしという肘置きに体をもたれ、口元を紅梅色の扇子で隠す。高貴溢れる格好だ。

台を持ち上げ運んでいるのは米俵の服を着、汚い布に子供の落書きのような顔を描かれたマルスオフ4体である。布の中に軟体なマ

ルスオフが入っており、女のエコーズの下僕として働いている。『布のマルスオフ』の使い手と呼ばれる所以だ。

お姫様カットの黒髪に、大人びた声色にまったく似合わない大きく幼い黒い瞳。高位な身分を表す赤の唐衣と裳を着こなし、細身の体を膨らませる。扇子を閉じれば可愛らしげな面容だ。

「初音。わらわの近くにこい」

「はい。紅葉様」

黒いおかつぱ頭の左右に、ちょうちょ結びをした赤いリボンをつけた少女が、『24エコーズ』紅葉姫の傍へと近寄る。紅葉姫の侍従として働いているのである。六芒星のような籠目の着物を着せられているようだ。

初音は紅葉の膝元に横側の頭を乗せると、その頭を愛おしそうに撫でられる。当人も可愛がられることに満足しているのか表情は緩い。

「ふふ、愛しい奴じゃ。……女神はわらわのもの。捕らえてたつぷり可愛がつてやろうぞ」

——3人のエコーズによる、女神の争奪戦が今始まった。

2 - 9 コンタクト・リンク

奇妙な鳥が、広大な森林を飛行していた。

鳥の全長は100センチメートル。種類はワシに近い。地上から肉眼でどうにか捕らえられる高さで飛んでいる。奇妙なのはその動き。鳥の特徴としてクチバシや小さな目、かぎ爪、茶色の翼はある。ただ、飛行方法は波打つような動きではなく、常に一定。それはベルトコンベアで運ばれる製品のように機械的だった。

スピードは遅く、何かを探すようにしきりに目が動く。獲物がいなかったのか、次は東の方角へと向かう。

「……行っただか？」

カンタロウが林床から空を見上げる。背にはまだノゾミを背負っていた。すぐ傍にキク、ソネット、ダンテもいる。

「どうして隠れるのよ？　ただの鳥じゃない？」

ソネットがぎゅうぎゅう詰めから不満を上げた。隠れた場所が悪く、木の影の範囲が狭かったようだ。5人は体を密着させていた。

「動きを見る。俺達が逃げてきた道をなぞっているわな」

もしかすると一尾が放った追っ手かもしれないと思っているようだ。事実、鳥は小動物を見つけても森へと降りてこない。直線飛翔を維持している。

「あの大きさだとわかりやすいわあ。鳥に擬態しているわりには、動作がわざとらしいね」

キクが手に額を当て、鳥を眺める。

「鳥は目がいいからな。もしあれがマルスオフなら、俺達の居場所が特定される」

「どうして？」

「コンタクト・リンクというエコースだけが持っている特殊能力を使っているからだ。マルスオフを操れるだけでなく五感も支配できるらしい。ということは、あの鳥の目を通して俺達の視覚情報が伝

わってしまふ。鳥の目はエコーズの目と同じ意味を持つ」

「そんなことまで……」

マルスオフを操れるということまではソネットでも知っていた。しかし、五感を支配できるというのは初耳だ。

「エコーズの生態の研究は日々続いているからね。まだまだ私達の知らないことがたくさんあるわけよ」

さすがエコーズやマルスオフを担当する部署だけあって、キクとカンタロウは敵の生態に詳しい。よくよく鳥を眺めれば、知性ある者の意思が感じられる。つまり、鳥ではない何か別の意思であるの物体は空を飛んでいるのである。

「……確かに私達を探しているようにも見えるわ」

何種類もの鳥を見てきたソネットは、素直に帝軍の言葉を信じた。それほど今空を飛んでいる鳥は怪しいのだ。

「……………」

キクは何か気になるのかまだ鳥を眺めている。

「しばらくここから出られそうにないわな」

「ちよつと……少し近いんですけど」

隠れる場所が狭いため、ソネットの体にカンタロウの体が密着する。とはいうものの、直接カンタロウが触っているわけではない。それでも男に触れられるのが極端に嫌なのか、ソネットが真顔になる。

「仕方がないわな。それに男にくつつかれたぐらいで照れる年か？」

ソネットの態度にうんざりしたのか、カンタロウは心にもない嫌味で反論した。

「なっ!?!? どういうことよ!」

ソネットが案の定食いついてくる。

「息子がいるのならもう俺達よりも年上だろ? こんな危険な状況だ。それぐらい我慢するわな」

「あなたはいくつよ?」

「21歳。キクより1つ年上だったな?」

「なら私の方が年下……あれ？ キク？」

ようやくおしゃべりなキクが、魚のように黙っていることに気づいた。「うん？ どうした？」とカンタロウもキクの様子に気づく。

「……なんでもない」

キクは鳥から視線を外した。

「気になるわね……あれ？ 何の話してたっけ？」

しばらくソネットは考えていたが、「まっ、いっか」と思考をやめた。

「カンタロウ、私を降ろしてください」

「おお、すまんすまん」

ノゾミがカンタロウの背中から降りた。しばらく動けそうにないので、カンタロウも問題ないと判断したようだ。

「とにかく慎重に北に行くわよ。このまま一尾に見つからずに森林を出られれば私達の勝ちね」

「ソネット、やめた方がいいです」

「えっ！？ どうして!？」

「——さっきのエコーズと同じ気配が北でします」

絶句。皆口が動かせない。

ノゾミの左右の烙印が心持ち輝く。注目されてもノゾミは平然としている。キクは腰を曲げ、ノゾミの視線に自分の視線を合わせた。

「ねえ、ノゾミ——もしかして同じ気配が東でもする？」

コクリと頷く。ソネットとカンタロウが目を見合わせる。

「どうしてわかるの？ ノゾミ？」

ダンテの質問にノゾミは答えられないのか首を振るだけだ。

「わかりません。でもダンテ、信じてください」

しばらくダンテはノゾミの瞳を眺めていた。濡れている瞳はすぐのように見つめ返してくる。「わかった」ダンテはノゾミを信じた。「そういえば旧世界の塔をエコーズが襲ってきた時、ノゾミは誰よ

りも敵の気配を察知できてたよ」

補足するようにノゾミの力の一端を話すダンテ。

「本当？ ノゾミ？」と聞き返すキクに、ノゾミはコクリと頷いた。

「女神……いや、『神の血脈』の影響か？」

女神という言葉を使い替え、カンタロウが腕を組んだ。

「カンタロウ君——私達とてもまずい状況にいる」

唐突にキクが真剣な表情になった。あまりにも普段と違う態度にソネットは息を飲んだ。

「どういうことだ？」

「この森林に入った時からの状況を考えてみて」

カンタロウとキクの視線が一致する。目には見えない透明な線で、2人は会話しているようだった。

「……そうか。しまった。まんまとはめられたわな」

何かにカンタロウが気づいた。腕を組んだまま視線を下へ落とす。

「何よ？ どういうこと？」

2人の間に入れないソネットがすぐに問いたです。

「——俺達が森林に入って多種類のマルスオフに襲われたろ？」

「うん」

「普通なら有り得ない。マルスオフにも縄張り意識があり、食物連鎖という序列がある。知能の高いエコーズならともかく、異種類のマルスオフ同士、共闘はしない」

確かに、種類が違うマルスオフが示し合わせたように突然襲ってきた。しかも連続的ではなく一定の間隔をあけて。考えてみれば違和感がある。ソネットは手を顎に当てた。

「……ということは？」

「一尾の仕業だ。この広大な森林で、敵の位置を探索するのは容易なことじゃない。そこで定期的にマルスオフを襲わせて、俺達の居場所をしばらくんだ」

「そうか……コンタクト・リンクっていう能力を使えば簡単だ。僕

達の居場所をつかみ、一尾っていうエコーズは偶然を装って現れる」
ダンテは理解できたようだ。

「それだけじゃないよ。南側から現れたのもきつとわざと。正体がバレれば私達が北に逃げることを予測されていた。あんな巨大な召還魔法陣を用意していた所からして正体がバレても問題はなかったってわけよ」

さらにキクが説明をつけ加えた。

「それじゃ、無理矢理アイツをハメなくてもよかったわな」

「まったくすな」

「？」。2人の言葉の意味がわからず、ソネットの頭に疑問符がついた。

「きつと来た道を戻って南に行っても無駄だね。すでに包囲されている？」

一応ノゾミに尋ねてみる。

「はい、ダンテ」

答えは予想通りだった。

「つまり……『この森林すべて』が奴等の罠だ。俺達はまんまと獵師の罠にかかった兎ってわけだな」

「そんな……それじゃ、どうするのよ？」

絶望的な状況。罠の檻に入ってしまった動物のような心境だ。暴れたとしても檻は壊れない。静かに諦めるしかないのか。

「……西へ向かうしかないか」

「逆にね」

苦渋の選択。カンタロウは出口のない西へ向かうと選択した。キクも薄々考えていたのか賛同する。

「確か、この森林は山と湖で囲まれている。山は雨によって削られ、急斜面があり危険だと思うが、俺とキクの四天の魔法を使って空を飛ばば逃げられるかもしれない。ただ……」

「ただ……何よ？」

ソネットが不安そうにカンタロウの言葉を聞き返す。

「敵もそんなことはお見通しだってこと。私達2人の魔法は旧世界の塔で一尾ってエコーズに見られているはず。もしかするとダンテ君やノゾミちゃん、ソネットを運んでいる所を集中砲火される可能性がある」

キクがカンタロウの代わりに答えた。2人は意外と相性がいいのかお互い考えていることがわかるようだ。

「湖を泳ぐつても危険だ。この森林だけで天然系のマルスオフがこれだけいるんだ。何が潜んでいてもおかしくない」

「すごく危険な賭けだけど……それでも行く？」

個人ではなく帝軍としての忠告。キクはソネットに選択を促した。

「……仕方ないわ。可能性が少しでもある方に賭けましょう」

「その意気だよソネット。よっしゃカンタロウ君。行くか！」

いつものキクに戻ったようだ。拳を振り上げ西へと進む。

「そだな」

カンタロウもその後ろをついて行った。ソネットもその後ろに続く。

「……ダンテ、どうかしましたか？」

前へ進もうとしたノゾミがふと立ち止まる。ダンテが不思議そうに空を見上げていたからだ。

「鳥の動きが……変だなって思ってた……」

翼を羽ばたかせない鳥が、今度は北東へとグルリと旋回していた。

2 - 10 透明な檻

森林の奥で、戦車型マルスオフの機関砲がランダムに動く。戦闘がないので暇なようだ。ハッチの上では、主人である一尾が寝転がっているだけで何もしない。一尾は「落ち着けよ」と尻尾でマルスオフの体を叩いた。

小さい虫が森から出てきた。腹部の両側に黒い平行線がある。透明な羽が、けたたましく神経を逆なでる。マルスオフの大きな目が、うつうつしそうに虫を追う。

アブだ。アブは一尾の体に取りつこうとしたが、逆に捕まえられ口に運ばれた。

「まだ北には着いてないのか……」

青火からの連絡がまだ来ていない。アブをカリカリ食べながら、静かに森の空気に身を委ねる。

「もしかして、畏に気づいたか？」

ゴクリとアブを飲み込む。

「まさかな。青火の奴は少し頭が弱いが、身を隠すのはうまいはずだしニヤ」

青火が森の北出口で女神を待ち構えている。もちろん直接戦闘は避け、まず女神を奪うはずだ。もし帝軍やハンターとの戦闘になれば、このマルスオフで木々を押し倒し後ろから攻め落とす。

「まっ、紅葉姫もうまくやってるし、どうあがいても逃げることはできないけどね」

一尾は北に奴等が現れなくても問題はないと暢気に構えていた。敵はもう鳥籠の中だからだ――。

ソネット達5人が、急斜面となった山を登っていた。土の表面は重力をかければすぐに崩れる。木の幹に手や足をかけ、ようやく山の上へ、上へと登ることができ。スピードは何十分の一に落ちてしまったが、空から監視しているマルスオフの目から隠れるにはこの方法しかなかった。だが、体を隠す木がしだいになくなってきている。

「カンタロウ、大丈夫ですか？」

ノゾミは再びカンタロウに背負われていた。その華奢な体では、この地帯を登ることはできないからだ。

「平気だわな。それよりソネット、ダンテ、平気か？」

ソネットが「平気よ」と汗だくの手を木にかける。「まだ、大丈夫」ダンテも必死でソネットの後ろについてきているようだ。

「カンタロウ君。私の心配はしてくれないの？」

キクが不満そうに口を尖らせる。

「大木を平然と上るお前の心配だけはしたくないわな」

「あゝ、そんなこと言ってるから女の子にモテないんだぞ。顔が地味なんだからもつと気を配らなきゃ」

「いや、お前だけ特別なのだが？」

キクの身体能力は赤眼化しなくても異常に高い。とても現役大学生とは思えない活動的な動きだった。さっさと先へと進んで行く。

「うわっ、ここからハゲ山じゃん！」

キクの足が止まった。そこから先は岩となっており木は1本も生えていない。雑草が上昇風で泳いでるだけだった。

「岩ばかりで木が少ない。飛行型のマルスオフに丸見えだわな」

カンタロウも足を止める。ノゾミがカンタロウに「降りてください」と頼んだ。背中から降りたノゾミは斜面によろけそうになったが、なんとか踏みとどまった。

「平気？ ダンテ」

「はあ、はあ……うん、わりと平気」

ダンテは呼吸を整えた。

「いい子だわ！ ダンテ！」

「むぎゅ！」

ソネットがたまらずダンテを抱きしめた。母の大きな胸に顔がうずまる。

「ここからは、魔法の翼を使って一気に飛ぶか……鳥はまだ飛んでるか？」

「いない。今がチャンスかも」

キクが確認する。空には鳥が1羽も飛んでいない。

「よしつ。まず俺とソネットが山を越える。そして山の裏側で待機するわな。2つ目の障害である湖を渡るのはその後でしょう」

カントロウが脱出計画を立てる。皆真剣な表情で聞いている。

「到着したら魔力に反応するこの水晶で合図する。色は緑だ」

「了解！」

敬礼するキク。それに対してソネットが手を上げて抗議した。

「ちょ、なんで私が先なのよ。ダンテとノゾミを先に逃がして」

「言っただろう？ 山を越えても何があるかわからない。俺とお前なら不意の危険に対応しやすいわな」

「まっ、まあ。そういうことなら……」

抗議の手を取り下げる。

「よし決まりだ。ソネット、俺に抱きつけ」

カントロウはソネットを受け入れるため手を広げた。

「はっ！？ 馬鹿なこと言わないで！」

ソネットの顔がみるみる赤くなっていく。

「そういう意味じゃない。背負うとお前が邪魔で後ろが見えない。敵の攻撃に対応するためだ」

「そっ、そうなの？」

ソネットは想像していたことと違い拍子抜けした。

「何考えてたの？ ソネットのエッチ」

「違っわよ！ 変な意味で言ったんじゃないの！」

ソネットは「ウシシ」とからかうキクに、バレバレの言い訳をした。

それからしばらく時間がかかった。ソネットは躊躇したままカンタロウの体を睨んでいる。目には完全に迷いがある。カンタロウは広げていた腕が疲れてしまった。

「……う」

ソネットが小さく唸る。顔は真っ赤になったままだ。

「どうした？ 時間がないわな。早くしてくれ」

「わっ、わかってるわよ！」

ソネットはカンタロウの催促に甲高い声で答える。両手は握られ拳となり、呼吸は不規則で激しい。相当緊張しているようだ。ふと、ソネットがダンテの視線に気づく。

「ダンテ。これは違うのよ。母さんの苦悩をわかって……」

「えっ？ 何？」

「……ふふ。とても純粋な子に育ったわ」

何の反応もない息子に、ソネットの瞳がキラリと光った。

「いい！ 絶対に変なことしないで誓って！」

「わかった。神、ロードに誓ってお前に変なことはしない」

カンタロウは胸に手を当てソネットに誓った。

「なんかすごい男嫌いだねえソネット。よく結婚できたよね？」

キクが呆れているのか片手を広げた。

「あの人は立派だったの！ それに男が嫌いってわけじゃ……ただトラウマが……」

ソネットの瞳の奥に黒い影が走る。急上昇していた体温が数度下がった。

「えっ？ 何？」

聞こえなかったのかキクが耳を向けた。

「なんでもない！ さっ、行くわよ！ 覚悟しなさい！」

「なんか俺。やられるみたいないな感じになっているわな」

ソネットは大きく息を吸うと「っ、しゃあ！」と飛び上がった。

カンタロウは「うおっ!？」と突然現れた熊に襲われる人間のごとくギョツとした。そして、ソネットはカンタロウの体に子供のように容赦なく抱きつく。重力が前へとのかかり、カンタロウは危うく倒れそうになった。

「飛びつくな! 普通に立って抱きしめるわな!」

「うるさい! 早く煮るなり焼くなりしなさいよ! 後顔近づけないで!」

もはやソネットの耳にカンタロウの声は届いていない。恥ずかしさからか、腕の力が増していく。

「カンタロウ君。不意について接吻しちゃえ」

キクが例によって2人をからかう。この状況が楽しいのだ。

「あんた! ぶっ殺すわよ!」

「そんなことしないから。力込めないでください」カンタロウは苦悶の表情で懇願した。

「ダンテ君。ママが他の男と接吻するのは嫌?」

「ちよつと! 何ダンテに変なこと言ってるの! 嫌に決まってるでしょ!」

ソネットが両目を閉じたまま大声で叫ぶ。カンタロウの耳がキンキンと振動する。

「うゝん。カンタロウさんだったらいいや」

ダンテはあっさりと母とカンタロウの交際を認めた。

「ダンテ!? 母さんが他の男のものになるのよ!? それでもいいの!？」

「ソネット、大丈夫です。私がダンテと一緒にいます」

「まだあんたにダンテはやんないわよ!」

ソネットはノゾミの突然の告白に「キー!」と叫んだ。カンタロウは「もういいか?」と状況を無理矢理元に戻した。

「それじゃキク。後は頼むわな」

ソネットを抱きかかえたまま赤眼化する。右目下の『テト』の文字が赤く光る。空を飛び回ったとされる十三神の四天の1人、イン

バルンの能力で空を飛ぶつもりなのだ。赤い炎の翼がカンタロウの背中から飛び出した。

「新婚旅行いつてらっしゃい！」

「新婚旅行言うな！」

「あつ、ごめん。再婚旅行？」

「再婚じゃないわよ！」

いちいちキクの冷やかに答えるソネットだった。

「あはは——待って、カンタロウ」

キクが飛び立とうとするカンタロウを止めた。普段なら『カンタロウ君』と『君』づけするのに急に呼び捨てだ。カンタロウはキクの変化に気づき飛び立つのを止めた。

「どっ、どうしたのよ？」

「何か——何か変」

キクは動揺するソネットを見ようともしせず森林の空を仰ぐ。

「森から鳥が出ていかない。ううん。空に生き物がいなくなってる」

「アレ？ 確かに変ね？ 鳥は鳴いてるのに？」

空には繊維のような雲しかなかった。鳥の鳴き声は森のアチコチで響いている。それなのに鳥は翼をなくしたかのように飛び立たない。鳴き声にとことなく悲壮感がある。

「……もしかして」

キクが地面に転がる石をつかむ。

「何をするの？」

「魔法でこの石を飛ばすの。見てて」

キクは赤の言霊を唱えると石を天高く飛ばした。直線上に飛んで行く石は、雲を貫きそうな勢いである。しかし、途中で爆発し、石は形を失った。その瞬間、白い光の文字と図形がおよそ直径1キロメートル波紋のように広がると、中途半端なまますぐに消失した。

「なっ……」

「石が……弾けた」

ダンテもソネットも何が起こったのか理解できない。

「結界だ——しかも姿の見えない強力な結界が空に張られてる」

キクがその現象を説明する。

「……とにかくソネット。一旦俺から降りないか？」

ソネットはまだカンタロウに抱きついていていた。

「なっ！？ 何するのよ！ この変態！」

ソネットは我に返るとすぐにカンタロウから離れた。

「いやっ、お前の方から抱きついてきたわな？」

カンタロウがいわれもない罵りに突っ込んだ。

「……そうか。もしかするとあの鳥は結界を描いていたのかも」

ダンテは昨夜描いたキクの円形魔法陣を思い出した。空を飛んでいた奇妙な鳥の動きを頭の中で描いてみると、魔法陣の形になる。それが結界の元だと気づいたのだ。

「ダンテ君冴えてる！ きつとそうだよ。どうりで何か変な動きをしてるなと思った」

「ちよつと待つて……それって私達、この森に閉じ込められたってことなの！？」

凍った手がソネットの背筋をなぞる。敵の方が自分達よりも一歩前へ進んでいるという現実。そう、ソネット達はちやくちやくと追い詰められていたのだ。

ともかく、カンタロウの提案でこの場所から離れることにした。マルスオフがさっきの石を結界に当てたことで、現場に来ないとは限らないからだ。

山を下り、森林を10分ほど歩いた所で身を隠すことにした。ここでしばらく休憩することを決める。歩いている間、ソネットは落ち着かずソワソワしていた。

「さて……これからどうするか」

カンタロウが立ったまま木に背を任せ腕を組んだ。キクは岩に腰掛け、ダンテとノゾミは並んで倒れている大木に座った。ソネットは立ったままウロウロしている。

「あの結界も一尾の仕業ね。まったくんでもないエコーズね」

まだ動揺が止まらないようだ。ソネットは自分の指を無意識に噛んでいる。

「……………」

「……………」

カンタロウ、キクは押し黙る。2人とも表情が沈んでいる。

「どうしたのよ？」

「たぶん、違うと思う」

小さく呟くキク。カンタロウも同じ事を考えているのか反応がない。

「えっ？ どういうこと？」

「推測の域を出ないけど、空の結界はこの広大な森林をドームのように覆ってる。こんな巨大で、範囲も広く、しかも生物の目に見えない透明で、破壊力も大きい結界は……たぶん一尾じゃない」

カンタロウがキクの推測に頷く。

「一尾じゃないなら……誰が結界を造ったのよ」

「恐らく——『24エコーズ』がもう1人いるわな」

ソネットは愕然とし、言葉を失った。

現在の情報では、『24エコーズ』は一尾1人だけだったはずだ。それが更新され、『24エコーズ』は2人いるとつけ加えられた。根拠となったのはやはり空の巨大な結界。それは目に見えない檻。

「『24エコーズリスト』の中から、強力な結界を得意とするのは『紅葉姫』だ。だが……」

そこで言葉が詰まる。カンタロウは指で鼻背を揉んだ。動揺を必死で抑えるためだ。

「だけど『紅葉姫』は自分の土地を守るために巨大な結界を張っているはず。外には出られないはずなの」

キクが説明をつけ足す。

紅葉姫の土地は資源豊富で、人間達に狙われやすい。そこで強力な結界を張り、人を近づけないようにしている。その反動で、土地から外に出ることができないのだ。今では女性型のマルスオフだらけの王国を築いている。

「とにかく『24エコース』クラスの敵が一尾以外にもう1人いることは確かだ」

カンタロウは断定した。マルスオフや知能の低いエコースでは、結界を構築できないからだ。その言葉には『24エコース』でなくとも、それと同等の力を持ったエコースがいると暗に含まれている。「結界を破壊できないの？ あなた達の魔法で」

「無理だ。例えば破壊できたとしても時間がかかる。その間に敵に勘づかれて居場所がバレるわな」

「それなら……それなら南へ戻って一尾を倒しましょ！ たった1人ぐらい私とキク、カンタロウなら戦えるわよ！」

「確かに強行突破という方法もある。だが、危険すぎる。相手はすでに森にいくつも罠を仕掛けているはず。一尾が苦手な神の力を使える死帝の前に、あれだけ虚勢を張れたのも根拠があつてのこと。恐らく強行突破という手段を使うことも想定されているはずだ」

ことごとくカンタロウに反論される。ソネットはそれに口答えできず、唇を噛みしめるしかない。

「それに一尾以外の他のエコースが、結界で私達を逃がさないようにするはず。まずは結界を張った主を倒さなきゃ」

キクが追い打ちをかけた。ソネットは震える体で視線を伏せた。「そんな……打つ手ないじゃない」

恐怖が体を支配する。脂汗が滴り落ちた。体が自然と恐怖を覚える。

——このままじゃ殺される。ダンテも……みんなも……。

奥底にまで飲み込んだ帝軍への疑いが頭によぎる。我慢できない。
ソネットの心が絶叫した。

「そもそも……」

「うん？」

「そもそもどうしてこの森がレッドゾーンだっけ教えてくれなかったの！　そう言ってくれば私だってこんな森通らなかつたわ！　ダンテやノゾミを危険にさらすことだっけなかった！　言ってくれてもいいじゃない！　私はまだハンターとしての経験が浅いからそんな知識なかった！　馬鹿な私につきあうことなかったじゃない！」
ソネットは全身を使って怒りを爆発させた。八つ当たりのごとく、キクに噛みつく。キクは驚いて目を丸くしたが、すぐに冷静な表情に戻った。ソネットは言いたいことを言いいまた押し黙る。

「母さん……」

ダンテが大木から立ち上がる。キクは「大丈夫だよ」とダンテに目配せする。そしてモシャモシャと頭を掻いた。

「うーん……ねえカンタロウ君。ここレッドゾーンだっけ？」

「知らんわな。こんな辺境の森。そもそもマルスオフ80%ってど
ういう根拠なんだ？」

カンタロウが視線を虚空へと向けたまま、独り言のように呟いた。
「えっ！？　だって、あなたが一尾に……」

「あゝあれ？　嘘。そんなもんじゃないよ」

悪戯っぽく笑うキク。「えっ！？」ソネットは頓狂に叫んでいた。
「あつたとしてもアテにならんわな。マルスオフだっけ移動してるし。まあ『マルスオフ出現マップ』ってのは確かにあるが、ほとんど帝国領土内だ」

「……………」

訳がわからない。ソネットは放心状態で立ち尽くした。

「はい、それでは問題です。一尾の正体を当てた1／3の根拠のう

ち、どれが正解でしょう？」

キクがいきなりクイズを出した。

「1はこの森が『レッドゾーン』だということ。2は一尾の特徴を記した『24エコーズリスト』、そして3は『女の勘』」

ダンテが手を上げた。

「1がないのなら……2かな？」

「キク、私も2だと思います」

ノゾミもダンテと同じ答えだ。

「2しかないじゃない……」

「ブブー！ 正解をカンタロウ君どうぞ」

すべて間違いのようだ。キクはカンタロウに解答権を譲った。

「3だ」

キクが「ピンポン」と拍手する。

「そう、女のか・ん」

「おつ、女の勘！？ 何よそれ！？」

「はい解説よろしく」とまたカンタロウに譲る。

「まず1は相手を動揺させるための完全なはったり、2は『24エコーズリスト』はちゃんとあつて、一尾の特徴がかかっているが情報はあまり詳しくない。確かに項目の1つに狐目、武装工作服を好む、人間に化けるのが得意とある。だがこれだけでは五分五分。ただのマニアかもしれない。その他の特徴はキクが創作したものだ」

「ツンツン頭とかは見たまま言いました」

キクはあっさりと嘘を認めた。

「3の女の勘で8割人間でないことがわかった。キクの特殊能力の1つで、人間に化けたエコーズやマルスオフがわかるんだわ」

「嘘！？」

口の前に手をかざし、息を飲むソネット。「ふふふん、尊敬しろソネット」キクは手を頭の後ろにやり自慢気に笑った。

「本当だわな。俺も未だに信じられないが、80%当たっている。それがキクが赤眼化したときに現れる文字『テファ』の能力かもしれない。それで帝軍試験の時も助けられたしな」

キクが赤眼化した時に現れる右目下の文字は『テファ』。カンタロウの持つ『テト』と違って世界に1つしかない神文字だ。ソネットは旧世界の塔や森林のマルスオフとの戦闘で何度かその文字を確認している。

「感謝しろよカンタロウ君。誰のおかげで試験受かったのか今一度よく噛みしめろ」

「はいはい。ありがとうございます」

「ぜんぜん心がこもってないじゃん」

2人のやりとりは自然で違和感がない。ソネットは訳のわからない感情で、胸が引き締まる。その対象となっているのはカンタロウだった。グツとその感情を胸の奥へ押さえつける。

「まっ、そういうことだ。3で人でないことがわかり、あとは外見の特徴から2を持ってきて、まず1で動揺を誘うという実は逆順だったわけだわな」

「だからって、いきなり剣で切りつけるものなの？」

キクは一尾に質問する前に剣で切りつけていた。ダンテがその印象が強く残っているのか疑問をキクに投げかけた。

「あれはもうお前の正体はわかってるぞという強烈な印象を与えたかったんだよ。急所は外してたよ。でもあの動きで人じゃないことバレバレだったけどね」

「一尾の奴も正体がバレても問題なかったんだろうな。かなりわざとらしくったわな」

つまり、すべてが計算づくなのだ。ダンテは2人に感心しているだけだが、ソネットの表情は暗い。

「でも……私は騙された」

一尾がエコーズであること、北に敵が潜んでいること、空に結界が仕掛けられていること。そして、ソネットは帝軍の意図にすら気

づけなかった。なによりも、一尾の言葉を信じて仲間にしようと
した自分が情けない。帝軍の言うことを聞かず、危険な森に入った愚
かさか悔やんでならない。ソネットは悔しくて無意識に歯軋りして
いた。

「ねえ……あなた達にお願いがあるの」

「何？」

「私が囹になる！ アイツ等の注意を引くわ！」

ソネットが決意し、顔を上げる。

「……………」

キクはそれに答えない。

「この森林に入ろうと言いだした私の責任だわ！ だから私が責任
をとる！」

「——ソネット」

キクがソネットに歩み寄る。ソネットはかまわず続けた。

「私が囹になって敵を引き寄せている間、ダンテとノゾミを森から
逃がして！ あなた達ならできるでしょ？ お願い！ 私のかわり
に2人を……」

「えっ？」ソネットはしゃべるのをやめ、目をパチクリさせた。

キクの両手がソネットの頬を抱きかかえるように触れる。興奮で血
走ったソネットの瞳が、ぬくもりで我に返る。

「ソネット、やめよう？ ——その方法は誰も幸せになれないよ？」

キクは柔らかな口調でソネットをたしなめる。

青空のように澄んだ碧の瞳が、興奮し、冷静さを失ったソネット
を優しく包む。

自然とソネットの目から涙がこぼれた。

「だからね？ やめよう。そんなこと」

涙はキクの手とソネットの頬でできた溝に落ちる。

暖かな感触がほつぺた全体に広がっていく。

冷めた涙は、いつのまにか太陽となっていた。

「うつ、うるさいわね！ それしか思いつかなかったのよ！」

ソネットはキクの手を振り払うと後ろを向いた。涙を拭っているのかしきりに手で目を擦る。

「うん。さてと、君も変な事考えてるだろ？」

キクが次にノゾミの所に向かう。横に倒れている大木に座っていたノゾミは、キクの気配に気づき顔を上げた。ぼうつと薄く烙印が光る。

「キク、助かる方法があります。私を――」

「はい、そこまでえ」

キクはノゾミの頬をつまんだ。柔らかく、プニプニ動く。ノゾミの白い肌が、キクの指の間で山盛りとなった。

「君もやめようね、そんな考え。いつ言おうかずつと迷ってただろ？ 幸せになれないよ。そんなことばっか考えてたら」

「キク、どうしてあなた達は私達を見捨てないのですか？」

ノゾミの目は頬を軽くつねられていても、まっすぐキクを見据える。

嘘を暴くように。

人を試すように。

「あなた達帝軍は私達を護る義務はないはず。ここで私達を見捨てれば、あのエコーズはやつかいなあなた達を喜んで逃がすでしょう。どうして逃げないのですか？ そんなことが思いつかないほどあなた達は愚かなのですか？」

ノゾミの言い方は感情が薄く、淡々としているだけにキツイ。それでもキクはノゾミの頬を離さず、優しく笑っている。

「そうだよねえ。君達を見捨てれば私達は助かる。だって実際はついていってるだけだもんね。君達を護る義務もない。お金も貰っていない。こんな危険な仕事、割に合わないよね。それでも私とカンタ

ロウ君は君達を助ける。絶対に見捨てない」
「どうしてですか？」

「だってそれが——私達が帝国軍第四類になった理由だからだよ」

キクは誇り高く胸を張る。カンタロウは静かに声をださずに笑った。

「わかりました。キク」

「なんだい？ プニプニ少女よ」

「キク、とても痛いです」

「おおうつ！？ ごめんごめん」

調子に乗ってつねりすぎたようだ。キクはパツとノゾミの頬から手を離れた。

「……ありがとう、キクさん」

ダンテは人知れずお礼を言った。

「……あぢがと」

ソネットも後ろを向いたまま、鼻水をすすり2人にお礼を言う。

「いいさいいさ」

キクは白い歯を見せ笑った。

「……まっ、ともかく。早めに対策を立てないといけないわな。どうしたのか」

「カンタロウ、1つ安全な場所があります」

ノゾミが手を上げた。「私を差し出すではありません」と一応後付けでつけ加えた。

「何かわかったのか？ ノゾミ？」

「はい……諸刃の剣かもしれません」

2 - 11 アンノウ

小さな蝶がヒラヒラと森から出てくる。翅の表面は明るい碧。後羽には2つの黒い尻尾のようなものがあつた。

鮮やかな色の光りが空間をゆらめく。細長い止まり木を見つけると、疲れたのか休憩場所として向かつて行つた。木に止まると翅を大きく開き背伸びする。止まり木が唐突に動いた。

「……時間だ。北に奴等は現れなかつたニヤ。罾に気づいたか？」
止まり木は一尾の指だつた。戦車型マルスオフが「グルル」と一尾の下で唸る。蝶がその声に驚き慌てて逃げ出した。

「悪いニヤ。お前の出番がなくなつちまつた」

一尾はマルスオフの装甲を軽く叩くと立ち上がった。

「さあ、始めようか。この森にいるマルスオフすべてを敵の探索に集中させる」

意識を集中させ、森中のマルスオフの自我をたどり寄せる。呼吸をゆっくりと吐き、神経を緩和させた。

「発見しだいマルスオフの一斉攻撃だ。たとえ逃げ延びたとしても、夜は青火が得意とする時刻。体力がいつまでもつかない？」

一尾はこれからのことを想像し、薄く笑つた。

【オイッ！】

突然現実に戻された。声の主は青火だ。一尾の集中がプツリと切れる。

青火の会話を仲介していた狼が、いつのまにか近くまで来ていた。一尾のマルスオフが今気づいたのか、大きな目をグルリと回転させる。狼の大きく開いた口から青火の甲高い声が響く。

「なんだニヤ？ 奴等がきたのかニヤ？」

【こねえよ！】

「だつたら何よ？」

【奴等の偵察に向かわせた俺のマルスオフがやられた！ 2匹もだ

！」

「どこで？」

【西だ！ 西でやられた！】

青火のマルスオフとは、一尾の目の前にいる狼と同種である。中は紅葉姫が仕込んだ軟体型のマルスオフで、内蔵、骨、脳みそはすべて食べられている。青火はコンタクト・リンクを使い、そのマルスオフを操ってソネット達を追跡していた。

「西？ やはり気づいたのか。わかった。それならさっそくマルスオフを送ることとするニヤ」

【一尾！ 今俺西に向かってんだ！】

「はっ！？」

青火は森林の出口である北を担当しているはずだ。それが西へ向かっているということは、北の戦力が大幅にダウンしていることになる。戦略的にも大きな支障となる。青火の突発的な行動にさすがの一尾も呆れた。

「大将自ら行ってどうする」

眉を寄せ、ポリポリと首筋を搔く一尾。青火はそんな様子を気にすることなく、一方的にしゃべり続ける。

【奴等西へ留まったまま動かないんだ！ 気になってよ！】

「動かない…… どうしてだ？」

【わかんねえ！ 虫の息だがまだ俺のマルスオフがそこにいる！ 行ってみようぜ！】

「あれ？ 死んでないの？」

【やられたただけだ！ まだ死んでねえ！】

状況がイマイチつかめない。一尾は考えを3つにまとめることにした。

1つは敵が何故西に向かったのか？

2つは敵が何故そこから動かないのか？

3つはなぜマルスオフだとわかってるものを生かしておくのか？

一尾はこれらの疑問を解くために、青火の待つ西へ急行した。青

火の居場所は情報を仲介してくれたマルスオフが案内してくれる。

到着すると、すでに青火が問題の場所におり、草むらに隠れていた。

「コツチだ！ 一尾！」

青火が状況を見、大声で手を振る。これでは草むらに隠れる意味がない。

「馬鹿。大声出すな」

一尾はシーと人差し指を口に当てた。

「アレだよ！ アレ！」

青火が何度も指で強調する。木がなく、開けた平地のど真ん中に、とても不自然な形で鎧が置かれてあった。鎧の傍には緑の血を流す狼型のマルスオフが2体倒れている。一尾はその鎧に見覚えがあった。

——なんだ？

鎧が切り裂かれている。それはソネット達が着ていたものだ。

ソネットとダンテが着ていたレザーアーマーが2つ。

ノゾミが着ていたリネン・キュラッサが1つ。

キクが着ていたプレートメイルが1つ。

合計4つ。

カンタロウ以外全員の鎧が置かれてある。

——鎧が切り裂かれている。何故？

切られた部分に赤い血がベトリとついている。胴部分の斜めに切られた穴から肉体は見つからない。小さな鼠が血に呼び寄せられ、鎧の穴から顔を出し鼻をヒクヒクさせていた。

「奴等に何が起こったんだ？」

「知らねえ。行ってみるか？」

「いや、やめとこう。状況がよくわからん」

一尾は慎重な行動をとる。青火は不満そうな顔をした。

（あのマルスオフ……誰にやられたんだ？ そもそもあの鎧についた血は誰のだ？ 奴等はどこに行った？）

ますます状況がわからない。マルスオフの口から空気が漏れてい

る。何かを伝えたいのか、消え入りそうな音声が空気となって耳に入ってくる。

「青火。あの死にかけのマルスオフの言葉がわかるか？」

「わかるぞ。ちょっと待ってろ」

青火は草むらから体を出すと、マルスオフの元へと歩もうとした。一尾が慌てて青火の肩を抑える。

「ちょ！ アツチ！ ちょっと待て！」

青火の体にまとう炎が、一尾の手を焦がした。一尾は「フー、フー」と手を息で吹いた。

「なんだよ？ 近くにいかないと何言ってるかわかんねえだろ？」

「明らかに罠だろ！ あんな開けた場所に出て、魔法攻撃でも受けたらどうする！ 相手は死帝だぞ……！？」

草がざわめいた。鹿がヒョコツと長い耳と一緒に飛びだしてきた。毛は茶色に灰色が混ざり、耳の縁が白い。鹿は一尾達を見ることがなくその場から逃げ出した。

一尾の心臓が激しく動機していた。口が渴く。大量の汗が流れる。体は興奮で筋肉が硬くなっていた。

「なんだよ？」

青火はケロリと一尾の様子を眺めている。

「……はあ。お前は気楽でいいな」

一尾は青火のあまりの落ち着きぶりと、警戒心のなさに二の句がつけられない。

——何が起こっている？

頂点へと達した太陽の下、一尾は額の汗を拭った。

木が規則的にざわめいていた。

2つの影が木から木へと飛び移る。枝がしなり、木の葉がかすれる。結界により空を飛べない小鳥達は、衝撃に耐えるため身を小さくした。

影の正体はキクとカンタロウだった。キクの背中にはダンテがつかまり、カンタロウはノゾミを正面に抱き、ソネットを背負っている。2人はその状態で、太い枝から枝へ飛び移っているのだ。カンタロウ以外4人の鎧は取り外され、布地の服が風に舞っていた。

「魔法を使って木から木へ渡るなんて……猿みたいね」

ソネットは2人を背負うカンタロウに遠慮してしばらく何も言わなかったが、ある程度落ち着いてきたため口を開いた。カンタロウの鼓膜にソネットの暖かい息がかかる。両肩にはソネットの腕がまわされていた。

「四天の魔力を最小限におさえ、あとは身体能力に重点をおいた移動方法だ。赤眼化の持続時間を抑制できる利点がある。それにスピードも速いし、地面に臭いも残らない。さっきの追跡者対策にもなる」

四天とは魔法の翼のことで、カンタロウはインバルン、キクはラングの力を得意としている。旧世界で見せた赤い翼と水色の翼は2人の背中から手の平サイズほどの大きさに生えている。魔力の出力を調整し、翼をあまり出さないようにすることも可能なのだ。当然2人は赤眼化している。

「別名ニンジャとも言っただよ」

先頭に行くキクが、親指を立てた。

「なによそれ？」

「俺もわからん」

2人にとってその言葉は謎だった。キクは色々な単語を大帝国立図書館で仕入れていた。

「でもよくこんな移動方法覚えてたわね？」

「昔、師匠がやってたのを真似してたらできるようになった」

カンタロウは興味津々なソネットに素直に答えた。2人を背負っ

ているのだが、案外余裕があるようだ。

「師匠つて、あなたの？」

「そうだ。俺を帝軍にしてくれた師匠でもあり、勉学の先生でもある」

「ふ〜ん……でもキクもその師匠に習ったの？」

「私はカンタロウ君に教えてもらったんだよ」

振り向かず答えるキク。ダンテはキクの長い髪が鼻に当たり、クシャミを必死で我慢している。

「俺は1年かかったのに、キクに教えたら1ヶ月で体得されたわな」
「へ〜、あなたって意外にすごいのね」

キクの学習能力の高さに感心するソネット。

「そうでもないよ。カンタロウ君の教え方がうまかったんだよ。それこそ手とり足とり優しく丁寧に、そしていやらしかったからね」

「いやっ、いやらしいは余計だわな」

「本当に下ネタ好きね」ソネットは笑った。

「でもどうして鎧捨てたの？」

「単純に重いからだ。お前達を運ぶためにな」

「なるほど」ソネットは納得した。最初、鎧を脱げと言われた時、ソネットは顔を真っ赤にして抵抗したが、結局時間がないからと押しきられた。鎧の代金は後で帝軍が負担すると約束しなければ、まだこねてただろう。

「じゃ、傷とか赤い木の実の汁とかつけたのはなんでよ？」

「ああしとけば敵が怪しんで判断にミスが生まれる。相手も十三神の魔法をまともにくらえば重傷を負うことがわかってるからな。マルスオフを置いておいたのも状況をわけわからなくするためだ——知能が高いゆえの傲慢、そして脆弱。必ず疑心暗鬼に陥るはずだわな」

どうやら作戦の1つだったようだ。ソネットは「ふ〜ん」と少しカンタロウに感心した。

「つまり時間を稼げるってわけ。今は北に罫とは知らず向かってい

と思われるから敵は何もしてこない。だけど問題は北に向か
つていないと勘づかれること。もし、気づかれれば必ず森中のマル
スオフを操ってくる」

「再びこの森中のマルスオフをコンタクト・リンクされれば逃げ場
がなくなる。居場所がわかれば敵の主力がやってくるだろうしな。
恐らく体力を十分減らしてから、一斉攻撃つてのがセオリーだわな」
「それで時間をちよつと稼ぎたかったってわけ。ノゾミの言うポイ
ントに着くまでわね」

2人の計画をソネットはまったく知らない。キクとカンタロウは
一尾を騙した時のように、口合わせも作戦会議もしないからだ。ノ
ンコミュニケーションで作戦を実行しているのである。恐らく相手
の行動で何をしたいかがわかってしまうのだ。

—— 本当、すごいわね。

ソネットは2人の仲に少し嫉妬した。

「ねえノゾミ。この先でいいの？」

「はい、キク」

「もうすぐ着く？」

「はい」

ノゾミは淡々と返事した。

今回の計画は、ノゾミが発案したことだった。ノゾミはエコーズ
やマルスオフの気配が広範囲にわたってわかる能力を有している。
その能力を生かして、森のマルスオフが一匹も近寄らないポイント
を発見したのだ。

「しかしマルスオフの気配がいつさいしないポイントか。本当に諸
刃の剣かもしれんわな」

「なんでよ？ いないなら、いないでいいでしょ？」

「何かあるんじゃないかってことだよ。それが畏じゃなきゃいいん
だけどね」

マルスオフが近づけない場所とは、神脈が異常に濃い所という
のが一般的だ。それ以外他にも要因はあるが、やはり行ってみない

ことには原因はわからない。

「そんなことよりさ。どうなのさカンタロウ君？」

「うん？ 何が？」

「背中におっきいものが2つくっついてんじゃん。やっぱ気持ちいいの？」

「あゝ」とキクの言いたいことを理解したカンタロウ。確かに背中に柔らかいものが2つのしかかっている。

「ごっ、ごめん。いつもは鎧で押さえるんだけど……その……予想以上に大きくなっちゃって」

ソネットはキクの言いたいことが、自分の胸だとわかりモジモジしながら謝る。しめつけられていた胸は、解放され自由にゆらいでいた。Hカップの胸を何とかカンタロウの背中に押さえつけて、跳ね上がるのを止めるので精一杯のようだ。

「別にいいわな。わりと気持ちいいし」

「なっ！ 何言ってるのよ！ 馬鹿！ 馬鹿！」

カンタロウの冗談に頬を赤く染めるソネット。手に握り拳をつくりポカポカとカンタロウの頭を叩く。

「あだだ、グーで殴るのはやめるわな」

「もう」

ソネットは叩くのをやめ、カンタロウの首元に顔をつけた。長髪からのぞく首肌から独特の匂いが鼻孔に入ってくる。その匂いはソネットの神経を安らげてくれる。

——いい匂い。

無意識に鼻がヒクヒク動いてしまう。ソネットは顔をうずめたいという欲求を我慢するのに必死だった。

「……………」

ノゾミはソネットの様子を食い入るようにジッと見つめていた。

2 - 1 2 茨の城

カンタロウとキクは、ノゾミの言っていたポイントにつき、木の枝から地面に着地した。「ふう！」キクが汗を拭う。赤眼化を解除し、元の碧い瞳に戻った。

「ついたのね」

ソネットがカンタロウの背中から下りる。固まった体をほぐすように背伸びした。

「はい、ダンテ君。降りて」

ダンテは「クシュン！」と我慢していたクシャミをした。キクの髪が鼻に入り、ずっとムズムズしていたようだ。

「くっ、はあ……はあ……」

カンタロウはノゾミを下ろすと、ガクリと地面に両手をついた。赤眼化を消失したと同時に体力を失ったのだ。汗が滝のように流れる。

「どうしたの？ 大丈夫？」

余裕で2人を背負っていたため、誰もがカンタロウの体調に気がつかなかった。実はかなり無理をしていたようだ。ソネットはカンタロウの傍に、すぐに行くと言中をさすってやる。

「さすがに疲れた……俺のことはいいから先に行ってくれ」

力なく笑うカンタロウ。

四天の魔法により重力は制御されている。だが、キクはダンテ1人だったがカンタロウはその2倍。魔力の出力は大きく、体に負担がかなりかかったようだ。

「そんなわけにはいかないでしょ。今度は私があなたをおぶるわ」
ソネットは背中から大剣を外し、腰を下ろすとカンタロウを誘う。カンタロウは今までされたことのないソネットの優しさに戸惑った。急激な態度の変化である。

「どうしたの？ はやく乗ってよ」

「カンタロウ君。おぶってもらえば？ プライド云々よりも体力の温存が重要だし、時間がないし」

キクが迷っているカンタロウに一押ししてみた。けっしてカンタロウは、男のプライドが邪魔してソネットに背負われないわけではなかった。ソネットの気持ちの変化に驚いているのだ。

「うん……じゃ、頼むわな」

「はい。いらつしやい」

ソネットの背中におぶさるカンタロウ。茶髪の髪の毛がカンタロウの鼻に触れる。ソネットの匂いが濃くなっていく。背負われて初めて気づいた華奢な体に驚く。

「大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫。わりと軽いわね？」

ソネットは余裕をアピールするために腕を折り曲げた。

「そうかい。すまん」

カンタロウはソネットの気遣いに感謝し、疲れからか身を任せた。ノゾミがその様子を最初から最後まで眺めていた。そして、ダンテの腕を引っ張った。

「何？ ノゾミ？」

「ダンテ、私をおぶってください」

「いいよ？ 足が痛いのか？」

ダンテはソネットと同じく剣を背中から外し片手に持った。鎧は着ていないのであとはノゾミが乗りやすいように腰を降ろすだけだ。ノゾミは準備が終わったことを確認すると、遠慮なくダンテにおぶさる。

「ダンテ、私は重いですか？」

「ううん。平気、それっ！」

「あっ！」

ノゾミは小さく悲鳴を上げた。ダンテはお遊びのつもりなのか、ノゾミを背負ったまま走り出す。草を駆け、岩に飛び乗り、木の間を走り抜ける。ノゾミは目をつぶり、ダンテの体を強く抱いた。

「ははっ！ ノゾミ、どう？ 気持ちいい？」

緑の濃い風が2人の身を切る。エネルギーあふれる若さが大地を飛び跳ねた。木の葉から落ちた虹色の雫が、蛍のように2人に降り注ぐ。

「ダンテ！ 無茶しちゃ駄目よ！」

気が気でないソネットが、たまらずダンテに声をかける。ダンテは「わかってるよ！」とはしゃぎ続ける。2人を眺めていたキクは「ふうっ」と息を吐いた。

「いいよね。こんな状況なのにとても和む光景。まるで恋人同士がじゃれあってるみたい。なんかほのぼのしてるよね？ ソネット？」

「ほんと——そうよね」

ソネットは笑っているが、目が死んでいる。口を開けてはいても、右頬が引きつる。息子が他の女と一緒にいることがよほど面白くないようだ。

「ソネット」。目が笑ってないぞ？ 口も引きつってるし」

キクは遠い目でソネットを見つめていた。

「ダンテ、怖いです」

「あっ！？ ごめん！ ちょっと調子にのりすぎちゃったね」

ノゾミが涙目になっていることがようやくわかり、ダンテは足を止めた。ノゾミは涙をダンテの肩の服で直接拭いた。

「怖かった？」

「いいえ。楽しかった。こんなことは初めてだから」

ノゾミは顔を上げ、赤い瞳にダンテを映す。顔は笑っていないが、どこことなく満足気だ。ダンテは「よかった」と喜んだ。

「……ダンテ」

「うん。何？」

「私の——感触はどうですか？」

急にノゾミの声が艶っぽくなった。ダンテの耳に甘い吐息がかかる。ダンテは少し意識が飛び、うまく単語を聞き取ることができなかった。

「なんの？」

「私の――胸です」

「骨が当たって痛い」

ノゾミはドヨンと幽鬼のような顔になった。全身から陰鬱な気が流れる。それを見たキクは笑いを必死でこらえる。

「……降ります」

ノゾミがスツとダンテの背中から離れた。

「えっ！？ どうしたの？ ノゾミ？」

「なんでもありません」

ノゾミは後ろを向くとダンテと目を合わせない。ダンテは何が起こったのかわからず、「えっ！？ えっ！？」と困惑した。

「ノゾミちよつと拗ねてるじゃん。ダンテ君もつと乙女心つてやつをわかってやらなきゃ。まっ、あの年だとまだ無理かね。ねっ、ソネット？」

「ふっ、そうよね」

ソネットは満面な笑みを浮かべている。ダンテを他の女に近寄せなかった効果が出たようだ。「うんうん」と達成感に喜びを噛みしめる。

「ソネット」。心の奥底から笑ってるぞ？ もつと本音を隠さなきゃ。あと子離れしろ」

キクの突っ込みは、ソネットの耳に届いていなかった。

しばらく進むと、森の木がざわめき始めた。太陽の光が葉や枝に遮られ、道は影で暗い。鳥や動物もあまりいないのか鳴き声がなくなった。環境が重くなり、誰も話さなくなったので静寂が継続される。

「これは……」

無言をソネットが打ち破る。まるで柱のように立つ太い木に、別の細い木が絡みついているのだ。まるでタコが8本の触腕をもって獲物を捕らえ、ギリギリと絞め殺しているように見える。細木が成長していき、自らを這う感覚はどれほどの恐怖を与えるのだろうか。

「ガジユマルだね。別名『絞め殺しの木』」

キクが静かに教えてくれる。

「どんな木なの？」

「種子を動物に食べさせて移動し、糞を別の木にとりつかせるの。そしてそこで発芽し、成長して気根をたらし、葉を茂らせ、やがて土台である木を包んでいく。木はやがて光合成ができず死に、空洞ができるってわけ」

すでに絡まれ、生命が尽きた木もある。絡まれてまだ生きている木は灰色に変色し、樹皮は裂け、はがれ落ちているものもある。生き残ったガジユマルは、触手を左右に広げ、亡者のように空へと叫ぶ。

「まるで木が木を食べてるみたいね」
的確な表現。ダンテは自然と震えた。

ガジユマルはソネット達が進む道の先々にあった。幻聴だろうか。亡者にとりつかれた木の悲鳴が旅人達の耳に入る。いや、それは亡者の絹のような叫びか。

「不気味ね……まだこの光景が続くのかしら」

さすがに精神的に応えるらしい。ソネットですら弱音を漏らした。
「あっ！ 橋だ！」

ダンテは雰囲気を変えようと、わざと大声を出した。

橋の先には異様な建物があつた。外壁にびっしりと棘のある植物が絡みついているのだ。そう、先ほど見たガジユマルが木を食らうように、茨が建物を食らい尽くしている。

シエル型の外壁の材質は石。壁は輪状となつているので角がなく

丸い。見上げても蔓となつた茨しか見えない。

「なんだあれは……城か？ 植物に覆われていてまったくよく見えないが……」

ソネットはつい「ふふっ」と笑ってしまった。カンタロウの息が耳にかかったからだ。背負っている以上密着度が高くなり、しゃべればすぐに吐息がかかる。

「うん？ どうした？」

「なんでも！」

ソネットは敏感な部分に感じてしまったことが恥ずかしかったのか、プイツとソツポを向いた。赤い玉のイヤリングが自由に跳ねる。唯一ソネットが所有する女性らしいアクセサリーである。

「橋の下は水濠か……うん？」

水濠の中は棘のある植物で詰め込まれていた。橋の上に立つとその異様な光景が5人を威圧する。棘の長さは10センチ。人間の手の平ぐらいなら貫ける。

「すごいね。湖の底にぎっしりと植物が根を下ろしている」

ダンテは物珍しいのか四つん這いになり、橋の下を覗く。水面に映る自分の顔が棘で痛々しい。ノゾミも興味があるのかダンテに習って水濠を見下ろす。澱んだ水質であっても、瞳の烙印はよく目立った。

「一応水くんでおこうか？」

「ううん。やめたほうがいい」

キクが横に首を振る。さすがに危険だと判断したようだ。

「茨の城か——嫌な予感がするわな。もういいソネット。下ろしてくれ」

「大丈夫なの？」

「ああ、ありがとうな」

頭を下げるカンタロウに、ソネットは「いいわよ」と手を振って

謙遜した。

「ノゾミ。この中にマルスオフは本当にいないの？」

「はい」

ノゾミは自信があるとも、ないとも言えないような表情だ。ただ、気配がないのは間違いないのだろう。

「まっ、入ってみたいことにはわからないでしょ」

ソネットが城の内部へと足を進める。跳ね橋と言われる木製の吊り橋は、腐食が激しく少し体重をかければすぐに壊れそうだ。慎重に橋を渡り、門へと到達すると壁に落書きがあつた。それは石で削られたもので、雑だがよく見ると何かのマークのようだ。

「ねえ？ アレ、何のマークかな？」

ダンテが一番に気づいた。ラッパのベルの上に玉のような丸いものがある。キクが何かに気づき、顎を手で触った。

「あれは……！？」

突然、遠くの森から動物とも、鳥ともいえない叫びが響いた。敵を前に興奮し、叫ぶ獣によく似ている。カンタロウとキクはそれが何なのかすぐにわかつた。ソネットとダンテも何が起こつたのか理解し、緊張で体がこわばつた。

「タイミングよく奴等が攻撃を仕掛けてきたようだね。早く入ろう」
キクに続いてソネット達は茨の城へと入っていった。

青白い火が灯つた部屋に、少女が1人いた。

部屋の中には乱雑に物体が散らかっているが、意外に広いため圧迫感がない。青白い火はパツクリと十字形に開いた、花の中心から灯されている。地下からしみでるガスを養分とし、炎を出しているのだ。それがまばらにあつた。

「神様、ミクは今日もいい子にしました」

凄まじい腐臭。寂しげな水滴音。不気味な青い火。散らかった弾力のある滑りとした物体。普通の人間であれば1分で発狂してしまいそんな環境で、少女が祈りをささげている。

「いつかあなたのお側に……ううん、パパとママの所に行かせてください」

それが少女の唯一神様に願うもの。目を閉じ、手を合わせ、呼吸を落ち着かせ、一心不乱に少女は願いを頭の中で反復させる。

祈りが終わると次は仕事だ。積み重なっている四角の箱の前に1つ1つ、花を置いて行く。無償でそれを毎日行っているのだ。光の明度は低い、すでに体が慣れているのと夜目がきくので少女にはなんでもなかった。

「お花……枯れちゃった。新しいお花もってこなきゃです」

花の数が足りなかったようだ。少女は悲しそうな顔で、枯れた花をムシャムシャ食べた。

「ブフツ、ブフツ」

少女の元へ鼻息を鳴らし、鼻の大きな動物が近づいてきた。孤独な少女にとって大事な親友だ。動物の種類でいうと、齧歯類に分類される。茶色の毛並みと細いつぶらな黒い瞳が愛らしい。水かきのついた指で、犬のように4本足で歩く。

少女のお腹が勢いよく鳴った。

「お腹すいたです。ブブタフもお腹すいたですか？」

「ブフツ」

ブブタフと呼ばれ、その動物は返事した。

「そうですか。さっき——お肉が中に入ってきたようです」

少女は笑った。水がしみだす天井を見上げ、舌なめずりをする。

少女の左目から出ている触手が波のように蠢く。

「ブブフツ！」

ブブタフも興奮しているようだ。鼻息が荒い。

「お食事の時間のようです。——お前達、捕まえてきなさい」
ズズズズ……。

地面が荒くこすられる。鋭い牙から唾液が滴る。目も鼻もないムカデのような巨大な影が、餌を求めて部屋から出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6623h/>

帝国物語 ～白百合のマリア～

2011年11月27日08時49分発行